

野上豊一郎の能楽研究

伊海, 孝充

(出版者 / Publisher)

共同利用・共同研究拠点「能楽の国際・学際的研究拠点」野上記念法政大学能楽研究所 / The Nogami Memorial Noh Theatre Research Institute of Hosei University

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

野上豊一郎の能楽研究 (能楽研究叢書 ; 4)

(巻 / Volume)

4

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

182

(発行年 / Year)

2015-03

能楽研究叢書 4

野上豊一郎の能楽研究

編集 伊海孝充

発行 共同利用・共同研究拠点「能楽の国際・学際的研究拠点」
野上記念法政大学能楽研究所



能楽研究叢書 4

野上豊一郎の能楽研究

伊海孝充編





懐中時計

法政大学勤続25年を記念して送られた銀時計。箱蓋にこの時計の由来が、妻の弥生子の手で書かれている。弥生子は豊一郎のことを「父さま」「父さん」と呼んでいた。野上文庫蔵（十二 23）



野上豊一郎肖像画

木下孝則画。教え子の中川秀秋らが、豊一郎の死後、寄付金を募り制作。肖像画は二枚制作され、一枚は法政大学（現法政大学図書館蔵）、もう一枚は弥生子へ贈られた（現能楽研究所蔵）。本作品は後者。



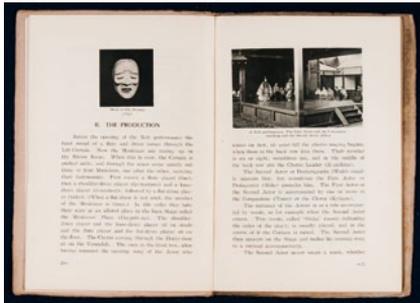
下掛り宝生流五番綴謡本

豊一郎・弥生子が稽古に使っていた謡本。それぞれが一組ずつ所持していた（弥生子の本は箱入り）。弥生子の本には各曲一丁目に観劇した日付が記され、豊一郎の本にはワキの文句を中心に訂正が目立つ。写真の「清経」には紙を貼り、文句を訂正している。野上文庫蔵（一A 19）



漱石先生追善謡会番組

大正6年(1917)6月16日に開催された夏目漱石追善の謡会の番組(漱石は大正5年12月9日没)。漱石一門の多くは下掛り宝生流の謡を嗜んでいた。この会で、豊一郎は「山姥」と「湯谷(番囃子)」を謡っている。野上文庫蔵(六F3)



JAPANESE NOH PLAYS

「能の見方」という副題が付された外国人向けの解説書。戦前に鉄道省・国際観光局が刊行した「TOURIST LIBRARY」シリーズの一つ。豊一郎は法政大学の職を辞した昭和8年以降、執筆活動を活発に行なうが、本書もその時期に書かれたもの。野上文庫蔵(十三B21)



野上豊一郎筆「葛城」色紙

能「葛城」の前シテを描いた色紙。法政大学創立70周年を記念して書かれたもの。大分県白杵出身の豊一郎は「白川」とも号し、執筆・創作を行っていた。野上文庫蔵(六C10)



野上豊一郎筆「月見座頭」色紙

狂言「月見座頭」のシテを描いた色紙。裏面には「之は古川氏へ」と書かれているので、狂言研究者であった古川久氏へ贈るつもりで書かれたものだったらしい。野上文庫蔵(六C9)



野上豊一郎原稿

野上文庫には『能百句』（八1）、『能の話』（八8）などの原稿が所蔵されており、各原稿からは推敲の過程を読み取ることができる。豊一郎は多くの著作を残したが、野上文庫に残されている原稿は多くない。



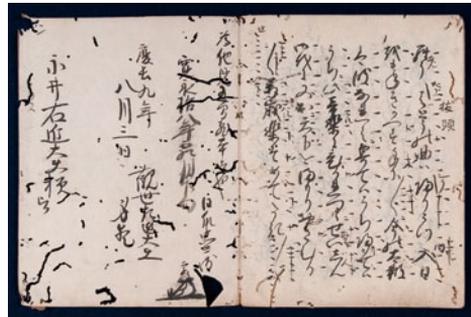
野上豊一郎ノート

野上文庫には豊一郎のノート類が多数所蔵されている。豊一郎は昭和17年に米沢上杉家の能面・能装束を調査しているが、そのときの調査結果を書き付けたノート（九1）、観能のときに書き留めたと思われるスケッチノート（九4）などが残されている。



野上豊一郎旧蔵車屋謡本

天正～慶長にかけて書家の鳥養宗（道）晰が書写・節付・刊行した謡本を「車屋謡本」という。この謡本は近世初期を代表する下掛り謡本として夙に有名であるが、豊一郎も一セット所蔵し、「謡曲車屋本考」「謡曲原典批判の一例」（『能の再生』所収）でこの本を分析している。能楽研究所蔵



日爪忠兵衛宗政手沢謡本

野上文庫唯一の古写謡本（一A1）。日爪忠兵衛は松山藩に抱えられていた役者（もしくはその先祖）と考えられる人物で、京都周辺でも活動し、本阿弥光悦などとも交流があった。本資料は室町時代の観世流本文を永井右近（直勝）に与えた観世身愛節付本などで訂正を加えており、近世初期の観世流謡本の変遷が見て取れる点でも貴重である。

はじめに

二〇一三年は野上豊一郎生誕一三〇年にあたる。これを記念して、同年十月七日に「野上豊一郎の能楽研究を検証する」と題したシンポジウムが開催し、多岐にわたる野上の研究のうち、「シテ一人主義」という有名な考え方に光を当て、検証を行なった。「シテ一人主義」は野上の研究のすべてではないが、この考え方が種々の論考の骨子となっているのは明らかである。本書はそのときの講演・発表に増補改訂を加え、まとめたものである。また、野上の能楽研究の主要要素でありながら、シンポジウムではほとんど触れることができなかった能面研究について宮本圭造氏に寄稿いただき、さらに野上文庫と野上の著作の目録を加えてある。

シンポジウムでは、野上の功績を記念して創設された法政大学能楽研究所に長年勤務された元所長・西野春雄氏に総論となる講演を行なっていただいた。また野上の論をより広い視点から捉えるため、現代の演劇にも造詣の深い小田幸子氏にご登壇いただき、伊海とともに「シテ一人主義」の検証を行なった。当日は時間の限りもあり、十分議論が尽くせなかったことも多かった。また、小田氏と伊海の発表には重複する点もあつたため、本書収録の論文では当日の発表を大幅に改訂している。結果、伊海稿は野上の論の源流をたどるような論、小田稿は野上の時代以降への影響を考える論といったような役割分担になっている。

「野上豊一郎生誕一三〇年」は、必ずしも区切りのよい記念年とはいえない。野上の業績を検証するのであれば、三〇年前もしくは二〇年後に行なうべきだった（行なうべき）かもしれない。しかし今、野上の研究を振り返ることに大きな意義があると思う。

近年、戦後の能楽研究を長年牽引してきた先達たちが相次いで逝去された。彼らの研究の中で野上の能楽論が顧みられることがあっても、彼らの研究から学ぶことが多かった私の世代は、野上の研究に目を向ける機会が少なかったといえる。これから能楽研究をさらに発展させるためには、先学の研究成果と方法をしつかりと継承していくことが必要である。その先学には戦後の研究者たちだけでなく、その前に活躍した野上のような研究者

も含まれなければならない。野上の研究を直接体験された世代を失った今こそ、彼の研究をしつかり振り返っておく必要があるだろう。

また、能楽研究に限らず現在の学術研究全体において、「学際化」「国際化」という言葉をよく耳にする。むやみに他分野との融合を図ったり、外国文学との比較を行なうことには躊躇されるが、これからの研究にはこの二つの視点を持つことは必須となっていくにちがいない。その時、どのような方法でこうした見地から研究していくべきかという点が重要になっていくが、実はこの視点をいち早く能楽研究に持ち込んだのが野上であった。彼の研究から、現在の研究が直面している課題について学ぶべきことがある。

このように現在の能楽研究は、新たな局面に直面している。だからこそ、今野上の研究を検証することには少なからず意味があるはずである。この検証を行なうのには、三〇年前では早すぎたはずであり、二〇年後では遅すぎるはずである。

野上がこの世を去り、六〇年以上経過している。彼が新しい能の見方を提示し続けていた時代と比べると、能楽研究も著しく深化した部分も多い。すでに成り立たなくなってしまった野上の論もあるが、彼の考えの粗を探しだし、現在の視点から否定することが目的ではない。能の作品をへパフォーミングアーツとして捉えようとする野上の視点には、現在の研究が学ばなければならいことも残されている。こうした再評価を行なうべく、野上が能楽研究に邁進した時代を検証し、どのような文脈で彼の論が生まれ、それがどのように受け継がれているかを考えてみたいのである。勿論、その作業が本書のみで完結するとは思えない。今後こうした検証は継続されるべきであるが、その第一歩になればと願っている。

二〇一五年三月

伊海孝充

目次

能楽研究所蔵 野上豊一郎博士関連資料

はじめに 伊海 孝充

【講演記録】 能楽研究の開拓者野上豊一郎 西野 春雄 …………… 1

野上豊一郎略年譜 …………… 23

【論文】 門外漢の能楽研究——野上豊一郎の視座 伊海 孝充 …………… 29

【論文】 ワキの役割——野上豊一郎「ワキ見物人代表」説と後代の展開・継承 小田 幸子 …………… 57

【論文】 野上豊一郎の能面研究 宮本 圭造 …………… 87

野上文庫蔵書目録 深澤 希望 …………… 103

野上豊一郎著作目録 関 栄司 …………… 155

【表紙写真】 法政大学能楽研究所蔵野上豊一郎肖像画
【裏表紙写真】 『能 研究と発見』 『能の再生』 『能の幽玄と花』 (岩波書店刊)

【講演記録】

能楽研究の開拓者野上豊一郎

西野 春雄

はじめに

今年には野上豊一郎の生誕百三十年にあたりますが、皆さんも御存じの彫刻家の高村光太郎（一八八三—一九五六）も生誕百三十年なのです。そちらも大きな美術展が開かれているようですが、このシンポジウムも、この機会に能楽研究を開拓し推進した野上豊一郎の先駆的な業績を検証し、今後の研究に役立てていこうという趣旨だと思います。私は、野上豊一郎を「能楽研究の開拓者」としてとらえ、その先見性と獨創性を中心にお話することにします。

幼少時代・学生時代

まず年譜（本稿末に記載）をご覧ください。年譜は『近代文学研究叢書』第六十七巻（昭和女子大学近代文学研究所編 二〇〇三年）を基に作成し、あと私が追加したものなども書き添えてあります。

まず幼少年代ですが、明治十六年（一八八三年）九月十四日、白杵に、野上庄三郎・チヨの長男として生まれました。家は、屋号を京屋といい、酒屋と雜貨商を営んでいました。白杵小学校に入り、白杵中学に進み、明治

三十五年三月、第一回の卒業生三十五名の中で、首席で卒業しました。幼少の頃から漢学者菊川南峰の塾で漢学を学んだり、カトリック教会の牧師からフランス語を学んだりしています。

学生時代をみていきますと、明治三十五年に第一高等学校を熊本の第五高等学校で受験しまして合格し、九月に上京し入学するわけですが、同級生には安倍能成（一八八三―一九六八）らがありました。のちに豊一郎の妻となります小手川ヤエ（弥生子）は明治十五年五月六日に臼杵に生まれ、明治三十三年に上京して明治女学校に入学しています。明治三十六年、豊一郎は寮を出て小石川区原町の塩谷家（漢学者塩谷岩陰（一八〇九―一九三五）を輩出した家）に下宿します。回家には寺田寅彦（一八七八―一九三五）も同居しており、親密な交際が始まるわけです。そこにヤエは足繁く通いまして勉強を教わったり、あるいは身の回りの世話などをしております。

そして同年、夏目漱石がイギリス留学から帰って参りまして、一高や東大で教鞭を執ることになり、豊一郎も漱石の教えを受けます。豊一郎は、これ以前からですが、『中学世界』その他の雑誌によく投稿しておりまして、白川・鳩箭（きゅうせん）という筆名を使っております。明治三十八年六月、一高を卒業し、九月、東京帝国大文学科大学（英文学専攻）に入学、翌年八月、同郷の経済人大塚幸兵衛の仲立ちで、ヤエとささやかな祝言をあげます。

ところで、豊一郎の文学方面の仕事に関しては稲垣信子氏がご主人の稲垣瑞雄氏と出している同人誌『双鷺』に「野上豊一郎の文学をたどる」を連載し、豊一郎が中学時代にしばしば投稿した『中学世界』を克明に調べております。稲垣氏は弥生子の日記を精細に追究して『野上弥生子日記』を読む』完結編上・中・下巻（明治書院二〇〇八年）をお出しになった方ですが、今は未開拓である豊一郎の文学世界の追跡を続けていらっしやいます。

初めて鑑賞した「葵上」

さて、続いて活躍前期になりますが、明治四十一年一月を見てください。池内信嘉いけのうちののぶよしが設立した能楽倶楽部の別会が靖國神社の能楽堂で行われ、豊一郎は池内の実弟高浜虚子の勧めで、能を鑑賞します。桜間伴馬（一八三五―一九二七）の「葵上」です。伴馬の芸に魅せられ、以後、能の鑑賞と研究を続けることになります。この番組を、雑誌『能楽』（六一一、一九〇八年一月）から引きます。

一月十二日（第二日曜）於靖國神社能楽堂

能楽倶楽部別会（午前九時始）

能組

巴

金剛鈴之助
矢澤徳太郎

大倉繁次郎
大倉喜太郎

寺井三四郎

独吟

二人静

平松 勝吉

仕舞

車僧

金子 亀五郎

昭君

喜多 六平太

望月

梅若萬三郎
寶生 新

石田 清吉
三須 平司

増見仙太郎
一噌要三郎

鞞猿

櫻間 伴馬
東條 照映

高 島 弥五郎
小早川 精太郎

葵上

川崎 利吉
三須 錦吾

観世 元規
一噌米次郎

蝸牛

野間 善左衛門
吉野 徳三郎

野間 善左衛門
吉野 徳三郎

龍虎

橋岡久太郎
服部 喜多
加藤 景信

吉見 嘉樹
三須 五郎

松村 言吉
藤田多賀造

半能

『能楽』には「東京能楽界」というコーナーがありまして、明治四十一年一月の番組に「葵上」が載っていました。これが分かったきつかけは、野上弥生子先生の直話からです。それは、豊一郎が企画し編修した『能楽全書』全六巻（創元社、一九四二―四四年）を、松本雍氏と私が解題や補注を加え、綜合新訂版（全七巻）として東京創元社から出し（一九七九―八一年）、最終配本の第六巻「能・狂言の鑑賞」に、完結を記念して座談会を収めることになり、古川久先生、表章先生、東京創元社の編集担当者平松一郎氏と西野が、成城のお宅をお訪ねした時に伺った話なのです。

この日（昭和五十六年四月一日）、花冷えの午後でした。部屋の暖炉にくべられた薪のパチパチはじける音や、通りのいい、優しく澄んだお声を思い出します。その時、いろんなお話が出てまいりましたが、「私どもが本当に能の有難味を感じるようになったのは、伴馬さんのお蔭なの。『ホトトギス』の高浜虚子さんが、しきりに自分で謡もやり、能も舞い始めたころ誘われて、もとの九段能楽堂へ案内され、一番初めに見たのが桜間伴馬と金剛右京（二八七二―一九三六）の二番で、なにを舞ったのかちよつと思いつけないけれど…」というお話になりました（この時のことは「思い出さずさま」〔『野上弥生子全集』別巻2にも収録。それを受けて表先生が「伴馬と右京が一緒にやる機会はそう多くないはずですから、古い番組を調べれば分かると思います」とおっしゃいましたが、その通りで、番組を探したらすぐわかりました）。

この時の出合いが、能への親炙と言いますか、能楽研究のスタートと言ってよいかと思います。そして、これ以後、金春流の桜間伴馬の嫡男、金太郎（弓川、一八八九―一九五七）との関わりが非常に深くなるのですが、そのあたりのことについては、弥生子の『鬼女山房記』『桜間さんのこと』（岩波書店、一九六四年）に書いてあります。「桜間さんに対する私の哀傷は、同じく世を去つてすでに十年になるうとする亡夫への追慕ときり放たれない」とあつて、それに続けて「彼が専攻の英文学を捨てたかたちで、能の研究に転向したのは、桜間さんのお父さんで、宝

生九郎とやらんで名人と讃えられた当時の伴馬、後の左陣の至芸に魅惑されたのが契機の一つであったので、その頃は金太郎を名乗っていた桜間さんに対する彼の打ちこみ方も、お父さんへの傾倒の延長とみられなくはない」と述べています。

そして、同じく『鬼女山房記』『高浜さんと私』に、「今になって思えば、その時の『ホトトギス』の一篇が私の全生涯のコースを運命づけてくれたようなもので、その点においても、私は高浜さんに深い感謝をささげなければならぬと信じておりますが、野上にとつても、高浜さんは或る意味において、何人とも違うほどの大事な恩人でありました。と申すのは、専攻の英文学にもまさって彼の熱情の対象となった能楽に誘い込んだのは、高浜さんが観せて下さった桜間左陣の「葵上」であつたからです。」とあります。ですから、この時の経験がとても強烈だったということがお分かりいただけると思います。ちなみに豊一郎が謡を始めたのもこの頃で、「囚はれざる能評」（『能楽』九一二、一九二一年二月）に「私が謡を初めたのは未だ高浜さんが富士見町に居られた頃の事で、宝生新さんと尾上氏とから教はつたのであつた。仲間には夏目先生も居られたし、…」とあります。

小説家としての一面

年譜の活躍前期を見てください。豊一郎は英文科に進みます。卒業論文は、ロバート・バーンズに関する論文です。そして、明治四十二年になりますと、『世阿弥十六部集』が刊行されます。早稲田大学教授で歴史学者の吉田東伍が校注し、能楽会の池内信嘉が出版しました。これが近代における能楽研究の出発点になるわけですが、その年に豊一郎は和仏法律学校（法政大学の前身）予科の英語・英文学の講師として着任します。そして、明治四十五年一月に、短編小説集『巢鴨の女』を春陽堂の現代文芸叢書の一つとして出版しています。若い時は英



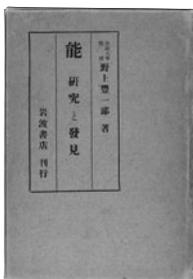
『巢鴨の女』初版
(春陽堂書店、1912年)

文学の研究もさることながら創作の仕事もやっておりました。『巢鴨の女』は非常に小さな文庫本で、装幀デザインは橋口五葉です。この春陽堂の現代文芸叢書のなかでは、皆さんも知っている作品でいえば、泉鏡花の『歌行燈』があります。これ以外にも豊一郎は小説や批評も書いていますが、後年、小説は奥さんに任せ、自分は能の研究に向かって行きます。

小説ついでに、ちよつと横道にそれで恐縮ですが、豊一郎が小説にも登場するんです。しかも法政大学能楽研究所も出てくるんですよ。なお悪いことに西野ではないけれど西野であろうと思われる人物も、モデルとして登場するんですね。これにはびっくりしました。私の娘婿が見つけた、「これお義父さんじゃありません？」と言ったのです。一九九五年に早川書房から出た原寮の『さらば長き眠り』という本です。私立探偵沢崎が活躍するハードボイルドで、なかなか面白い小説です。

フィクションですが、いい加減な設定ではなく、リアリティがありまして(著者は後記で「実在のものと同じの地名・団体名・企業名・個人名・作品名等が頻出するが、小著がフィクションである以上、書かれていることは実在のものとは直接何の関係もない」と記す)、そのために著者は能楽関係では『能楽全書』や『岩波講座 能・狂言』を参照しているのです。

さて、問題の場面は、能楽界から放逐されていた能の大築流宗家大築右近の観世流への復帰が許され、東京・文京区の関口にある大築能楽堂で開いた演能会の場面です。類まれな右近の才を惜しんだ人たちが能楽界に迎え入れたという設定なのですが、そこに「宝生も観世もそんなことはすべて承知の上で彼ら親子を迎え入れてくれたのです。特に能楽研究の第一人者野上豊一郎先生の当時のお骨折りは、一方ならぬものがあつたと聞いています」とあるのです。開明的で市民に開かれた能楽を提唱していた豊一郎なら、如何にもありそうなお話です。その演能会で、能の前に講演がありまして、「ただいまより大築流三月定期公演能を上演いたしますが、演能に先立ちまして、〈国際能楽研究所〉所長、〈カリフォルニア大学〉教授、〈法政大学能楽研究所〉客員教授で、大



『能 研究と発見』
(岩波書店、1930年)



『花伝書』
(岩波書店、1927年)

築流能の始祖であります大築右京春高の曾孫にあたられる大築春雄先生——プロフェッサー・ハリイ・エルウィン・オオツキのお話をうかがうことにします」と言うんです。これを読んだ娘婿が、「これお義父さんじゃない？」というのも無理はありません。犯人じゃなくてよかったです。

能への親炙・研究

そして、次が大正五年です。その前にも明治四十五年ヴェーデキントの『春の目ざめ』などを翻訳し、大正二年にはオスカー・ワイルドの『謎の女』など十二篇を翻訳した『邦訳近現代文学』（尚文堂）を刊行しているんですが、大正五年十二月に先生の夏目漱石が亡くなりまして、大変な衝撃を受けます。その後、昭和二年に岩波文庫が創刊されます。そのラインアップに世阿弥の『風姿花伝』、当時は『花伝書』と呼んでいますけれども、それが豊一郎の校訂で出ました。これによって世阿弥の芸術論が市民の手にわたることになったと思います。

そして、以後、さまざまな視点から能の研究を進めていきます。弥生子は昭和四年九月二十二日の日記に「父さんは能の研究をまとめるため、この頃は非常な勉強である。今日も朝から書斎籠りである。私は執筆、子供達もそれぞれ午前いっぱい勉強」と記しております。日記に「父さん」とあるのは豊一郎のことですが、このあたりからも、猛烈に勉強している様子がうかがえます。そして昭和五年二月、それまでの能楽研究を集大成した『能 研究と

『能見』を岩波書店から出版します。これは後に博士論文になります。そのころ、その他の能楽関係の本も出ていますが、まさに近代における能の研究と発見でした。例えば、「能の遊狂精神」とか「ワキは見物人の代表である」とか、「能面の中間的表現」とか、さまざまな興味深い説を提唱し展開しています。今日のシンポジウムの後半では、そういった点について話されると思いますが、新知見を満載した『能研究と発見』は能楽研究の近代を確立した出発点といえるでしょう。

謡曲研究

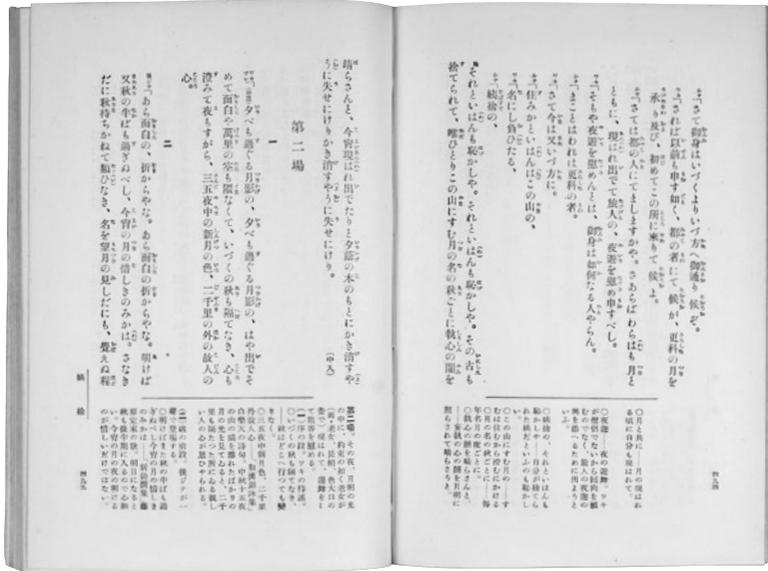


『解註 謡曲全集』
(中央公論社、1940年)

それから、その五年後の昭和十年には『解註 謡曲全集』全六巻を中央公論社から出しています。野上の仕事は、世阿弥芸術論の研究だけでなく、謡曲研究も、そして能の演出研究にも進んでいます。

謡曲集と言えば、すぐ佐成謙太郎の大著『謡曲大観』全七冊（明治書院、一九三〇―三一年）が浮かびます。たしかに、現行曲を網羅し、間狂言の詞章まで収めた謡曲集は他になく、しかもそれをお一人でやった偉大な仕事で、今も現役で活用されている謡曲集ですが、もう一つ忘れてならないのが野上の『解註 謡曲全集』なんです。

謡曲を能の脚本としてとらえ、現行二百四十番を五番立に分類し、その作品にふさわしい流儀の謡本を選び、各曲を序破急五段に区切り、脚注を施したものです。どんなところが良いかといいますと、作品の主題の把握の仕方でしょうか。この作品はどういうことを描こうとしたかを、文字だけではなく舞台的展開に沿って立体的に把握していくのです。しかも、本文の組み方も、能の台本、普通の劇の台本のように組まねばならないという主張です。凡例を見ますと、たとえば次のようにあります。

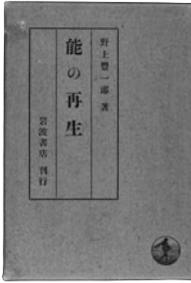


『解註 謡曲全集』

「娼捨」

「解註・謡曲全集」の本文の体裁は、役者の謡ふべき部分と地謡(合唱部)の謡ふべき部分を一目見てわかるやうに区別してある。地謡の部分は、謡曲の主体ともいふべき部分であるから、各行をペイヂの上まで一ぱいに組み、役者の部分をば、一字もしくは二字下げて組んである。一字下げてあるのは、役者の吟唱の部分(フシのある部八)であることを示し、二字下げてあるのは、役者の対話或ひは独語の部分(フシのない部分)であることを示す。これは謡曲を舞台的操作の關係に於いて読むのに最も合理的な体裁の一つであると思つて、私が大正の末年頃から謡曲をさういふ風に書き直すべきことを主張した意見の實行である。

見本として、「娼捨」を例示しました。一番てつぺんが地謡、これが一目でわかると思いますが、さうやって、一つの戯曲を読むように、展開されていく流れが分かるように工夫してあるのです。これは昭和十年五月、野上が岩波文庫から出した『謡曲選集(読む能の本)』にも踏襲されています。そして、その主題といえますか、構成といえますか、それらを凝縮した



『能の再生』
(岩波書店、1935年)

本が、『能二百四十番―主題と構成―』（能楽書林、一九五二年）です。非常に簡便でなかなかいい仕事だと私は思っております。なお、『謡曲全集』の仕事について、弥生子は「野上が、いはゆる法政事件で職を失った時、『能楽全集』（これは勘違いで『謡曲全集』が正しい）を発表してくだすつたのは、感謝の言葉もないほどのことであつた。おかげで一家は生活をどうにか守り得たとどまらず、野上はまた学校の仕事で没入できなかつた、能楽への新しい研究に専念することができたのだから」と述べています。これは「山姥独りごと」（『野上弥生子全集』二三巻、岩波書店、一九八二年）の一節ですけれど、多忙な学務から解放されて、集中して、能楽への新しい研究に専念することができると環境が出来たということなのです。

能の幽霊

昭和八年三月に、芸術家バーナード・ショウが来日しました。そして九段の靖國神社能楽堂で「巴」を鑑賞します。ショウにとって初めての能楽鑑賞でしたが、そのとき野上と一緒に解説役をしたのが詩人の野口米次郎です。このときショウがいろいろ質問しました。ショウは、日本に来て大阪と東京で歌舞伎も見ただけで、何物にも興味を惹かれなかつたそうです。ただ一つの例外が能だつたようで、芸術的に圧倒されたい。その時「巴」を見ていて、いろいろ質問する。まず前シテを見て「あれは何だ」と訊くと、「あれは巴の幽霊です」と答えた。で、後シテが登場すると「あれは誰だ」と訊く。すると「あれも巴の幽霊です」と言つたところから、幽霊は二人いるのかと疑問に思い、「どうということなのか」と質問する。説明者が困っていたら野上が後ろから、「最初は巴の化身



『能面論考』
(小山書店、1944年)

です。「後場は巴の幽霊です」と助け舟を出したそうです。化身と幽霊(本体)を瞬時に分析して、ぱっと解説したので、シヨウは非常に感心したそうです。

この時の経験を基に「能の幽霊」(『文学』一九三三年五月、『能の再生』岩波書店、一九三五年)という論文を発表しました。これは、いわゆる夢幻能を考える上で、とても注目すべき論文でして、「幻覚能」と呼ぶことを提唱しているのですが、さらに面白いのは、能勢朝次氏が「能の幽霊に導かれて」という、これもまた興味深い論文を書きました。ですから一つの論文が発表され、それを受けて、さらに面白い論文が発表されるといって、大変スリリングな展開がなされたのです。

能面研究

そして、そのころから能面の調査研究も始まります。写真撮影などの仕事にも携わっています。スケッチなどもされています。それらの成果が『能面(図版・略解)』(岩波書店、一九三六年八月―一九三九年九月。英語版も刊行)ほかに結実しています。能面研究で注目すべきは、いわゆる「中間表情説」です。

能面中間表情論は皆さんもご存じだと思います。よく「能は無表情」だとか「能面は無表情」と言いますが、そんなことはありませんね。野上が唱えた「能面中間表情説」は「能面工作の最大特色なる最も日本的な創意として表した中間表情説」です。『能面論考』(小山書店、一九四四年)に入っています。野上はまずこう考えたんです。

まづあらゆる表情の変化を研究してその中から数学で謂ふところの



『翻訳論』
(岩波書店、1943年)

昭和四十七年、私も法政大学能楽研究所の創設二十周年記念に、朝日講堂で「講演と映画の夕べ」を開きました。この時、行方不明の英語版のフィルムを探すが専任所員になったばかりの私の仕事でした。国際交流基金などツテをあたって探索し、当時、京橋にあった国立近代美術館フィルムセンターで見つけました。迫力抜群の映画ですね。今では、皆さんもDVDで見ることが出来ますけれど、この仕事をしたのが豊一郎です（この映画については野上豊一郎著『大臣柱』（能楽書林、一九四七年）が詳しい）。

そして、昭和十年には、また面白い仕事をされます。それは、鉄道省観光客局が日本の文化を海外に宣伝するために、国策として、歌舞伎などの十六ミリ映画を作るのですが、能の映画も制作することになり、それを監修したのが豊一郎でした。桜間金太郎のシテの「葵上」です。初めての能のトーキー映画で、昭和十年の制作です。監督は山本薩夫監督で、後に社会派の監督として有名になりますね。そしてこれを海外に送り出すことになり、英語・ドイツ語・フランス語版が作られました。

初の能のトーキー「葵上」

共通因数的な予件を捜し出して、それを仮面に彫り出したのである。さうすれば表情は或る特定の片寄ったものとならないで、諸種の表情位相の中間に位するやうな表情となるから、私はそれに中間表情といふ名称を与へた。中間表情は俗にいふところの無表情に近い相貌である。

この論は「能面は無表情」などという俗常識を打破した卓説として高く評価されました。

そのほか能の翻訳も含め、英文学のほか、ドイツ・フランス・さらにギリシャ文学の研究、紹介に力を尽くし、多数の翻訳があります。こうした翻訳の仕事については、昭和十三年に『翻訳論』を岩波書店から出しています。とにかく、目は日本にとどまらず、海外にも及んでいるということです。これは、大学で英文学を専攻し、世界文学の中で、世界の戯曲の中で、能をとらえようとした大きな視野から生まれていることだと、私は思います。

欧米への旅

年譜の活躍後期を見てください。昭和十三年の七月に、『能研究と発見』で文学博士号を授与されました。そしてその後で、政法大学に名誉教授となつて戻り、その九月、日英交換教授として、弥生子と共にヨーロッパ巡遊の旅に出発します。世阿弥の芸術論や能を紹介し、広く日本文化を伝えるのが目的で、ここでも、欧州の主要大学で講演したり、先ほどお話しした映画を上映したり、あるいは、美術館を巡って能面を調査したりと、精力的に活動しています。その辺の仕事の一端は、『西洋見学』（日本評論社、一九四一年）や「西洋の能面」（『能面論考』）に詳しく、大変有意義な旅行だったようです。しかし、第二次世界大戦が拡大し始めるので、かなり苦勞して欧米を脱出し、日本に帰られたようです。

能楽の普及と講座の刊行

それから大事な仕事として昭和十五年十月に、観客側が企画・主導する「能楽鑑賞の会」を提唱し、能楽書林

の丸岡大二氏を幹事として開催していることが挙げられます。シテ方とか、ワキ方とか役者側が企画するのではなくて、観客側が主宰する会ですね。それを始めたのも豊一郎です。

次が昭和十七年から『能楽全書』の刊行が始まります。能楽の本質と全貌をとらえた総合講座で、当時の学術的水準を見事に反映したすばらしい講座だと思えます。

これまでも、能・謡曲の講座はさまざまありましたが、主に能や謡の稽古をしている能楽愛好者向けの講座でした。それに対し『能楽全書』の特色は「広く知識階級を目標に高度な能楽の啓蒙を試みた」ことでありまして、画期的な企画であると言えます。各巻の構成とテーマもおおむね妥当で、執筆者には一流の哲学者・文学者・詩人・画家・研究者を揃え、しかも、いい加減に書き流した論考は一つもなく、いずれも熱意のこもった真摯な論文やエッセイで、戦前の学術的水準を示していると思います。

昭和十七年から十九年にかけての刊行で、戦時色が非常に強まってきた時代ですが、著者たちは超然と対峙し、悠然と書き進めています。著者たちが、時局に阿ることも無く、能の本質を洞察しているのです。これを見ても、能を取り囲む文化人と言いますか、能に携わり、関心を寄せていた当時の文化人や知識人たちの目の高さや広がりを感じられます。恐らく、こういった講座は二度と編むことが出来ないでしょう。第一巻から第六巻まであり、戦後、東京創元社で、原版の項目を削って四巻に縮め、新たに能の実技の一卷を加えた新修版も出しましたが、先ほど話しました通り、「綜合新訂版」では全てを活かし、新たに写真や解題・諸表を加えて、出版したのです。

能楽研究の黎明

豊一郎が能楽研究を始めるきっかけとなったのが、さきほども話しましたように桜間伴馬の「葵上」の至芸

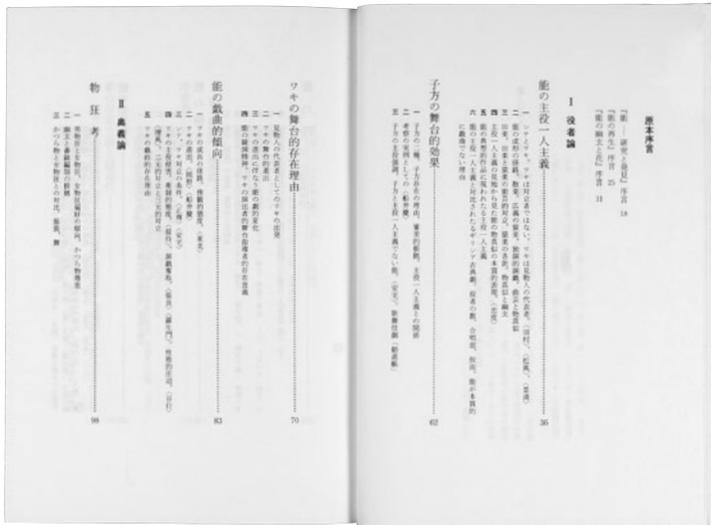
に触れたことですが、加えてもう一点大きな出来事がありました。それは吉田東伍校註による『能楽古典 世阿弥十六部集』が明治四十二年に刊行されたことです。それを読んで世阿弥研究に取り組んだのです。豊一郎が能楽研究を始めた頃の能楽界がどうであつたかは、弥生子の日記が教えてくれます。大正十四年六月の日記ですが次のように綴られています。

これだけのしつかりした心靈的な美に充ちたものが、他のどんな芸術で今演出されるだらう（西野注・演出という言葉は表現という言葉に置き換えていい）。然るに世間の多くの人は、能は貴族と金持の銷暇的遊戯としかおもつてゐない。而して（能が心靈的美を有していると）知らないで反感と輕蔑を持つて、当今日本にある最も美しい芸術をネグレクトしてゐる。これは寧ろ彼等の恥辱である。同時にこの能楽を健全に保存し有意義に玩賞しようとするには、事実その手に汚されてゐる貴族と金持から奪つて、真に教養あり高き趣味ある知識階級の手収めることだとおもふ。

弥生子の日記ではありませんが、豊一郎の主張でもあつたでしょう。ですから、一握りの人間、貴族や金持ちだけの愉しみではなく、広く解放し、能の良さは市民にこそ呼びかけなくてはならない、そういう主張です。この精神によつて、先ほど述べた『能楽全書』も生まれるし、「能楽鑑賞の会」も生まれたと思ふんですね。日記ですから、かなり激烈なことも書いてありまして、例えば能評なども、他の能評家のそれと比べると、とても面白いのですが、その話はまた別の機会に譲りましょう。

急 逝

豊一郎はさらにさまざま仕事をしますが、残念なことに昭和二十五年の二月十八日頃に体調を崩して、



『野上豊一郎批評集成 能とは何か』目次
(書肆心水、2009年)

成城の自宅に臥せられ、同月二十三日の午後六時十五分に安らかに逝去されました。以前、クモ膜下出血を起し体調を崩されたのですが、その再発であったそうです。享年六十六、なんと短い生涯でしょう。

著作

野上豊一郎の著作は、「能」に関するもの、西洋文学に関するもの、随筆・紀行の三つに大別され、その他に翻訳（外国語への翻訳も含む）があります（年譜著作目録参照）。

豊一郎の著作は今も新しいかたちで読まれています。近年刊行された『野上豊一郎批評集成・能とは何か』上下二巻（書肆心水、二〇〇九年）には、いわゆる三部作『能研究と発見』、『能の再生』、『能の幽玄と花』が収録されています。『能とは何か』の上巻として「入門編」、下巻として「専門編」に分けて、曲名の索引がついておられますので、とても探しやすいです。さらに「人物編」として『観阿弥清次・世阿弥元清』（二〇一〇年）を出し、それから「文献編」として『花伝書研究』のタイトル

を変えて『精解・風姿花伝』（二〇一二年）としているのです。そのおかげで、我々は古い形の本ではなく、新しく編集され、組みなおされたものを読むことが出来るのです。今日の私の資料にもたくさん引用していますが、それは全部この『野上豊一郎批評集成』から引用しました。この本はある程度難しい言葉には、編集者が割注の形で注が加えられているので非常にわかりやすい。少し値は張りますが、非常に良い本だと思います。

私は以前から書肆心水に注目していて、確かお一人でやっている出版社なんです。志の高い、清藤^{せいどう}さんという方がやってらっしゃいます。豊一郎の主要著作が、『野上豊一郎批評集成』に収まっていますので、是非読んでいただきたいと思います。

能楽研究への取り組むきっかけ

豊一郎が能に惹かれ、能楽研究に取り組み始めた頃のことを示す文章があります。『能楽全書』第一回配本の月報に載せた「能楽研究の今昔」です。それを見ていただくと、能楽研究へ入っていった経緯等がわかります。

：桜間金太郎氏などはたしか二十を越したばかりで、さういつた人たちの能を見るにつけても、これほどの立派な芸術が今日までただその時々^{とき}の鑑賞にさらすのみで、その場きりで空間に消え去るにまかせて、研究もされず、理論づけもされずに抛棄されてあるのは遺憾だと思つてみた。その矢先に偶然にも世阿弥の遺著が十六部まで発見されたのであるから、まさに空谷の聲音とでもいほうか、明和の昔、前野良沢・杉田玄白・中川淳庵の学徒が初めて解剖学の蘭書を手に入れて雀躍したといふことなども思ひ出し、能楽の研究もこれから根本的にできるだらうと勇み立つたのは、けだし私ひとりではなかつたらう。

そして文献だけでなく、能舞台でいま実際に演じられているのであるから、能を「芸術学的に研究するには直接

演戯その物にぶつかるより外はないと」考え、世阿弥の芸術論書を指針として全曲を観ようと、時間も労力も費やし「些か正気の沙汰でないやうな凝り方もした」とも書いてあります。

そこが大事だと思えます。他人が「正気の沙汰ではない」と思うほど、能の作品を実際に鑑賞し続けたのです。能舞台を鑑賞し、研究を開拓し、提唱し、推進していったのであります。法政大学能楽研究所の野上文庫に所蔵されている『能楽全書』の月報には、左下の右あたりに、能面について一つの理論（いわゆる中間表情説）を発見したのが「大正10年春のことだったが」とあるのを、ペンで「ことで」に直していますが、これは豊一郎自身による直しです。

能楽美学の建設 素人なるがゆえの独創

全書の仕事も含め、野上豊一郎が能楽界に果たした功績と言いますか、その足跡は実に大きく、能楽研究のパイオニアならではの力強い言説と提唱は、今もその光を失っていません。豊一郎が亡くなった時に野々村芥叟氏が「野上豊一郎君の他界を惜しむ」（『観世』「野上博士追悼号」一九四八年四月）、能勢朝次氏が「野上先生を悼む」（同上）という追悼文を書いています。この二つの文章が興味深い。

野々村氏はその人物像を「世間では学究としての野上君だけを見てゐるのであらうが、同君は決して融通の利かぬ単なる学究人ではない。さればといつて、謂はゆる寛洪な長者といふでもなく、やはり一種の政治的才腕を有つた君子人と言ふのが一番適當ではないかと思ふ」と批評しています。

能勢氏は「野上先生は、ほんとうに能楽を愛せられた方であつた」と綴り、「私が最も有難く思つて居る事は、先生が実に新鮮な眼でもつて能楽の芸術性を解剖し総合せられ、又、実に潤ほひがあつて、しかもフレッシュな

名文を以て、その芸術的な卓越性を天下の教養人に向つて説述して頂いたことである。先生の「能―研究と発見―」が出版せられた時に受けた感銘の深さは、まだ私の心に生き生きと残つてゐる」と述べています。

また、弥生子の追悼の言葉はとても興味深いです。

これはアメリカもずっと昔の話であるが、或る大きな新聞に一人の若い記者が入社すると、途端に当日町で行はれる野球の試合の記事をとつてくることを命じられた。その試合は職業選手もえり抜きのチームで、入場券に何倍ものプレミアムがついてゐるほど華々しい前景で、町中を熱狂させてゐるものであつた。ところがその若い記者は田舎のへんぴな学校出で、それまでそんな大掛りな一流選手の競技を見たことがなかつたので、主任にその理由をうち明けて、他のものに代はつて貰はうとした。しかし主任記者は「未経験だといふから君をやるのだ。そこが君の値打ちなのだ」と言つた。果してその若い記者の書いて来た観戦記は新鮮な興奮と熱情でかつてない程ほどおもしろいものになつた。――野上と能楽の關係を考へると、ちよつとこの話に似たところがないではない。従来単なる有閑人のもてあそびものに墮した傾きのあつた能楽を、一つの知的研究の対象にまで仕上げた彼の仕事は、大学では英文学を学んで外国人らしい感情で能を見たことが大きな原因になつてゐるに違ひなかつた。国文学畑の学者、もしくは能や謡のいはゆるくろうとには分かりきつた、珍しくもないことが彼には悉く珍らしく、新鮮な興味になつた。彼の打ち建てようとした能楽美学に欠陥があるならば、それ故の欠陥であり、また他の追隨を許さぬ独創があるならば、それ故の独創である。もつとも好ましいのは素人の目が玄くろうとにまで冴えこみ、而かもなほ常に素人らしい瑞々しい感受と研究を怠らざつづけることであらう。野上が多忙な学務のあひだにもその準備をしてゐて、すこし暇を見つけ次第に書かうとしてゐた能楽概論が、メモだけで永久に未完になつたのは、彼自身にも心残りであらうと思ふ。（『観世』野上博士追悼号）

私はこれを読んで深い感慨を覚えました。素人なるが故の独創性に富む能楽美学の樹立であり、素人なるが故

の欠陥であります。確かに、もう少し存命でいらつしやつたなら、示唆に富む能楽概論が完成したでしょう。今日では、足りない点があるかもしれません。しかし、それは考察の至らなさというよりも、法政大学の総長として多忙な学務に尽瘁されていた豊一郎には、さらにそれを深める、煮詰める時間が訪れなかったということですから、そういう意味で、総長現職のままのご急逝は、惜しまれてなりません。戦後の復興を見事にやり遂げ、大学改革を推し進めるという繁忙の中、亡くなったわけで、おそらく、弥生子も心残りに思っていたに違いありません。

しかし、生前に能楽研究所の構想を立て、初め文学部内に能楽研究室を設けて能楽関係資料の収集にあたらせていた、その志が、大内兵衛総長以下の理事会によって受け継がれ、その功績を顕彰して、一九五二年に野上記念法政大学能楽研究所が創設されたのですから、その意思は継承されたといえますし、今日、国際的にも能楽研究の拠点として活動を続けていることは、豊一郎博士の構想にも沿うものと思います。

提言

豊一郎は後進に向けていろんな提言をしております。たとえば『能の再生』の序言では、次のように述べています。

私の言はうとしてゐることは、新しい目を以つて見、新しい頭を以つて考へるのでなければ、能の最も本質的なものは捉めないといふのである。一種の言ひ方をして言ふならば、能の本統に芸術的な研究は、われわれが外国人の目を以つて見直し、外国人の頭を以つて考へ直すところから始まらねばならぬ。

(中略)

能を果してわれわれの生活の上に再生させ得るか否かの可能は、われわれがいかに正確に能を理解し得るか

否かの上に懸かつてゐる。それ故に、能の再生の問題は、われわれにとつて目的であり、理解の問題は手段となる。

この序言を自ら実践して、野上は幾つもの新しい発見を提唱しましたが、これには玄人たちの批評や反対意見がありました。あいつは素人だとか、田舎の出だとか、そんなことで皆で攻撃してゐるんですけど、それに対して敢然と戦っているのが豊一郎なのです。

『そして「能と敬老思想」』『能の再生』収録』では、我々がこれから進むべき能の研究の方向を示していますし、「能の位、殊に闡位について」(『能 研究と発見』収録)では、世阿弥を読む人が幽玄を祖述するけれど、ほとんど一人として、世阿弥が幽玄を超えた闡位について最大の価値を置いていることに注意を払わないのを不思議に思うとして、能の表現の究極至極の精神は闡位について見なければ到底感得することができない、と主張しています。

また能は、演者と観客の共同演出であると提示するなど(『能の花』『能の幽玄と花』岩波書店、一九四三年)、斬新な提言や提唱をしています。さらに能の表現に横たわる大きな自由精神を指摘し、能が「戯曲形式の上では主役一人主義の特殊の演戯として発達のした道を辿つた」(『能の局面区分法』『能の再生』)ことを説明しています。そうした提唱といえますか、提言といえますか、あるいは生き方といえますか、そういう精神を継承して、今日の能をもう少し健全な姿にしていくなか、私は常々思います。

野上三部作につきましては、先年亡くなられました横道萬里雄先生(一九一六―二〇二二)が、岩波書店で復刊する際に、「野上豊一郎の能三部作」(雑誌『図書』一九八二年九月)という題で文章を寄せておられます。是非お読みたいだけだと思います。

「素人であるが故の独創」と弥生子が言っておりましたけど、まさにそうだと思います。先人観にとらわれずに、それに向かつていく姿勢。そのために沢山の能を観たり本を読んだり、さらに外国文学・外国演劇などに明るく、それらも踏まえた上での、能の本質・特質を芸術学的・科学的に明らかにしようと努められた。そして、ある高

みまで到達したけれど、最後の仕事を完成させることなくお亡くなりになった、ということになると思います。まさに開拓者であります。

豊一郎はまた、自分の考えや思想の表現の仕方も巧みでした。事の本質を把握し、歯切れよく、わかりやすく説示し、「能面中間表情論」とか、「ワキは見物人の代表者」とか、あるいは「主役一人主義」とか、非常に明快に簡潔に定義しています。キャッチフレーズといいますが、その言葉が非常に生き生きとし、我々の心にすっと入ってくるんですね。それはやはり、若い時に創作もしていたことと関係があるのかもしれないけれど、言葉が非常にクリアーで、ストンと入ってきます。こういうキャッチフレーズを創作する名手の代表者は世阿弥だと思えます。世阿弥はそういうコピーライターの的な才能に溢れた、言語感覚に優れた役者だったと思います。同じように豊一郎の論を読んでもそれを感じます。鋭い感覚で分析し、そして新たな名前を与えながら思索を深め解明していくのですけど、そういうところは、横道萬里雄先生が受け継いでらっしゃったのかな、とも思っております。お話ししたいことが、まだありますが、時間になりましたので、この辺で終わることにいたします。ご清聴どうもありがとうございました。

〔付記〕 この講演記録は、当日の講演録を基に、加除訂正等をしたものである。

野上豊一郎略年譜

*作成にあたっては、主に『近代文学研究叢書 第六十七巻』（昭和女子大学近代文学研究室著、昭和女子大学近代文学研究所発行、平成五年）を参照した。

幼少年時代

明治十六年（一八八三）九月十四日、大分県北海部郡福良村二四六番地（後、白杵町一八一一番地。現、白杵市大字福良二八八番地）に、野上庄三郎（弘化四年六月二十一日生）・チヨ（嘉永五年八月十四日生）の長男として生まれた。家は屋号を京屋といい、酒屋と雜貨商を営んでいた。

明治二十三年四月、白杵尋常小学校入学、さらに二十七年四月、白杵尋常高等学校に入学。

明治三十年三月、高等小学校三学年を修業。翌四月、創設されたばかりの県立白杵中学校（現、県立白杵高等学校）に入学した。超俗的な漢学者菊川南峰の塾で漢学を学び、カトリック教会の僧エミール・ルペルに初めてフランス語を学んだ。

明治三十五年三月、第一回卒業生三十五名の首席で卒業。

学生時代

明治三十五年（一九〇二）七月、第一高等学校を熊本の第五高等学校で受験、合格、九月に上京、第一部甲に入学。同校の寄宿舎に入寮する。同級生に安倍能成・藤村操ら。一方、後に豊一郎の妻となる同郷の小手川ヤエ（弥生子。明治18・5・6生）は、明治三十三年に上京し、明治女学校に入学していた。

明治三十六年、豊一郎は寮を出て、小石川区原町の塩谷家（漢学者）に下宿、同じ家に寺田寅彦が独居していて、親密な交際が始まる。ヤエは足繁く通い勉強を教わり、身の回りの世話をするなどした。同年一月、イギリス

より帰国した夏目漱石が四月から第一高等学校と東京帝国大学文科大学で教鞭を執る。

明治三十七年三月、『中学世界』に掲載の「抜都大王露西亜蹂躪」に白川の筆名を用いる。

明治三十八年六月、第一高等学校卒業。九月、東京帝国大学文科大学（英文学専攻）に入学。

明治三十九年八月、同郷の経済人大塚幸兵衛の仲立ちでヤエとささやかな祝言をあげる。

活躍前期

明治四十一年（一九〇八）一月、高浜虚子（池内信嘉の実弟）の勧めで能楽倶楽部別会（於・靖國神社能楽堂）で鑑賞した桜間伴馬の至芸（葵上）に魅せられ、以後、能の鑑賞と研究を続ける。豊一郎を能楽に誘った恩人は虚子（『鬼女山房記』）。同年四月、ロバート・バーンズに関する英語の卒業論文を十日ほどで締切り間際に仕上げ、六月にロレンス教授の口頭試問を経て、七月卒業。大学院に進む。なおヤエとの入籍は卒業を待つて十月に行われた。新居、府下巢鴨町駒込三八八番地内海方。同年、上駒込の三三四番地に転居。安倍能成に誘われ下掛宝生流の家元宝生新に謡を習う。漱石はじめ門下生も謡を習う。同年九月、滝野川の私立聖学院英語学校講師（四十二年三月まで）。

明治四十二年二月、吉田東伍、前年、安田善之助の蔵書中より発見の世阿弥伝書を校註し『世阿弥十六部集』と題して池内信嘉が出版。四月、神田神保町の私立錦城中学校英語の講師（大正五年七月まで）。同年秋、大学院を終了。虚子の力添えで国民新聞社に入社、文芸欄の編集を四十四年の廃刊まで手伝う。九月、和仏法律学校（法政大学の前身）予科の英語・英文学講師。

明治四十五年一月、短編小説集『巢鴨の女』現代文芸叢書（春陽堂）を出版。

大正二年、上駒込三三九番地に転居。

大正三年六月、フランク・ヴェーデキント『春の目ざめ』（東亜堂書房）の翻訳を出版。

大正四年四月、万朝報社に入社（九年七月まで）。五月、ピエール・ロチ『お菊さん』（新潮社）の翻訳を出版。

大正五年十二月、夏目漱石死去。大きな衝撃を受ける。

大正七年一月、磯部甲陽堂より『世阿弥十六部集』（編輯兼発行者・池内信嘉）が再版。（大正十三年三版）

大正九年（一九二〇）、大学令による昇格により法政大学が発足、四月には法学と経済学部の二学部と大学予科（昭和

二十四年、教養部に改変）が新設され、学長松室致は大学予科長に野上を就任させた。九月、府下日暮里渡辺町

一〇四〇番地に移転。

大正十一年、フランス文化紹介の功績に対し、フランス政府からレジオン・ドヌール勲章を授与される。

昭和二年（一九二七）十一月、世阿弥『花伝書』（岩波文庫）を校訂・出版。

昭和三年五月、法政大学五十周年記念式典で、勤続二十一年の銀章を校友会より授与。同五月、『申楽談義』（岩

波文庫）を校訂・出版。同年より北軽井沢法政大学村に山荘を持ち、以後毎年夏をここで過ごす。

昭和四年四月、日本社会学会で「能の遊狂精神」を講演。弥生子は日記（九月二十二日付）に「父さんは能の研究

をまとめるため、この頃は非常な勉強である。今日も朝から書斎籠りである。私は執筆、子供達もそれぞれ午

前いつぱい勉強」と記す。四年から六年九月にかけて法政大学図書館長を勤める。

昭和五年二月、それまでの能楽研究の集大成である『能研究と発見』を岩波書店から出版。七月、杉田玄白著『蘭

学事始』（岩波文庫）を校注・出版。

昭和六年二月、松室学長が急逝、秋山雅之介がその後を引き継ぐ。三月、五人の理事の一人に就任。四月には学

監の任に就き、高等師範部長と図書館長を兼任。七月、『能作書・覚習条々・至花道書』（岩波文庫）を校注・出版。

昭和八年三月、バーナード・ショー来日。能楽堂で「巴」を鑑賞。野口米次郎と共にその解説接待の役を勤める。

この時のショーの質問が契機となつて名論文「能の幽霊」が生まれた（『能の再生』収録）。九月、いわゆる法政

騒動が起こり、十二月、理事・学監・予科長解職、教授を辞職。野上に同調した四十七名の予科教授も辞任。

翌九年六月、もう一方の責任者森田草平が解職し、一応の落着を見た。

昭和九年五月、この頃から東洋文庫に通い、勉強に専念し本格的な能楽研究に打ち込む。同年から十年にかけて能楽諸流派所蔵の能面の調査と写真撮影などの仕事に携わる。

昭和十年一月、中央公論社嶋中雄作の依頼を受け『解註謡曲全集』全六巻（昭和10・5―11・3）の編集に着手。「野上」が、いはゆる法政事件で職を失った時、「能楽全集」を発行してくださいと頼まれたのは、感謝の言葉もないほどのことであつた。おかげで一家は生活をどうにか守り得たにとどまらず、野上はまた学校の仕事で没入のできなかつた、能楽への新しい研究に専念することができたのだから。（「山姥独りごと」）。一月『能の再生』を出版。三月『研究社英米文学評伝叢書』の一冊として『GBSHAW』を出版。五月、『謡曲選集―読む能の本―』（岩波文庫）を校訂・出版。同年、豊田実の尽力で、九州帝国大学講師の職を得て、集中講義に出掛ける。同年、鉄道省観光局の依頼を受け、海外宣伝事業の一環として桜間金太郎のシテ「葵上」のトーカーを野上の脚本・監修によりPCLで制作（監督は山本薩夫、海外へ送り出す）。

昭和十一年一月、岩波書店「文学」が主催する世阿弥研究会の第一回会合が開かれ、以後指導的役割を果たす。同年八月から翌年七月にかけて、十回にわたり『能面（図版と略解）』を出版。

昭和十三年一月、『翻訳論―翻訳の理論と実際―』を岩波書店から出版。『能の再生』にその一部を収載した「謡曲の翻訳について」を修正して収録。六月、最初のエッセイ集『草衣集』（相模書房）を出版。

活躍後期

昭和十三年七月、『能研究と発見』で文学博士号を取得。同月、海外交換教授として渡欧が決定する。四月、法政大学文学部名誉教授の称号を授与。十月、弥生子と共にヨーロッパ巡遊に出発した。イギリスの諸大学で、能の芸術理論を中心に日本文化の特質について講義することが主要目的。エジプト・ギリシャ・イタリアを経て

イギリスに渡り、ケンブリッジ、オックスフォード、ロンドン、リーズ、ダラムの五大学と、一、三の学会で講演し、トーカー「葵上」を上映。十四年中頃からはオランダのハーグ芸術協会、パリ大学、ローマの極東協会などで日本文化について講義し、反響を呼んだ。そのほかドイツ、スペインなどを歴遊。間もなく第二次世界大戦勃発。ロンドンの大使館に預けてあった荷物を取りに英国に戻り、苦勞の末、米国を経て十四年十月に無事帰国した。この旅行の成果はさまざまな形で現れ、見聞記『西洋見学』（日本評論社、昭和16・9）等もその一つ。旅行中『世阿弥元清』創元選書（昭和13・12）、『能の話』岩波新書（昭和15・4）、『能面』英文版、"NOH MASKS CLASSIFICATION AND EXPLANATION" THE IWANAMI PRESS 1938等を出版。

昭和十五年十月、観客主導の「能楽鑑賞の会」を主唱し、丸岡大二を幹事として開催する（十九年十月迄）。

昭和十六年三月、文学部長として再び法政大学に迎えられ、十七年に評議員、十八年二月に学監に就任。十六年十二月、『クレオパトラ』を丸岡出版社から刊行。

昭和十七年七月から十九年十一月にかけて『能楽全書』全六巻を編修、創元社より出版。それまでの能楽愛好家を主対象とした講座・講義と違い、一般市民を対象とした、最良・最高の総合的な能楽講座。この頃、日本芸術振興会（古典作品翻訳実行委員会）が進めていた市河三喜を議長とする謡曲の英訳事業に、能楽編特別委員として、阿部次郎、桑木巖翼、吉沢義則、能勢朝次、野々村戒三、佐成謙太郎らとともに参画（田中允も草稿作成に参加）。選曲の条件として、①日本固有の美、②文化的・歴史的意義、③西洋人読者を魅了する内容、の三点が挙げられている。日・英・米の識者によって入念な検討と推敲がなされた。全三冊。第一巻が昭和三十年（一九五五）、第二巻が三十四年（一九五九）、第三巻が三十五年（一九六〇）に出版され、完結した。

昭和十八年一月、『能の幽玄と花』（岩波書店）、翌年七月、『能面論考』（小山書店）を出版。

昭和十九年四月、法政大学常任理事に就任。十二月、法政大学高等師範部部长を兼任。十二月から三男耀三の元（成城町）に身を寄せ、山荘との間を往復する生活を始める。

昭和二十年四月、空襲で日暮里渡辺町一〇四〇番地の自宅焼失。九月、法政大学第二中学校校長に就任。

昭和二十一年二月、戦後の学園民主化の動きとともに法政大学学長に就任、四月、理事長に就任。同年、能楽師の学的基礎を高める目的で、能学塾が開講（初代塾長・桑木厳翼）され、講師を務める。

昭和二十二年三月、総長に就任。学園の復興に着手し、大学の運営機構の整備改革、教学体制の革新と充実、人事の充実に尽力した。また、文学部内に能楽研究室を設置、田中允を文学部助教授として迎え、広く能楽関係資料の収集に当たらせ、本格的な研究機関の設立を構想した。四月、『シエバの女王』（東京出版）、八月、エッセイ集『大臣柱』（能楽書林）を出版。

昭和二十三年一月、大学よりの帰途、身体の不調を覚え、帰宅後中川正儀の診断により過労によるクモ膜下出血と判明、約二カ月療養生活を送るも大事に至らず、病床でも翻訳の仕事を進めた。五月、身を寄せていた耀三宅から程近い成城町二十番地の森可修家の建物を購入、約六百坪の敷地を借り受けた。六月・十一月・十二月、『マリ・バシキルツェフの日記』三巻（学陽書房）を翻訳・出版。七月、『花伝書研究』（小山書店）、十一月、『エヂプトの驚異』（要書房）を出版。九月、弥生子が山荘での疎開生活を切り上げ、東京に戻る。

昭和二十四年五月、『観阿弥清次』（要書房）を出版。六月、『バーナード・ショー』（東京堂）を出版。同年、法政大学出版局初代理事長に就任。十一月、日本古典全書『謡曲集』上（朝日新聞社）を出版。底本には野上所蔵の桃山時代の金春流写本「車屋謡本」百冊を用い、解説を担当。本文の校注は田中允。全三冊。昭和三十二年に完結。

昭和二十五年（一九五〇）二月十八日頃より体調を崩して成城町の自宅で病臥。二十三日午後六時十五分、安らかに逝去。先年のクモ膜下出血の再発であった。享年六十六。二十八日には大学葬が行われた。

【論文】

門外漢の能楽研究——野上豊二郎の視座

伊海 孝充

はじめに

野上豊一郎（二八八三—一九五〇）の能楽論を読むと、一つ一つの表現の確さに驚かされることがある。能面の造型を「中間表情」と呼んだように、多くの者が漠然と考えていることを、実的確な言葉で射貫いてくれる。「シテ一人（中心）主義」という言葉もまたしかりである（以下、一般的に流布している「シテ一人主義」を用いる）。はじめて野上がこの考えを示した論文は、次のようにはじまる。

能は本来役者一人の演戲を見せるやうに出来たものであるといふのが私の能に対する見方の根本である。それ故に言葉の正確な意味に於て能は戯曲と呼ばれ得ないものである。その事を私は種々の方面から説明し得ると信じてゐる。勿論そのドラマチス・パアソニイを見れば一人の役者に依つて演ぜられる能といふものは一つもない。少なくとも二人、或は三人、多いのになると十人以上の役者を使用するものさへ珍らしくはない。けれども、それにも拘らず、私は能はその本質に於てどこまでも役者一人本位の演戲として出来たものであることを主張したい。（中略）その間ワキは殆ど木偶と同様に柱の陰に坐つたきり一言半句も発言しないのである。則ちワキはどこまでも見物人の代表者の如きものであつて、それ以上演戲の上に何等の役目も負びてはゐない。（能は一人本位の演戲である）『思想』十七号、一九三三年二月

能は「役者一人」の演技を見せるもの、「戯曲と呼ばれ得ない」ものであり、ワキは「木偶」のように座つて

いる「見物人の代表者の如きもの」であると、鮮烈な言葉で自らの能楽観を示している。ただし、この一節が表現としての魅力に満ちあふれるからこそ、「シテ一人主義」は野上の本意から離れて、言葉が一人歩きして行くようにも思える。現在の能楽研究は野上の時代よりも格段に進歩した面も多く、彼の研究が顧みられる機会は少ない。そのため、「シテ一人主義」という考え方は広く知られているが、この論がどのような文脈で論じられているか、またどのように展開していったのかについてはほとんど顧みられていない。本論は、その「シテ一人主義」論を野上の能楽研究全体から捉え、野上がこの論を通して主張したかったことの本意を考え直してみたい。

シテ一人主義を唱えた論文「能の主役一人主義」（以下【主義】）は、野上三部作の第一作目である『能 研究と発見』（岩波書店、一九三〇年）に所収されている。野上の主張はこの論文集を通して読まれることが多いが、シテ一人主義の考えはこの論文集が初出ではなく、「能は一人本位の演戯である 附 子方使用の心理について」という論文（以下【本位】）として、『思想』（二七号、一九三三年二月）誌上に初めて発表された。【主義】はこれを改稿したものである。この改訂もふまえながら、以下シテ一人主義の論を読み直してみたい。

なお、本稿に引用した文章は常用漢字に改めている。

一、写実主義とシテ一人主義

【本位】が【主義】へと改訂されるなかで、まず変わったのは論文の構成である（次頁参照）。

両論は内容には大きな差異はない。④の内容もDの中で言及されているので、Fを除けば（このことは後で問題にする）論文の構成要素はほぼ同じである。ただし、同じ内容にも濃淡があり、Fは⑥をかなり増補してある。また、同じことを主張しているが、使われている言葉が異なる例も散見する。ここで問題にしたいのは、「シテ

中心主義」と「写実主義」という言葉である。

【本位】

- ①シテ中心主義について
（「田村」「景清」を例に）
- ②猿楽の歴史
- ③猿楽と田楽の比較
- ④物まねと「心根」
- ⑤物まねの動機（「忠度」を例に）
- ⑥ギリシャ劇との比較
- ⑦子方について

【主義】

- Aシテ中心主義について
（「田村」「景清」を例に）
- B猿楽の歴史
- C猿楽と田楽の比較
- D能は写実主義ではない
（「忠度」を例に）
- Eシテ中心主義と猿楽の座
- Fギリシャ劇との比較

論文名に表れているように、【主義】になると「主役一人主義」「シテ中心主義」といった言葉を多用し、能がシテの存在に比重が大きい芸能であることを、この芸能の「主義」であると強調している。【本位】にも「主役中心主義」という言葉が一箇所だけに見えるので、【主義】になつてはじめて用いられた表現ではない。ただし明らかに、野上は【主義】へと改訂するなかで「シテ中心主義」という表現を多用し、能という劇がシテ一人の演技を見せる「主義」をもっていることを強調しているのである。わずかな表現の違いではあるが、【本位】から【主義】への改訂によって、「能はシテ一人の芸を見せるもの」という野上の主張は、表面的には強固なものになっていると受けとめられる。

では、なぜ野上は【主義】に改訂するなかで、「主役一人本位の上に立つた演戯」を「シテ中心主義」という

言葉で言い換えるようになったのだろうか。それは【主義】の結論を「能は戯曲的ではない」としてまとめ直していることと密接な関係があると思われる。

野上が能の戯曲性に懐疑的であるのは以下の二つの理由からである。

- (1) 能はその場面に登場する人数と実際の舞台上上がっている人数が一致していない。
- (2) 能は見せる劇であると同時に聞かせる劇である。

「能は戯曲ではない」という主張は「忠度」を例に、(1)と(2)を関係づけながら、能を劇として捉えた場合の特殊性とともに説明されている。すなわち忠度と六弥太の格闘を一人の「仕方話」で語り、一人が演ずる表現方法をとることを例に、能は「劇ではない」(【本位】)と主張しているのである。この論じ方は【本位】も【主義】も同じであるのだが、【主義】は論文全体で(1)の主張が強まっているのである。

例えば【主義】では、「忠度」の分析の前に次の一節が増補されている。

此所で私たちの猿楽―殊に大和猿楽―の標榜した物真似の本質について、もつと立ち入った考察をしなければならぬ必要を感じる。一口に物真似とは云つても、それは今日その名辞に依つて理解されてゐる写実主義の意味にそのまま解釈するわけには行かない。何となれば、猿楽が今日謂ふ所の写実主義の原理を基礎とする藝術でなかつたことは、また現在の能に於いてもさうでないことは、その演戯の根本問題たる役者の使用法について見ても容易にわかることであるから。即ち、舞台上の写実主義は、先づ以つて登場する役者の数と描かれてある人物の数とを一致させないではすまきぬ筈である。然るに能に於いては、しばしばその数が一致しない。否、一致しないことが寧ろ当然であるかの観を呈するやうに出来てゐる。

野上は【主義】へと改訂したときに、【本位】には一箇所にしか見られない「写実的」「写実主義」という言葉をたびたび用いているが、そのときの意味は物語の登場人物と役者の数が一致することであつたようであり、そのことを重要視していた(小田稿参照)。この写実主義に対して、能は「舞台技巧の写実主義ではない」(【主義】)や

「最小の労力を以つて最大の効力を収めようとする一種の経済主義」（同）の芸能だと呼んでいるのである。

「シテ一人中心主義」という言葉は、この写実主義の対立概念として浮上してきた表現ではないだろうか。もちろん物語の登場人物と役者の数の不一致は【本位】の段階でも能の特質として論じられているが、【主義】ではそれをさらに強調している。そのことは【主義】で増補されたギリシヤ劇との比較部分（前掲の表⑥とF）にも顕著に表れている。この部分では、仮面の問題などにも言及しているが、論の中心は役者の数の問題である。野上いわく、ギリシヤ古典劇と能は相似関係にあると言われることが多いが、前者は「合唱部に対立させるために第一役者が発明され、第一役者に対立させるために第二役者が発明され、更にそれ等に対立させるために第三役者が発明された」と捉えているのに対して、後者は人数が多くても役同士の対立は希薄であり、あくまでもシテ一人の演技から成っていることを主張しているのである。野上は物語に似合った人数が登場し、役同士が対立するものを「写実主義」とし、それとは相對する原理が貫く能を「シテ一人中心主義」の芸能と捉えたのである。

しかし、野上の論じ方は、シテ以外の諸役がシテの「対立者」であるか否かと、舞台上の登場人物の「数」について固執しすぎている感があり、この能の捉え方には少なからず問題がある。そもそも「写実主義」という言葉を物語と舞台の登場人物数の一致という点にのみ力点を置いて用いることには無理があるので、その対立概念として浮上してきた「シテ中心一人主義」にもわかりにくさがあり、【主義】の段階ではそれほど成熟した論として完成してはいなかった。

ただし、『能 研究と発見』刊行後も、野上は「シテ一人中心主義」の考えを捨てることはなく、その論調を少しずつ変化させながら、考察を深めている。たとえば「ワキの舞台的存在理由」（『能の幽玄と花』（岩波書店、一九四三年））では、能がシテ一人主義であること、ワキがシテの対立者であり、見物人の代表者であることを再論しているが、それだけではない。シテを活躍させるための「操縦者」という意味を加え、「ワキは一面に於いてはシテの補助者であると共に、他の一面に於いてはシテの対立者でなければいけない」と主張している。また

能の「幽玄」「花」を論じるなかでは、能の物真似は写実主義ではないという従来の説を若干変更し、大和猿楽伝統の物真似＝写実主義、歌舞的要素＝「幽玄」と位置づけ、それに美的変容をあたえることが「花」という要素であると説明している（『能の幽玄』、『文学』一九三八年三月号）、「世阿弥の花」（『文学』一九三六年四月号）。ともに「能の花」として『能の幽玄と花』に所収）。役者の「数」を注視した従来論よりも、「写実主義」「幽玄」「花」を結びつけた論の方が明らかに理解しやすく、野上の一人中心主義はその姿を変えて進歩したといえる（詳しいワキの分析については小田稿参照）。

われわれが野上のシテ一人主義を論じるとき、注視する論文は【主義】だけであり、その後の展開まで念頭におくことはほとんどない。しかし、ここまで見たように【主義】で論じられていたシテ一人主義は、様々な不備があり、完成された論とは言いがたい。野上の多くの論文は、【主義】を足がかりに書かれたものであるので、むしろこの稿で示されたシテ一人主義は、彼の能楽研究の一里塚というべき研究であった。

現在では、シテ一人主義を論じた【主義】は野上の能楽研究の象徴のように捉えられている。ここから多くの論が展開したという意味では、野上の研究において重要な位置を占めているのは確かであろうが、彼の研究の達成点であるという意味の「象徴」ではない。野上の能楽研究を評価するためには、シテ一人主義が【主義】からどのように展開したのか、という点こそが重要なのである。

二、佐成謙太郎の研究との相关性

野上のシテ一人主義論の展開を追う上で重要となるのは、シテ一人主義とは関係がないと思われがちな現在能の捉え方である。シテ一人主義というと夢幻能のワキの解釈に注目があつまるが、野上の研究の独自性はそこに

あるわけではない。というのも、野上のワキの見方には、佐成謙太郎の研究という〈本説〉があるからである。

佐成謙太郎（一八九〇—一九六〇）は旧彦根藩士・佐成藤二郎の長男として生まれ、京都帝国大学、東京帝国大学大学院へと進んだ後、退官まで女子学習院で教鞭をとった国文学者である。中古・中世の日本文学を専攻し、『源氏物語』や『新古今和歌集』などに関わる幅広い国文学の著作があるが、能楽については一九二〇年前後から論文を発表しはじめており、彼の研究の大きな部分を占めるようになった。佐成の能楽研究はそのテキストである謡曲研究が中心であり、作品の語釈・口語訳、典拠研究、謡曲の構造分析などを行なっている。その成果は『謡曲大観』（明治書院、一九三〇—一九三二年）に結実しているが、彼の能楽研究における功績を「夢幻能」という言葉とともに記憶している人も多いだろう。

「夢幻能」という言葉の成立については、田代慶一郎『夢幻能』（朝日選書、一九九四年）に詳しい。大正十五年（一九二六）七月に始まった「国文学ラヂオ講座」の第二期中世篇で佐成は「能楽の芸術的性質」という題で講義しているが、その中で「頼政」について触れつつ、

私はこのやうに劇の主人公の夢に現れてくるものを夢幻能と名づけ、従つて「頼政」の如き脚色を複式夢幻能と申せばどうであらうかと思ふのでございます。（『夢幻能』からの引用）

と述べている。実はその七年前に、佐成はすでに「夢幻能」という言葉を使っているのだが（後述）、この語を明確に定義づけたのはこの放送であった。

佐成はこの「夢幻能」の構造分析を中心に謡曲研究を行なっているが、彼の能楽観は野上の能楽研究と密接な関係がある。たとえば、佐成は能を概説する文章で、次のように述べている。

能楽は完成せられたる夢幻的楽劇である。私はかう結論し得ると思ふのであるが、しかしこの断定が承認せられるためには、幾つかの難点を解き破らなければならない。まづ第一に、能楽を劇と見るべきや否やについて疑義がある。何故ならば、凡そ劇なるものは、対立の関係にある二人以上の登場者が、劇的現在の立場

にあつて、科白所作によつて、葛藤を展開して行くべきものであるのに、能楽では、シテ一人の歌舞を主体としてゐて、その対手たるワキはシテと対等の關係に立つてゐない。根本的にいつて、ワキとシテとが時代を異にしてゐるから、葛藤を惹起すべき時が成立したくない。即ち能楽はシテ一人の舞踊又は語り物であつて、ワキはこれを見聞する一員に過ぎないといふのである。第二の、能楽が夢幻的效果を期待するものであるといふ考へ方についても、幾多の反證がある。成程、能楽の大部分を占めてゐる複式能の後シテは神霊の影向又は英雄佳人の亡霊であつて、これらは夢幻的な表現を企図してゐるといひ得ようが、能楽にはこれらの外に四番目物現在物即ち二段劇能又は二段劇能があつて、それらは不完全ながらも登場人物が劇的現在の立場にあつて葛藤を展開するのである。即ち夢幻的所作を離れた、歴史的現在の葛藤を演ずるのである。しかもそれらは脚色発達の過程から見て、後期の制作といふべきもので、従つて一般的にいつて、能楽は劇的要素の甚だ少ない舞踊・語り物を主体とした複式能から次第に劇的な現在物に発達して行つた、劇として過渡期の作品であるといふものである。(「謡曲―特に夢幻的楽劇として見たるその形態組織について―」岩波講座『日本文學』一九三三年)

傍線部のように、能が劇か否かという問題設定のもと、役同士の対立がないこと、ワキが観客側の人物であることに能の特殊性を見いだしている点、波線部のように、四番目物などの能は夢幻能より後代に出現した過渡的発原型と見ている点は、野上の研究と相関性があるどころか、野上自身が書いた文章と見まがうほどである。本書は主に学生へ向けた学問の梗概書なので、当時大きな反響のあつた野上説を紹介したかのように見えるが、実は佐成自身も野上の考えに近い謡曲分析を重ねていたのである。

たとえば学術誌に掲載された「謡曲文の戯曲的解釈」(『國文教育』六一四、一九二八年四月)にも次のような一節がある。

この一節(伊海註「籠」の初同前の問答)は、世阿弥の所謂「破二段」で、ワキとシテとの掛合によつて、事

件を展開して行くのである。といつても、普段の劇のやうに事件の展開に対して、登場人物が対等の地位にあるのではない。ワキが質問者で、シテが答弁者となつてゐるのである。だから、事件の展開といふよりは、むしろ主題の説明で、その説明の方法として問答式を採つたものと見られるのである。そしてこの説明を聞く者は舞台に於てはワキであるが、これに興味を感じるのを見物人のすべてであるから、もとく見物人と親しみ深いワキは、主題の説明を聞かうとする見物人すべての代表者ともいふべき地位に立つてゐるのである。

前稿のように詳細な記述ではないが、「箴」を例にワキとシテとが対等な関係にはなく、ワキは見物人の代表者であるような地位にあると説明している。佐成は自らの能楽観を示すために、繰り返してこの説を述べているのである。

しかも、この佐成の謡曲分析は野上の影響下にあるものではない。現存する刊行物を見る限り、「ワキは見物人の代表」という解釈に、佐成は野上よりもはやく辿り着いているのである。佐成は雑誌『能楽』に二篇しか寄稿していないが、そのうちの一つ「能楽の脚色―シテ、ワキ、ツレ、の発展より見たる研究―」（『能楽』一七七八―一九一九年八月）には次のようにある。

シテがかく如く発展して行くと共に、ワキも亦著しい発達を遂げて居る。即ちワキの最初の形は、シテと本来何等の関係もない通りがりの人で、一寸した会話がもとで、シテの演奏を見物するに過ぎないのである。所謂諸国一見の僧がこれで、戯曲として之を見れば、殆ど贅物に近く、観客と大した変りのないものである。稍進んで、ワキが勅使とか大臣とか、ある指定せられたものもあるが、これも偶然の見物人ではなく、予期せられたる見物人であるといふだけで、見物人たるに少しの変わりもない。かくの如きワキの全く働かない、シテのみ所作するものを仮りに『シテ能』と名づける。このワキが次第に発展すると、ありふれや旅僧がさる高僧となり、従つて題意がその高僧の功力物語のやうになり、或はシテと父子兄弟の縁故を持つやうにな

り、仇討物の敵役のやうになつて、シテと全然離るべからざる関係を結ぶやうになる。かういふワキの大に働くものを仮りに『ワキ能』と名づける。

佐成はこの論文で、シテのみが活躍する「シテ能」、ワキも活躍する「ワキ能」、ツレも活躍する「ツレ能」を縦軸、シテが中入しない「単式能」、中入する「複式能」、シテ・ワキが密接な関係をもつ一場物「一段物」、二場物「二段物」、二段物でシテが別人格になる「後期二段能」を横軸にして能の分類を試みている。すなわち、単式シテ能に「猩々」など、複式シテ能に「高砂」など、複式ワキ能に「殺生石」など、複式ツレ能に「通盛」など、一段ワキ能に「俊寛」、一段ツレ能に「通小町」など、二段ワキ能に「班女」など、二段ツレ能に「大仏供養」など、後期二段能「天鼓」などを分類し、能の総体を捉えようとしている。

この分類の是非はさておき、こうして分類をするときには、一曲におけるシテとワキとの関係が重要な要素になるわけだが、「シテ能」と分類された曲はワキの存在が希薄になる。そのワキを傍線部のように「贅物」「見物人たるに少しの變りもない」と形容しているのである。これは「木偶」「見物人の代表者」と譬えた野上の表現とほぼ重なるが、それだけではない。ワキが活躍する「ワキ能」を波線部のように「ワキが発達する」と解釈し、「谷行」のような曲を二段能の「一層発展したかたち」と説明しているのである。佐成はこの論を野上が【本位】を発表する四年前に完成させているのである。

論文「能楽の脚色」でのワキの解釈は「夢幻能」と密接な関係がある。現にこの論文で単式・複式能を「畢竟舞踊能であり、夢幻能であつて、劇能でない」と述べているなど、すでにこの言葉を使っている。「能の脚色」では何の説明もなく「夢幻能」と述べているが、これを詳述する前掲のラジオ講座で、「夢幻能」である「頼政」を説明するなかで、シテとワキとの関係を次のように説明している（ラジオ講座は『日本文学聯講』（中興館、一九一七年）にまとめられている）。

これについて第一に注意しなければならないことは、夢幻能のシテは亡霊幽霊であるといふことであります。

しかも前ジテでは田舎の老人や獵師に扮装して出まして、始めその素性を明かに致しませんので、その様子は普通の里人と何等変つたところもありませんが、たゞその曲の題目となつてゐる昔話を余り委しく知つて居りますので、普通の里人とは思はれない、余程不思議な人だと不審の念を起すのであります。そして、この不審を起すのはたゞにワキ一人だかりでなく、見物人一同の起す疑問であります。それで、ワキがシテに向つて、「そのやうに委しく事情を知つて居られるあなたは、一体どういふ方です」と尋ねますが、この質問はやがて見物人一同を代表した意味を持つてくるのであります。それで、前ジテが「実は何某の亡霊である」と本性を打明けます時にはワキも見物人も実に意外千萬な、奇特な感じを起すのであります。そこで、待謡でワキが夜もすがら続経して、亡霊の回向をしまして、そのうちにいつしか夢心地になります。すると、見物人もこれに誘われて同じやうに夢心地になつて、後段の夢幻的な情趣を味ふのであります。則ちワキは見物人をこの夢幻的情趣に導く大切な役目を持つて居るのであります。ワキは一面に於て見物人の代表者となり、他の一面に於ては見物人に対して催眠術者・霊媒者の暗示を与へる役目をもつてゐるものと解釈されるのであります。これが催眠術者・霊媒者が必要としない劇能にはワキがなく、夢幻能には必要欠くことの出来ない所以であろうと思ふのであります。そしてまた、この夢幻的情趣が能楽の特色でありまして、形の發達した劇能よりも複式能の方が一般に歓迎せられる所以であらうと思ふのであります。(能楽の藝術的性質)

このように、佐成は能の特質を「夢幻能」という言葉で捉えるなかで、この夢幻能に登場するワキの性格についても分析しており、それは【本位】【主義】での野上の考えと重なるところが多い。刊行物を見る限り、「見物人の代表」としてのワキの存在を最初に指摘したのは佐成であり、野上の研究に彼の論が大きな影響を与えたと考えられる。

ただし、「野上のシテ一人主義は、佐成の研究の焼き直しである」とか「野上の研究に独創性がない」といっ

たことを言いたいわけではない。重要なのは相関性のある二人の研究を比較することによって、野上の研究の〈核〉が明らかにすることである。これを考えるとき、注視すべきは両者の現在能への眼差しである。

三、ワキの解釈をめぐって

前述のように、野上のシテ一人主義は、「木偶」のように座っている「見物人の代表者」と形容されるワキに注目が集まる嫌いがある。その証拠に、この論の発表後の諸氏の反応は、主にワキについてである。【本位】は学術雑誌に掲載されたもので、能楽関係者の目に触れなかったためだろうか、これに対する批評は皆無である。しかし、『能 研究と発見』刊行後は、【主義】への批評が散見できる。

例えば野村八良は「野上豊一郎君の新著「能」を讀んで」(『謡曲界』三三巻五号、一九三〇年五月)という稿で、「主役一人主義の論は、能の仕組は、大体に於てシテの独舞台で、ワキは対立者といふ程のポジションを持たず、寧ろ観衆側の一人であるやうな観があるといふ見解から成つてゐる」と、「能の主役一人主義」の論文がワキの定義が中心であるかのように要約している。野村は野上の主張に対して賛成も反対もしていないが、この論文に対して注目していたのがワキの解釈であるのは明らかである。そもそも野村は「ワキの論を本誌に寄せて、少々之を議論した事もあつた」と別稿に自身の考えを示しているように、ワキの存在に興味を持っていた。この別稿が「ワキに就いて」(『謡曲界』二十一巻五号、一九二七年十一月)であるが、野村はこの稿で「幽玄莊重な能楽の代表作では、ワキ役がほんの添役であること、而も演劇味の加つた作では、それとはかなり相違ある事」を指摘している。意見の前半はかなり佐成・野上説に接近しているが、後述するように後半は野上のそれとは異なる立場である。

また同じ漱石門下である小宮豊隆は野上説に対して批判的な反応を示しているが(「能は戯曲ではないのか 野上

君の『能』に就て』『謡曲界』三三巻六号、一九三〇年六月）、やはり注視しているのはワキの論なのである。小宮は「能はシテ一人だけを見ることを本體とする藝術である、ワキはいはゞ見物人の代表者のやうなものであるにすぎない、従つて能は戯曲ではないといふのが野上の説である」とまとめているように、「能は戯曲ではない」という野上論の結末を支えているのが、「ワキは見物人の代表」という解釈であると捉えている。小宮はそう解釈の上で、能がいかに戯曲的であるかという反論を展開しているわけだが、その手法はワキがシテと相並ぶ存在であり、ワキがいるからこそ能の物語が進行すること、能がそもそもシテワキ二元制度の上に成立している芸能であることを強調することであった。すなわち、小宮の反論もまたワキの解釈をめぐるものなのである。

野上はキャッチコピー的な表現が上手な研究者であった。「木偶」「見物人の代表者」などの言葉は非常に鮮烈であり、刺激的であるため、どうしてもシテ一人主義の論はワキの解釈に目が向かいがちである。しかし、野上が強調したかったのはワキが不必要な存在であるということではなく、能は「シテ一人で演ずる」(【本位】)芸能だという点であったはずである。猿楽の能の源流である猿楽の代表的な芸が物まねであったこと、世阿弥はその物まねを大和猿楽の芸として重要視していたことを指摘し、能の演技が一人芸である物まねから発展したため、本来的に役同士の対立がほとんどないことを根拠としているのである。さらに、その物まねは決して写実的なものではなく、「心根」に基づく内向性に演技の特徴があり、加えてそれを見るだけではなく、聞くという点に能の特質があるということを主張しているのである。

劇とは二者以上の対立からなると考える野上は、こうした考察を通して能は戯曲的でなく、シテ中心とした芸であるという結論に達する。「ワキが見物人の代表者」という見方は、あくまでもこの考察の過程に生まれた副産物的見解であり、ここだけを取り上げて【本位】【主義】を論じることは野上に対してフェアではないだろう。

そしてより大切なのは、野上は「シテ中心の芸」という論理がすべての能に通貫していると考えていたことである。すなわち、シテ一人主義は「土偶」のように座っているワキ僧だけの問題ではないのである。その証拠に、

野上が注目したのは夢幻能のワキだけではない。例えば「景清」などにも注目し、「ワキ、ツレ、トモ等しく各自の存在を抛棄して、いつしか見物人となつて舞台の片隅に消滅してしまふのである」と、シテ・ワキの対応だけではない多焦点の曲でも、能はすべてシテの演技のみが際立つ構造を持つていることを強調しているのである。そのことは『能 研究と発見』に所収されている「子方の舞台的效果」「能の戯曲的傾向」が、【主義】と一体であることからわかる。

前掲したように、【本位】から【主義】への改訂で最も大きく変化したのは、子方に関する論で、【本位】は論文末に「特殊」な子方に関する論も含むが、それは増補改訂されて「子方の舞台的效果」として『能 研究と発見』に所収されている。野上が『能 研究と発見』刊行に際してこのように【本位】を再構成したのは、子方の存在意義を論じることで、シテ一人主義の考えを補強しようとしたためだと推測される。

野上は「特殊」な子方、すなわち成人役を子方が演ずる場合を論じ、「ワキも子方も、動作の精神に於いては主演者に対抗して働きかけて侵すものでないことは同様である」とし、最終的には「その役を省略することが理想」だと解釈している。「船弁慶」や「安宅」は、能の中では起伏に富む構成や役同士の深い対立関係をもつ曲と評価されることが多いが、野上はこれらもシテ一人主義の原則の上に立脚していると見ているのである。この見解は、少々極端であると思うが、野上はこの論によつて、能のシテ一人主義が「安宅」「船弁慶」といった曲にさえも貫いていることを強調しようとしたのである。

野上は「安宅」のような曲について、【本位】では「後の変遷を示すもので、決して能の本体ではない」と言い、【主義】では「現在物は厳正な主義での能ではない」とさえ言っている。しかし、それは【主義】を夢幻能形式の議論に絞るためであつたようで、現在能を議論の外に追いやることはしなかつた。むしろこうした曲を能の「本体」と積極的に結びつけようとしていた。「能の戯曲的傾向」（初出は『国語と国文学』一九一五年四月号）は【主義】の考察から洩れた多人数が登場する能の分析であるが、これらのワキは「次第にシテに対立し、遂にシテを侵して、

自分で主演者の如く振舞ふまでに成長した」が、結局「主演者になりきれなかった」と、能の変遷と関わらせて解釈しているのである。

野上が「能の戯曲的傾向」が【主義】と一体と考えていたことは、次の歴史学者・野々村戒三との遣り取りからも読み取れる。野々村は「脇方の発生と其の伝統」（『近畿能楽記』大岡山書店、一九三三年）の中で【主義】の一節を引き、「本質の問題としては、一応肯かれる議論である。然し舞台の上に演奏される形式としては、やはり対立的なものとして、之を観るのが常識であり、穏当ではあるまいか。」と述べていることに對して、野上は、「私は本質論をしたのであつて、ワキがシテに對立するまあひについては、次の「能の戯曲的傾向」において委しく論及している。それをついでに読んでもらへなかつたのは遺憾である。」（「能の論攷考證」『東京朝日新聞』一九三三年十月六日朝刊）と反論しているのである。

このように、野上は能の特質を捉えようとするとき、いわゆる「普通の能」だけではなく、「安宅」「接待」のような曲も念頭に置いていた。能の知らない人にも理解できるように、夢幻能と「芝居」のような能を一つの線で繋げることを試みていたのである。『能 研究と発見』に所収されている各論をシテ一人主義研究と捉えるのであれば、野上がこれらの研究で明らかにしたかったのは、ワキが「観客の代表」であることを明らかにすることではなく、「安宅」のような曲も夢幻能形式と同じ能の論理が貫いていることであつたと推測される。

以上のことを踏まえると、野上と佐成の考えの相違点がはつきりする。佐成はシテ以外が活躍する現在能を能の発達したかたちと位置づけながら、夢幻能とは分別して捉えようとしているところがある。そのため、夢幻能でのワキは「贅物」に過ぎないと見ているが、そこから「発達」したワキ能では、シテと対等な存在となつていてと考えている。つまり、シテ一人主義の能が、徐々にワキにも焦点をあてるような表現の多様性をもつようになつたと考えているのである。この考察には、シテ能とワキ能には歴史的分断が存在するように読み取れる。それに對して、野上はあらゆる能に「シテ一人主義」が存在していると考えおり、それは「安宅」のようなワキが活躍

する多人数の能も例外ではない。この夢幻能と現在能の關係に、佐成との見解の相違がある。

野上は「能の戯曲的傾向」での考察を「必ずしも歴史的ではなしに、辿つて見た」と述べている。「安宅」などの能を「ワキの成長」と分析しているわけだから、その考察は歴史的とも取れるのだが、佐成の研究と比すとその言葉の意味が見えてくるように思える。「シテ能」と「ワキ能」を分けて、後者をワキの発達と解釈する佐成の考察は、両者に「歴史的」変化があると見ているが、野上の考察はあらゆる能にシテ一人主義という論理が貫いており、能が質的に変化したわけではない、と捉えられているのである。推測ではあるが、野上は佐成の論を強く意識していたのかもしれない。

四、現在物への眼差し

以上のようにシテ一人主義を読み解く上で、野上が「安宅」のような現在物に強い関心があったことを忘れてはなるまい。ここで詳しく述べる余裕はないが、明治時代から昭和初期までは、現在よりも現在物の番組が多く、人気があつたので、こうした風潮を踏まえているとも考えられるが、それだけではない。むしろ、野上の学問的背景、もしくは能界における立場も影響していると思われる。

野上はバーナード・ジョーなどの研究で知られる英文学者である。その野上が本格的に能へのめり込むようになったのは、一九〇八年一月、高浜虚子に誘われて桜間伴馬の芸に触れたためだったらしい(野上弥生子「桜間伴馬さんのこと」『鬼女山房記』岩波書店、一九六四年。西野稿参照)。その時、野上は大学卒業直前であつた。現代の感覚では、能と出会う年齢としてけつして遅くはないが、当時の能界においては後進の能楽愛好家であり、素人であり門外漢であつた。この出発点が、野上の研究に大きな影響していると思われる。

江戸幕府の瓦解が、能界に大きな影響をあたえたことは周知のとおりである。幕府や藩に抱えられていた能役者は、一時路頭に迷ったものも、新たな庇護者・支援者のもと、明治時代末にはそれぞれの流派・役者が自前の舞台上で演能を行えるようになっていった。この支援者の中には玄人ではないが玄人並に能楽に精通していた者たちがいた。能が盛んな松山出身で子方の経験もあり、東京上京後は能楽の普及に尽力した池内信嘉（一八五八～一九三四）、同じく松山出身で少年時代から謡を習っていた内藤鳴雪（一八四七～一九二六）・高浜虚子（一八七四～一九五九）・河東碧梧桐（一八七三～一九三七）、父が柳河立花藩士で、幼少のときから喜多流の能を学んでいた坂元雪鳥（一八七九～一九三八）、父が大蔵流松井家に狂言を学んでいたため、幼少から能楽に親しんでいた山崎楽堂（一八八五～一九四四）らがそれにあたり、彼らが近代初期の能楽研究・能楽評論の世界を牽引していた「観賞の専門家」（堂本正樹の命名。「夢幻能は能の中核ではなかった」「橘香」一九九六月）であった。池内と内藤はだいたいふ年上だが、ほかの彼らと野上は同世代ではある。ただし、幼少のときから能や謡が体にしみ込んでいる彼らと比べれば、明らかに野上の経験は少ないのであり、能楽研究者としては素人同然であった。そのことが野上の強みでもあったのだが（西野稿参照）、コンプレックスでもあったと想像される。

その野上の立ち位置がよくわかるのが、雑誌『能楽』に掲載されていた「能楽放談会記事」である。これは池内信嘉宅で定期的に行われていた座談会の記録で、前掲の四人が中心的存在であった。野上も五回ほど参加しているが、第二十六回目（第十二巻第三号、大正三年（一九一四））で、野上は「安宅」の評価をめぐり、「観賞の専門家」を向こうに回し、「大立ち回り」を演ずる。少々長くなるが興味深い議論なので引用する（主な参加者は、池内信嘉（如翠・坂元雪鳥・山崎楽堂・河東碧梧桐・野上豊一郎（白川））。

（前略）

雪鳥「そんな第二義、第三義若しくはそれ以下の標準で論ずる事は止めようぢやないか、僕は第一義から此曲（伊海註：「安宅」のこと）の価値を定めたいと思ふ」

雪鳥は此邊からそろ／＼皮肉な口調になつて来た、敵手になつた人は災難だぞ……

白川「ぢや、君達は此曲の価値を何う考へてゐるのです。能として……」

樂堂「さア、あまり感服しないなア、能としちや少し怪しい」

雪鳥「僕も嫌ひだ……」

雪鳥君手を揉みながら首を振つて簡単にかう跳ねつけて了ふ、

白川「一体君達は現在物は嫌ひだと口癖の様に言つてゐる。そりや僕だつて満仲の様なものはいとも思はないが、然し此安宅だとか、若しくは接待など、いふものは決して悪作だとは思はない。悪作どころか寧ろ非常に佳いものと思つてゐる、言ひ換へれば僕の最も好きな作なんだ、従つて日頃から君達の言ふ事が僕には解らない」

雪鳥「接待なんかを君が好きといふのは、そりや語りがあるからだよ、而して君は下宝生の謡を謡ふ、これだけ言へば君が接待を愛する理由は明瞭になる」

白川「否や、決してそんな偏見から僕は斯く言ふのぢやない、勿論僕だつても理想的の能として善知鳥や阿漕や、又は此種の曲を賞讃する事に於て決して人後に遅れるものぢやない、けれ共然うした曲が佳いからといつて、それが必ずしも安宅や接待が悪いといふ理由にはなるまい。ぢや、一体何ういふ訳で、君達は此種の曲の価値を認めないのか、その理由を聞かうぢやないか」

柔和な句調で、囁んで含める様な工合に然も鋭く白川は詰め寄つた。

樂堂「つまり曲に余裕がないのが、僕達の趣味にシツクリと来ない理由だらう」

白川「然し接待の様なものとは劇としたつて立派なものだぜ、それが能の態度で取扱はれてあれば猶更に可いぢやないか。僕は決して異説を立て、君達に對抗はうと言ふのぢやない、全く然う信じてゐるのだ、少くとも能にしてその内容からも現代人を動かし得るものとして僕は實際此種の曲を愛してゐるのだ」

雪鳥「あゝ解つた、君は能に対する最初の約束を忘れてゐるのだ、而して更に絵画と彫刻とを同じ態度で批評し得るものと考へてゐる様な欠陥に陥つてゐる」

楽堂「左様：僕は敢て此所に左様：といふ一語を挿入しよう」

楽堂君聊か藝術座の役者が言ふ相な事を言ふ、その態度が何處か「廿世紀」の齒医者の型をそつくり真似た様にも思はれた。

雪鳥「のみならず君の能は視覚範類にものか、聴覚範類のものか、その点について聊か曖昧な考へを持つてゐると思ふ」

白川「然し接待といふ曲が僕等に与へる感じは非常に強いものがある様に思ふ、安宅からは寧ろ劇らしい感じを多く受けるが、接待からはそれ以上の能らしい気分を味う事が出来る。殊に最後の静かな所なんか実に気持がいゝからな」

雪鳥「然しそりや聴覚から来る感じだらう、一体能や劇は見るものだけ」

白川「否や、僕は此感じは聴覚と視覚と両面から来るものと考へてゐる。然う僻よつて考へたくはない」

(中略)

碧梧桐「…俳句が和歌的になり、和歌が俳句的になる事は決して感心が出来ない。これと同じ理由で能が劇的になる事を我々は最も嫌やなものと考へてゐる、寧ろそんなものは能ぢやないと思つてゐる位ですから」
白川「けれ共僕の考へは違ひます、成程その言葉を反対にして、能らしい芝居は嫌やなものと考へてゐますが、然し劇らしい能は自から別だと思ひます。要するに諸君は能といふ或型に適応しないものは駄目だとして排斥してさふ、つまり囚へられてゐるのぢやないだらうか」

楽堂「然うです、A囚へられてゐるといふ言葉を甘んじて受ける事としよう。ねえ、君可からう」

と雪鳥君を顧みる、雪鳥握り拳で左の掌を叩きながら顔を崩して

雪鳥「ウム、可からう」

と云ふ。

楽堂「つまり我々は能といふものを構成する要素、約束、換言すれば或型に入つたものを要求してゐる。而してその鑄型に入らぬものを価値がないとしてゐる訳だ」

白川「然し何もその型に入つて居らぬからといつて興味のあるものを斥けるには及ぶまい。面白けりやそんな型に入つてゐなくつたつて、可ぢぢやないか」

(中略)

如翠「B人情を唯人情として有の俣に現はしたのでは芝居になつて了ふが、其所に景色を配し、いろいろ安排して、朧ろくくと美しいもので包んで霞を隔て、花を見る様な所に、能の能らしい所があるのぢやらう」

満堂尽く白川君の説に反対だ、けれ共白川君は敢てピクともしない、敗れるべき理由があつて敗れた戦を、楽しんで追憶する將軍の様に、悠揚迫らざるものさある、とは言へ、雪鳥君の皮肉な突貫には時々弱らせられるらしい。

白川「然し諸君の考へは非常な偏見だと僕は思ふがな」

楽堂「偏見：可からう、C此偏見といふ言葉も亦甘受する事としようぢやないか。寧ろ能の能らしい趣味はその偏見に係つるゐる」

雪鳥「可からう、賛成する」

白川「まア冷やかに考へて呉れ給へ。例へば池内さんの様に、幼少の時分から能といふものを滲み込む程見て居られる人にとつては、芝居を見ても左程興味を喚起されないかも知れないが、我々の様な田舎者にとつては其所に余程相違のある事を認めて貰はなければならぬ。頗る勝手な言分だらうが、然し我々と同じ考へを持つて能を見てゐる人は幾らもあるだらうと思ふ」

碧梧桐「要するにそりや君が能をよく知らないから、然う考へるので、知つて来ると然うは言へなくなるに相違ない」

白川 「勿論知らぬからです、僕は門外漢として言つてゐるのです。それだけ又囚はれてもゐないと思ひます」
樂堂 「此所で僕は一寸後藤の説を紹介しませう、先生は能は些とも面白がつて見る必要はないといふのです」
白川 「成程、それで…?」

樂堂 「唯それだけさ、僕はそれで充分だと思ふ」

白川 「面白くないものが何故見たいのだ」

(中略)

樂堂 「つまり面白いといふ意味が違ふ。我々の不完全な言語では、今日の烏頭は面白かつたとか、面白い囃子だつたとか、常に面白いといふ言語を用ゐるが、それは厳密に言へば面白いといふ意味が違つてゐる」

白川 「ぢや、君達はそれを何と言つたら可いと言ふのですか」

雪鳥 「面白いといふよりは寧ろ綺麗と言つた方が適切かも知れない」

樂堂 「つまり実感的の興味でないと言ふ訳だ。尤も後藤の言葉には皮肉も含まれてゐるが、僕はそれに附加へて、能は面白がつちや不可ないものだと言はうと思ふ。少くとも夏目先生の所謂非人情的態度でなければならぬと思ふ」

白川 「だけれ共能は藝術だらう。面白がる必要がない、若しくは面白がつちや不可ないと言ふと、僕は能を藝術として：一体それで藝術と言へるだらうか」

樂堂 「其所へ行くと実は僕も一寸困がね」

(中略)

碧梧桐 「そりや面白いといふ言葉を最も俗な意味に考へて言つたのでせう、同じく興味でも非写實的な情趣をさした意味で実感に訴へぬ面白さを言ふのでせう」

雪鳥 「第一能は形体美術だからね」

如翠「芝居でも実感に訴へぬものは、何となく美しく見えて悪く言はうとは思はせんからね」

碧梧桐「言つて見れば、世話物ものと時代ものゝ差と言ふ様なものでせう。実際我々が見ても世話ものゝ方が面白味がある、然しそれは実感に直接に来る興味で、時代ものから味ひ得る様な情味とは全然趣きが違つてゐる、それと同じ理由に過ぎんのぢやらう」

白川「然し僕の趣味が全然劣等であるといふなら格別だが、僕は芝居も解し得れば能も解し得るものだと自信してゐる。而して烏頭、阿漕等の価値をも充分認めるが、同時に安宅の様なものも面白いと感じ得る。黒人側から何と言はれても、嘲られても、僕の生活に於ける此事實は左迄無意味のものぢやないと思ふ」
雪鳥「大体あゝいふものは、昔の曲を面白くないと思ひ出したから出来たもので、芝居の直ぐ前に出来たのだからね」

碧梧桐「つまりそういう人があるから現在ものも出来た訳なのでせう」

白川「何うせ僕は田舎者だから解らないのかも知れない。而して此田舎者の感情を有のまゝに言へば、汐汲を見るよりは、イプセンを見た方が面白いのだからね」

白川君大に拗ねる、尤も白川君に対して雪鳥君も馬鹿に拗ねてる様子が見える、これぢや、拗ね談會になりアイだ。

(後略)

野上は他の出席者全員を敵にまわし、「安宅」擁護の立場で応戦をしている。最後は野上だけでなく坂元までも「拗ねて」しまいたつたようで、議論が相当白熱したことがわかるが、この議論は、自らを「門外漢」とまで言つてゐる野上と「観賞の専門家」たちとの眼差しの差異を鮮明にしてくれている。

とくに野上に対して対抗意識をむき出しにしているのが同門の坂元雪鳥であるが、彼を含めた他の参加者の能の見方は「能の真価は夢幻能のような幽玄美を基調とする作品にこそあり、「安宅」のような能の価値は認められない。なぜならば、能は、「面白がる」といった世俗的な楽しみを得る芸能ではなく、その美しさを堪能する

形体芸術だからである」とまとめることができる。

こうした「観賞の専門家」の見方を象徴するのが、傍線部④の池内の発言だろう。能は「臙ろく」と美しいもので包んで霞を隔て、花を見る様な所に価値のある芸能であり、それにそぐわない曲は、もはや能ではない（碧梧桐の発言）とさえ考えているのである。

これに対する野上の反論はこうである。「阿漕」のような能を最上のものと考えているが、それらと同じように「安宅」「接待」などの能も高く評価している。皆がこれらの価値を認めないのは、「能はこうあるべき」という偏見に囚われているからである。能は芸術作品であり、それを面白がらないという姿勢は理解できない」と。

他の参加者は、この野上の反論を傍線部⑤「囚へられてゐるといふ言葉を甘んじて受ける事としよう」、⑥「此偏見といふ言葉も亦甘受する事としよう、ぢやないか」と柳に風と受け流し、野上が批判する高踏的ともいえる立ち場をむしろ是としていたのである。彼らの言葉の節々には、自分たちは野上より能に詳しいという確固たる自信が窺え、それこそが彼らの主張を肯定する根拠となっている。

座談会の記録者に「敗れるべき理由があつて敗れた戦を、楽しんで追憶する將軍」とも形容されている野上だが、彼の中にも確固たる能楽観があつた。すなわち、能の価値はけっして一部の専門家に所有されるものではなく、その面白さは誰でも理解しようという考えがあつたと思われる。その姿勢は、野上の他の論の中にも揺曳している。たとえば野上の三部作の二作目『能の再生』（岩波書店、一九三五年）の序には次のようである。

藝術は、他の部門の技術と同じやうに常にしに発展の道程が、分化的に曲げられる傾向を持つために、専門家はややもすれば枝葉末節の技巧の鍛錬に全力を費して、根本の精神を忘れがちである。さうして習慣は人を無反省にするが故に、批評家もまたしばしば根本を忘れて枝葉末節の問題に拘泥する。さういつた状態で長い間終始して来たために、今日すでに中風症に罹かりつつある能に対して更生の道を講じようとするならば、その症状の因つて来たるところの根源を搜らねばならぬ。能の断えず流動する形態様式をば決定的なも

のと見ないで、何がそれを流動せしめるかについて十分に考究しなければならぬ。能をわれわれの生活の上に再生させるには、ほかに方法はない。

野上はこの本の序で、能を総体的に捉える重要性を力説しているわけだが、そのなかで「枝葉末節」に拘泥しすぎる嫌のある「専門家（実演者）」「批評家（研究者・能評家）」に批判的眼差しを向けている。この「批評家」のなかに、「能楽放談会」などで能の演技論・演出論を交わす「観賞の専門家」たちが含まれていたのは明らかだろう。

こうした野上の発言を改めて読み直してみると、野上は自らの研究を「専門家」「批評家」ではなく、能にそれほど馴染みのないが、新たな観客になり得る人々に向けて発信しようとしていたことに気づく。『能の話』(岩波書店、一九四〇年)では、能が能楽師や能舞台の数を挙げ、昭和初期にいかにか能が流行しているかを示したあとに、次のように述べている。

けれども、今日の能の隆盛といふのは果して真の隆盛であらうか。言ひ換へれば、能は毎月(少なくとも外形的には)盛んに行はれてはゐるけれども、それは果して能の進むべき道を正しく辿つて進んでゐるものといへるであらうか。もしさうでないとすれば、現在の能の傾向には警戒を要すべきものがあるといふことになる。実際さういつた憂慮をしてゐる人もある。それは心ある人に考へてもらひたい。

この発言からも、野上が「専門家」「批評家」と彼らに近い愛好家によつて形成される能楽界に大きな不満を抱いていたことが読み取れるが、彼がこうした現状を打破することを期待していたのは、まだ能の真価に気づかない「知識人」たちであった。「私の話は日本文化史の展開に役立つ民族的特質を抽出することを目的として、しばしば世界文化史との対照をも問題とするであらう。それ故に、私の話しかけたい相手はの人は、さういつた問題に関心を持つ人であつてほしい」と述べているように、様々な芸術との比較しながら能の価値を「発見」できるような者にこの本を書いたと示しているが、この姿勢は野上の他の研究にも通ずるものであった。『能 研

究と発見』の序にも、能楽界の隆盛は「能の本質的価値問題と拘はりのないことである」とし、今能が演じられることの意味を「新しい目で見直し、新しい頭で考へ直」すことが、自らの研究課題と据えている。

言うまでもなく、シテ一人主義の研究はその「新しい目」で能を見つめた研究の一つであるが、穿った見方をするのであれば、シテ一人主義は、「醜ろく」と美しい」能だけを愛した「観賞の専門家」への反抗の表れでもあったように思える。確かに野上は「現在物は厳正な字義での能ではない」と河東碧梧桐の発言に近いことも言っているが、【本位】に見えるように、本来は子方なども登場する多人数の能の分析と一体であり、夢幻能と同様に「安宅」の面白さを認めようとする立場であった。この立場は「観賞の専門家」にひどく否定されたわけであるが、自らの能楽観を曲げることはなかった。その結果として、まず結実したのがシテ一人主義をめぐる一連の研究であつたと考えられるのである。あらゆる能に「シテ一人主義」が存在するという説は、あらゆる能に積極的に評価すべき価値があると考えた野上だからこそできた「発見」だったのでないだろうか。

まとめ — 門外漢の系譜

一休能評といふ仕事は余程困難なものである、能のテクニクに通じて居らねばならず、深い専門的智識を貯へて居らねばならず、唯我々が好悪の観念計りて観るのは違ひ、拍子とか、型とか、その歴史にまで遡つて考へる必要もあり、中々容易な事業では無い、我々が唯茫然として、鍛錬された役者の渾身の力を振ふを見て、好いとか、面白いとか漠然として感ずる然うした不得要領の感じでは所詮役に立たぬ、恚う考へて来ると、私共の様な浅薄な見方では到底追ひ付く仕事でないと思ふ様になつて、近頃では一寸観能の所感を人に話すにしても気がさして、臆病になり、殆ど手も足も出ない始末となつて了つた。

然しながら翻へつて思ふのに、これは余りに愚な話だ、何も専門的な智識一型や拍子や歴史を知らぬからといつて、自分自身の趣味から出立し、それを基礎とした選択を以て自由に批評の出来ぬ事はあるまいと思ふ、(中略)

とにかく世に専門的智識にのみ囚へられた事程いやなものはない、真に自己に何所かに影を潜めて了ひ、自己の趣味性から流れ出る声、自己の人格から起る感じは全く消え果て、遂には生命の無い型の人となつて了ふ、能を見るにしても局所くの手や足の型をのみ見て、全局から来る肝要な感じを宛るで忘れて了ふ形骸の美醜を論じて、生命の如何は問ふ所とならぬ、(後略)

(囚はれざる能評『能楽』九卷十二号、一九二二年十二月)

右は管見に入つた限り、野上が最初に発表した能楽に関する稿である。この時、野上は二十八歳で、桜間伴馬の「葵上」の芸に魅せられ、能にのめりこむようになって三年後のことであつた。この稿でも、野上は一部の専門家が能楽を自由に論じられない雰囲気を作っていることに苛立つており、「局所」に拘るのではなく「全局」からのその生命感を捉えるような能評・研究を欲している。野上のこの姿勢は、生涯変わることはなかつた。

野上は能の「全局」を捉えるために、夢幻能と現在能を分類しながらも、一方で共通項を探るような研究を続けた。たとえば、「能楽と演劇」(『金春』第三巻八号、一九三四年七月)「合唱歌の非戯曲的性質」(『能の再生』岩波書店一九三五年)では、能の表現の非演劇的要素として合唱部(地謡)を問題にしているが、これは野上の能楽観の集大成といえる「能楽概観」(『能楽全書』第一巻、創元社、一九五二年)に見られる叙述成分・提示成分の分析へと繋がっている。これらの要素は、夢幻能に限らずすべての能に包含される特質として考察しているのであり、このよう「全局」に通ずる特質を照射することに、野上の研究の特徴があつた。シテ一人主義の研究もまたしかりである。これまで見たように、野上はこの研究で、諸国一見の僧のようなワキを分析したわけではなく、能を「全局」から捉えようと試みていたのである。

こうした視点は彼が門外漢だったからこそ得られたものであったが、これと同じような視点を持っていたのは野上だけではなかった。国文学者で、国定教科書の選定に深く関わった芳賀矢一（二八六七—一九二七）は、前シテが現世の人、後シテが後世の人となっている曲も「複式能」と呼んでいるが、その分析をもとに、佐成謙太郎が前掲のような分類を行なっている。囃子や演出に精通しない者たちは、能を総体的に捉え、各曲の特徴を〈分類〉し、〈命名〉することで、この不思議な芸能の特質をつかみ取ろうと試みたのである。能の新たな魅力の〈発見〉に努めた門外漢の系譜の中に、野上もいるのである。

彼らが能楽研究の道を歩みはじめたころ、ちょうど吉田東伍による世阿弥伝書の発見もあった（一九〇九年）。研究者である彼らが、この貴重は発見に触発されないはずはない。「鑑賞の専門家」ではない能楽研究者の出現には、こうした好機もあった。ただし、明治時代になり、欧米の演劇が流入し、日本人が様々なエンターテイメントと出会うなか、これらと同じ土俵に上る必要がある能楽が門外漢たちに分析されることは、ある意味必然でもあったのだろう。囃子・演出に詳しい者「忠度」も「摂待」も同じ能であることに何ら気にとめず、自分たちの嗜好に合わない能があればその価値を否定すればよかったというのが、この時代以前の状況であった。しかし、門外漢たちはこうした理解を許さなかった、というよりできなかった。そのため、良い意味でも悪い意味でも能に対して客観的存在として対峙することができ、すべての能を同じ種類の「劇」として、マクロ的に見ようとすることができたのである。そのとき、「これらは本当に同じ劇なのか」という疑念が出されるのは当然である。その疑問に誠実に向きあった研究者が野上であったのであり、だからこそ彼の言葉は今も生き続けているのだらう。

【論文】

ワキの役割——野上豊一郎「ワキ見物人代表」説と後代の展開・継承

小田 幸子

はじめに

野上豊一郎の能楽関係論考を概観して気づくのは、「能とは何か」という大きな主題にむけて彼が論述を重ねてきたことである。その範囲は、世阿弥伝書の校訂・校注、謡曲本文の解注、能面研究、世阿弥研究、概説書、『能楽全書』編集など多岐にわたるが、『能——研究と発見』をはじめとする理論書における重要な試みとしてあげられるのが、舞台芸術としての能全体を貫く特性を、極言すればひとつの表現で、ひとつの論理で言い表そうとしたことである。それが「シテ中心主義」（「主役一人主義」とも。以下では「シテ中心主義」と呼ぶ）であり、これを論証する柱として提示したのが、ワキを「見物人の代表」とみなす説である（以下「ワキ見物人代表」と呼ぶ）。ワキ見物人代表は、シテ中心主義と一対の概念であつて、むしろその一部とすらいえる。従つて、当初はワキの役割全般を分析するなかで提起されたものではなかつた。その点は注意を要する。というのも、本来一体の論であるにもかかわらず、シテ中心主義はさほど論議の対象とはならず比較的受容されていったと思われるのに対して、ワキ見物人代表の方は同時代以降の論者に波紋を呼びおこし、注目され続けてきたからである。標語として両説を比較すると、能が総じて主役中心の舞台劇たることは疑問の余地が少ないのに対して、ワキを観客の代表とみなす説は、大胆かつ刺激的で誤解を招き易い。言葉が一人歩きしてしまった面は否めないだろう。また、後述するように、能を特定の規範に当てはめて解釈する方法にやや無理が生じている。だが、重要なのは、「能

とは何か」を論述する手がかりとして、ワキに注目したこと自体にあるだろう。いわゆるヨーロッパアリズム劇に対して、能は異質な側面を多く有する舞台劇だが、特に夢幻能の発生ならびに劇構造を論じる際、野上以後の少なからぬ論者がワキに着目し、ワキの役割に言及している。その意味で野上の理論は先駆的位置にあり、ワキへの着目は、能を解明する手がかりとしての有効性を現代でも失っていないと思われる。

「野上豊一郎の能楽研究を検証する」シンポジウム『シテ一人主義』再考』においてわたしは、「ワキの役割」と題して、第一にワキ見物人代表に関する野上の言説を整理して特質と問題点を指摘し、第二に後代における展開と継承を跡づけた。本稿はその発表をもとにしたものである。

第一節 ワキ見物人代表の展開

一、ワキ見物人代表の初出

野上がワキ見物人代表をはじめて唱えたのは、大正十二年（一九二三）、雑誌『思想』二月号に発表した論考《能は一人本位の演戯である、附、子方使用の心理について》においてである。これを改稿したのが《能の主役一人主義》で、昭和五年（一九三〇）刊行の『能—研究と発見』に収録されている（子方の論は《子方の舞台的效果》と題して別論考とし、同書に収録）。初稿と改訂稿は若干異なるが、論旨の上では大差ない。ここでは、《能の主役一人主義》に基づいて、初期の理論を検討する。

野上の主張は次の三項目に集約できる。

A 能は主役一人の演戯を見せるものである。

B 能は戯曲ではない。

C A・Bは、曲中における登場人物の役割分析によつて論証しうる。

この主張は、論考の冒頭に簡潔に述べて以来、補足や改訂を加えつつも、基本的に変更することはなかった。以下に、よく知られている冒頭箇所を引用しよう。

能は主役一人の演戯を見せることを建前にしたものである。これが私の能に対する見方の根本である。そうしてこれは結局、能は戯曲ではないという断定にまで私たちを導く。何となれば、戯曲であるためには、少くとも私たちの今日の理解に於いては、其処に二つ以上の思想を代表する性格の対立が存在しなければならぬから。然るに能には原則として此の対立がない。シテとワキは一見対立者の如くであるが、本質的には決して対立するものではない。シテ（為手）は読んで字の如くする人である。演戯者である。併しワキ（脇）は之と対立する第二の演戯者ではなく、文字通りに脇にいて見る人である。圏外の傍観者である。これは理窟ではなく事実である。

野上の理論を理解しようとする時のポイントが二点ある。第一点は「戯曲」を定義した傍線部である。野上は「戯曲」には「二つ以上の思想を代表する性格の対立が存在する」ことが必要だとした。説明を一切抜きにした断定であり、この規範に照らしてあらゆる能を分析する。「劇」の概念が広がっている現代からみれば、「戯曲」の定義そのものの妥当性が問われるはずだが、野上にとつては動かしがたい自明の前提であつたと思われる（この問題は後に取り上げる）。第二点は、論理よりも事実を優先するという波線部である。ここで言う「事実」が「舞台上の実際の動き」を意味することは、右の引用に続く〈田村〉・〈松風〉・〈景清〉を考察する箇所に明らかである。はじめに、「見物人の代表」なる表現がはじめて登場する〈田村〉から引用しよう。

その間（前シテが演技をしている間）旅僧は指ざされるままに景色を眺めたり、物語に耳傾けたりするので、自分から働きかける何物をも持っていない。…（後場になると）旅僧はもはや全く舞台に用事のない人で、殆ど木偶の如く柱の蔭に坐つて、一言半句の言葉をも発しない。役者として斯んな登場の仕方をするものが他にあるだろうか。少し皮肉な云い方ではあるが、彼は私たち見物人の代表者として出ているのである。そう見るよりほかに、彼の登場の仕方に対する解釈を私は知らない。（カッコ内は筆者）

「自分から働きかける何物をも持」たず、坐つたまま「一言半句の言葉をも発しない」ワキは、シテと対等な対立者ではない。ではワキの役割は何なのか、と考えた時に出てきたのが「見物人の代表者」ではなからうか。そう表現する理由は明確には述べられないが、文脈から判断すると、この場合〈シテの行為を黙って見物している点で観客と何ら変わるところがない〉程度の意味合いかと思われる。

次いで、ワキ・シテ・ツレの役割比重を述べる〈松風〉では、ワキは〈田村〉同様見物人の代表者であり、ツレはシテと一心同体の如くではあるが、一曲の主題表現は、「実演の上」に於いて…シテ一人に依つて担任せられるとして、「実演」を判断基準として重視する。四人の登場人物について考察する〈景清〉の解釈も同様である。すなわち、ワキ（里人）は、娘の心情を推し量つて景清に逢わせ、軍物語を誘い出す意味では「戯曲的に余程進歩したワキであるかの如く思われるかも知れないが、事実はずしもそうでなく」、「舞台上の所作としては」、娘を景清に引き合わせるだけで、「あとはシテの演戯の邪魔にならぬ程の距離を保つて一隅に坐っているきりである」と述べている。ここでも、台本上の役割より、「舞台上の所作」を「事実」として優先していることがわかる。

このように、台本に即して登場人物（ワキだけではない）の役割を確認し、そこに演技上の軽重を重ね合わせ

ていくという二段構えになっており、後者をより重視する。この方法は、例示した三曲に関しては十分説得力を持つが、複雑な筋を持つ現在能分析で用いられた場合、台本分析と舞台分析のすりあわせに若干無理が生じる場合があり、ややもすれば野上の論を複雑にする要因となっている。だが、そうであっても、野上の姿勢には注目すべきだろう。次の発言は彼の能の見方をよく示すものである。

併し注意を要することは、此の発言（ワキの発言）の度数の多いことを以つて直ちにそれが役割の重要さを意味するものときめてはならないことである。若しそれが簡単にきめられるならば、能は本文テクニカルを読むだけで研究が出来る筈である。けれども、事実に於いて、能は決して読むべきものではない。正しく能を知るためには、ぜひとも舞台の上でそれを見、且つ聞かねばならぬ。私には舞働マユカと音曲ネンクを除外した能というものは実感することが出来ない。言葉数の多少の如きは実はそれほど重大な問題ではなかつたのである。（《能の戯曲的傾向》。カッコ内筆者）

台本分析を通じて判明することは、劇のすべてではない。とりわけ、楽劇である能は舞や囃子や謡の比重が大きいのである。同様の発言はほかにも多く見られるが、演じられる総体としての能を説明しようとする姿勢が野上にははじめから明確にあつた。役の軽重でもセリフの分量でもなく、器楽伴奏による舞事や舞台上の演技の総量を特に重視するのは、そのためである。

本題に戻ろう。野上は、シテと他役との舞台上における役割を明らかにすべく、二人・三人・四人が登場する三曲を取り上げた結果、登場人物の人数とは無関係にシテ中、心主義が認められると結論したのであり、決してワキについて述べるのが主体だつたわけではない。また、夢幻能に限定しないことにも注意される。同書後半では、世阿弥の『能作書』（『三道』）に模範曲として掲出する二十九曲を、「例外なしにすべて役者一人の演戯を見せる

ように出来て居る」と断じている。舞台芸術としての能の特色を、ヨーロッパリアリズム劇のあり方に照らして、大づかみに言い切ったところに、この論の新味があったろう。「ワキは見物人の代表者」という表現は、論述の過程でいわば副産物のように提示されたことが読み取れる。そして、次の段階では、よりこみ入った作品の分析がなされることになる。

二、ワキの成長

能の「戯曲的」発展をワキ役の軽重とからめて論じたのが、ワキ見物人代表を発表した三年後の大正十五年（一九二六）四月に雑誌『国語と国文学』に執筆した《能の戯曲的傾向》である（『能—研究と発見』に収録）。繰り返になるが、シテ中心主義を能全般に及ぼすのが、野上の立場であった。ただし、実際問題として、現在能の中でも「現在物」（主人公が現実の男性の能。「直面物」ともいう。この分類名は現代ではあまり用いられない）には、それが当てはまりにくい作品が少なくない。そうした観点から、《能の主役一人主義》での主張を補足ないしは補強する意味で執筆したのが本論考だろう。冒頭では〈東北〉を例にワキ見物人代表を再説するが、前稿より丁寧な説明がなされているので、はじめに要所をピックアップしておきたい。

初めにワキの役当は軽かった。彼は神職らしく、或いは僧侶らしく扮装して舞台には登るが、謂わば見所けんじよの群集の延長の如きもので、単にシテ即ち演戯者の脇に立って、話しかけたり、励ましたり、同情したりしながら、その演戯を誘い出し、そうして見所の代表者の如き資格で舞台の片隅に坐ってそれを見物するのが役目であった。…主演者の演戯が一たび重要な部分に入ると同時に、彼はもはや舞台に用事のない人であつ

た。すべて此の種の主演者の演戯（主として舞）を見せる為の曲に於いては、ワキは要するに一見物人に過ぎない。…これがワキ本来の行き方であった。

説明が丁寧になっている分、例曲を〈東北〉一曲に絞っている分、以前よりわかりやすくなっており、また、傍線部のように「ワキの役当」の軽重に歴史的相違が存することを示唆したうえで、波線部のように、該当する作品を限定してもいる。ここに限らず野上は、以前の論に修正や補足を施しつつ再説を繰り返すことで、次第に成熟した論にまで整えていった。

さて、冒頭に続く本論では、シテ以外の登場人物、なかでもワキの比重が重い現在能を取り上げ、「ワキの成長」との観点から分類したうえで、①「戯曲的成分の増加は、ワキの権能の拡大と一致する」、②結果的には能は「完全に戯曲的にはなり得なかった」とまとめる。見物人の代表を脱したワキは、次の三段階にわたって成長を遂げたという。野上は、第三段階目の中でも〈谷行〉や〈壇風〉を戯曲として最も発達した形と考えた。

第一段階 シテの演技と交渉を持つ。 例〈熊野〉・〈船弁慶〉

第二段階 対話を主とする。 例〈正尊〉・〈安宅〉

第三段階 シテを凌駕する。

イ、シテに舞働をさせず、常にワキが展開をリードする。 例〈接待〉

ロ、ワキが演技の主体となり、シテはほとんど何もしない。 例〈張良〉・〈羅生門〉

ハ、性格の重みでシテを圧倒する。 例〈谷行〉・〈壇風〉

個々の分析に深入りすることは避けるが、野上の戯曲観に基づく限り、①の結論はおおむね納得しうる見解といえる。一方、②の結論には筋が通りにくい面が見受けられる。

ワキがシテと深い交渉を持つ作品であっても、対話を通じてシテと対立する作品であっても、「舞」や「舞働」

など主要な演技をシテが担当する〈熊野〉・〈船弁慶〉・〈安宅〉等は、シテ中心の曲に含めてよいとして、「對話が主要部を成して」おり、「戯曲的に二つの原理を対照させたもの」と明言する〈正尊〉や、「ワキの支配力は、初めから終まで行き互つて」いるのに対してシテは「殆んど木偶の如き状態」と述べる〈接待〉、「ワキがシテに入れ替わつた能」とする〈張良〉・〈羅生門〉等は、論旨からみて「戯曲」たる資格を十分有するはずである。ところが、まともに際して野上は、「〈安宅〉〈正尊〉に於いて見るが如く、また〈谷行〉〈壇風〉に於いて見るが如く、最も戯曲的な能といえども、完全に戯曲的にはなり得なかつた」とやや強引に結論を導き出してしまふ。野上の真意がどこにあるのか、疑問を禁じ得ない。しかし、これは論の破綻とみなすべきではなく、説明が十分なされていないためと思われる。次節で取り上げる『ワキの舞台的存在理由』や昭和十八年（一九四三）刊行の『能楽全書』第一巻所収の「能楽概論」等を参照すると、先の諸曲について言説を多少変化させながらよりきめの細かい分析を行つており、要するにこれらの作品は〈能〉としては戯曲的であつても本格的な戯曲とは異質だ」と考へていたことがわかる。とはいへ、この段階で説明不足なのは確かで、野上の論述には、ズバリと本質を指摘する反面、部分や例外に関して緻密さや整合性を欠くところがあるのは否めない。

『能の戯曲的傾向』は、本来は『能の主役一人主義』の補足的論考であつて、総論に対する各論に相当する。ワキ以外の人物にも言及するが、主としてワキが重要な役割を演じるタイプの能を扱う論点が新たに加わつた。しかし、いまだに決定稿ではない。さらなる改訂を施して総合的にワキの論を展開しているのが、次の『ワキの舞台的存在理由』である。

三、ワキ見物人代表の到達点

《ワキの舞台的存在理由》は昭和十七年（一九四二）四月下掛り宝生流催能の席上講演する予定で草案として執筆したものを、雑誌『謡曲界』（五三―四号、一九四一年）に発表した論考である（昭和十八年刊行『能の幽玄と花』に収録）。先の二論考から十年ほど隔てて書かれた本論考は、台本・舞台におけるワキの役割全体を整理したうえで、シテを支える技量の重要性に及ぶなど、目配りが行き届き、説明も丁寧である。ワキ方主催の場で発表する予定だったことの反映だろうか。以下にワキの役割をまとめておく。

(イ) シテの演技を誘い出す

(ロ) 発声者（開口人）

(ハ) 質問者

(ニ) ねぎらいを受ける人

(ホ) シテと同種の者でなく、同時代人でもない

(イ) ～ (ホ) は「能の本形ともいふべき最初に完成された種類」、すなわちシテ中心主義が当てはまる作品におけるワキの役割を列挙したもののだが、(ニ)には新たな視点が加わっている。すなわち、後シテの舞踊を「訪問者に対する感謝の表現」とし、修羅能の場合はワキの回向に対する「報酬の表現として、懺悔の意味で、修羅道の苦患を見せる」と捉えている。そして、(ホ)は、これまでとはやや異なる論点からワキ見物人代表を再論したものである。

ワキはシテの扮する人物性格と同種の者でなく、また同時代人でもない、ということは最も注意すべき点である。シテは神に扮したり鬼畜に扮したりするが、ワキはどこまでも人間である。シテは過去の著名な人物や

伝説の人物に扮したりするが、ワキはその同時代人ではなく、常にわれわれ見物人の同時代人である。別の言い方をすれば、作者の同時代人である。此の点だけでも、能は本来言葉の厳密な意味での戯曲ではないということが言い得られる。戯曲では二人以上の同時代人が何等かの利害関係に於いて互いに交渉することが必要とされるが、能の原型的のワキは、たとい見かけは勅使となつていても、要するに、われわれ見物人の代表者が仮にそういう形で登場するまでのことで、神とか鬼畜とか過去の伝説の人物とかと何ら直接に交渉するところのないのは、われわれ見物人と同様である。

ここでは、「常にわれわれ見物人の同時代」として生きているワキが、靈的存在たるシテに應對するという意味において、「見物人の代表者が仮に」登場しているのだと説いており、初期の説と合わせることによって、より説得力が増す。さらに波線部をみると、この構造を「能の原型的のワキ」に限定し、別の箇所では「能の発生の初期の形に於いて見られる特長」とも言い換えている。《能の戯曲的傾向》にも萌芽がみられたが、野上はここに至つて明白に能の戯曲的發達という観点を導入したうえで、能作品を二大別した。すなわち、原型から出發したワキが、やがて「見物人の代表者たる資格を棄てて」、「シテの扮する人物と同時代の人物に扮し、何等かの問題に於いてシテの扮する人物と直接に利害の交渉を保つような役目」を持つに至つたとの立場から数曲を例示した末に、これらは戯曲性が増大してはいるが「本来の樂劇要素をばそのまま保存して踏襲したために、今日から見ると、その革新は中途半端なものであつて、過渡期的存在物たるを免れない。即ち、能としては最も劇的なものではあるが、劇としてはあまりに樂劇的であることを免れない」と結論する。能の發達史の観点から修正を施した結果、この場合も論旨はたどりやすくなつてゐる。

従来 of 自説を統合して整合性を施した《ワキの舞台的存在理由》の所説は、ワキの役割からみた能の戯曲的考察の最終段階と考えられ、昭和十八年（一九四三）刊行の『能楽全書』第一巻冒頭の「能楽概論」にも基本的に

引き継がれた。「現在物」の分析は、表現を少しずつ変化させながら、ここで取り上げた以外の著作でも言及するが、主張には大幅な変化はないと判断される。一方で野上は謡曲の詞章分析に傾いていき、登場人物の役割をそれとからめて論じることが増加した。

なお、野上には、夢幻能の後シテをワキの幻覚とみる『能の幽霊』（昭和八年「文学」五月号初出。『能の再生』に収録）もある。本稿の主題とはややずれるが、ワキに関わる論として重要と思われるので、若干触れておきたい。佐成謙太郎の提言になる「夢幻能」という分類名が普及して現在一般化しているが、当時この表現はまだ定着していなかった。同時に、前シテと後シテは「何物」なのか、両者の関係はどう考えるか、後場はワキの夢なのか等々、根本的な問題をめぐって、様々な提言がなされ、活発に論議されていたのである。

「過去の人物の靈魂が現在の人物の如き姿を装うて訪問者（ワキ）にあらわれる」構想の作品を、一律に「幽霊劇」と称することに野上は異を唱え、幽霊をほぼ二種類に分類する。すなわち「厳正な意味での幽霊」は、瘦女・瘦男・アヤカシ等の面をかけ「ワキに対して直接の目的を持って現われるものに限られるべき」であって、それ以外の「真実の幽霊でない幽霊」に関しては、〈巴〉を例示しつつ次のようにまとめている。

前シテの女、老女、老翁などは、それぞれの靈魂の仮の姿で、後シテの本体と見えるものは、実はワキの幻覚に過ぎない。だから、過去の同一人物が、前シテと後シテと二度にわかれて出るものは、前は幽霊的出現であつても、後は見る人（その代表なるワキ）の幻覚ということにきめて置きたい。∴真の幽霊能に対して、これ等は一括して幻覚能とでもよべば呼ばれ得る。

ネーミングがうまい野上にしては、「幻覚能」はあまり適切な表現ではない。「夢幻能」や「幽霊能」に対抗する表現だったろうか。それはともかく、靈魂を出現目的から二分類するこの考え方にも、シテに対するワキの位

置に注視する姿勢が見て取れる。野上にとってワキは、シテとのバランスを計る定点のような役を担っていたのだろう。

四、能とはいかなる劇か

以上、ワキ見物人代表の理論的変遷を年代順に追いつつ概観した。あらためてまとめると、シテ中心主義とワキ見物人代表は、能の本質的特性として、発表当時は、漠然とかもしれないが、能全体に及ぶものと考えていたふしがある。次の段階では、この論が当てはまりにくい作品の考察へと進み、それらを踏まえた最終段階として、ワキを見物人代表と見なしうる形態を「原型的」と称して、ワキの比重が重い「現在物」などと区別するに至ったのである。従って、後者にはシテ中心主義もワキ見物人代表も当てはまらないことになる。結果的にワキを視点とした考察が増加し、また、総合的見地からワキの演技や役割に言及する論も加わったために、野上の論がワキを主題にしているかの如き印象を与えることになった。

十年以上にわたって補足や補正を加えつつ、野上が一貫して言い続けてきたのは、〈能は戯曲ではない〉という一事である。第一節のまとめとして、この主張をめぐって考えてみたい。先にも野上の戯曲観を示す数カ所を引用したが、次には昭和六年（一九三二）十一月号の『思想』に発表した《合唱歌の非戯曲的性質―能とギリシア劇との比較》（『能の再生』所収）から引用しよう。

戯曲の理想としては対話のみに依って事件を發展せしめ、性格を築き上げねばならぬということである。近代的の潔癖を以って言えば、独白や傍白さえも存在を許しがたいのである。しかるに、若し能を戯曲の見地から見るならば、何という原始的な、超理論的な、そうして非戯曲的な表現でそれはあろう。合唱歌が常に

主要部を占めて、對話はただ主演者を主要部に導くだけの効果しか持たず、役者はシテとワキと対立するか
の如く見えるけれども、その実、ワキは見物人の代表者に過ぎないで、シテのみが役者であると言つても過
言ではない。私はこういう特殊な舞台芸術が世界の何処に類例を持つかを知らない。：

(傍線部については後述)

地謡がテキスト上の主要な言葉を謡うとの観点から能の非戯曲性を説く右の説と、「戯曲では二人以上の同時
代人が何等かの利害關係に於いて互いに交渉する」・「二人の歴史的人物が現在生きている形で対立する。一方が
勝てば他方は負け、一方に得る所があれば他方には失われる所がなければならぬ、という關係に於いて事件の葛
藤が生じる」(《ワキの舞台的存在理由》)などの発言を重ねると、野上が想定していた「戯曲」の輪郭が浮かび上がる。
再三述べてきたように、大略、ヨーロッパリアリズム劇の戯曲観に基づくと見当はつくものの、野上が依拠した
可能性がある書物をつきとめることはできなかった。ひとつの参考としてあげておきたいのは、近代戯曲論の定
説となった、グスタフ・フライターク(一八二六〜九五)が一八六三年に著した『戯曲の技法』である。次の一節
などは、ある程度野上の戯曲観と重なるだろう。単純化していえば、フライタークは意志の対立葛藤に戯曲の本
質をみていた。

戯曲のあらゆる場所に於いて、その一方が他の一方を絶えず要求する戯曲的生活の二つの方向は、行動と反
對行動との中にその力を揮ふのである。しかしまた大體に於いて、戯曲の行為と性格群の配置とはそのため
に二つの部分からなるものとなる。戯曲の内容は常に主人公が反對する力に對して行ふところの、激しい精
神の感動を伴ふ鬭争である。そして主人公が一定の一面性と偏執との中に或る強烈な生活を含まねばならな
いやうに、反對行動をする威力もまた人間的な代表者によって認められるやうにされなければならない。

（第二章「戯曲の構造」〈第一節 行動と反対行動〉より。島村民蔵訳による）

ヨーロッパに留学した島村抱月の発案により坪内逍遙や大隈重信らが明治三十九年（一九〇六）に文芸協会を設立してヨーロッパの翻訳劇等を上演し、また、日本演劇の近代化を目標に小山内薫と二世市川左団次が自由劇場を以て活動を開始したのは明治四十二年（一九〇九）であったが、明治後期から大正期にかけては、ヨーロッパの戯曲理論を紹介した久松定弘『独逸戯曲大意』（一八八七）をはじめ、小山内薫『戯曲作法』（一九一八）などが出版され、戯曲論も併行して盛んになった。たとえば、小山内は『戯曲作法』の中で、意志を持った人間の「闘争」に戯曲の本質を見るプリュンチエールの説や、戯曲を「危機の芸術」とみるアーチャーの説を紹介・論評している。野上が「戯曲」の語を用いることについては、当時の演劇界における戯曲論の広まりを念頭に置く必要がある。

さて、先に引用した傍線部からは、野上の本音がうかがわれるように思う。野上夫妻が本格的に能に関わるきっかけとなったのは、高浜虚子の勧めで仲間伴馬と金剛右京の能を見た明治四十一年（一九〇八）初頭であったという（本書、西野稿参照）。東京帝国大学で英文学を専攻し、バーナード・ショウに関する著作を持ち、夏目漱石や門下生らと交流を重ねていた野上がヨーロッパ演劇とその戯曲観に親しんでいたことは想像に難くない。そうした教養と知見を以て能に接した際の驚きと率直な感想がここに現れているのではなからうか。そして、この実感が出発点となり、能の舞台芸術的特性解明に乗り出していったのではなからうか。

シテ中心主義やワキ見物人代表は、論旨の上では〈能は戯曲ではない〉ことを証明するための論の如くうつる。しかし、それは真の目的ではあるまい。実は、野上の理論書を読み進める過程でわたしは、結論を前提に組み立てられたかのような論述のありかたや、ヨーロッパの戯曲論を能に当てはめる方法に少なからぬ抵抗を感じた。原則を主張することに性急で、機械的に処理しすぎているとも思う。ただ、このように批判したところであまり

実りはないし、野上の本意からずれてしまう。彼は、目の前で演じられている〈世界に類例のない〉不思議な舞台芸術が、〈いかなる意味〉で近代ヨーロッパ演劇とは異なるのか、その具体相を、台本面と舞台面の分析を通じて解明しようと意図したのだろう。能を日本の内側に閉じ込めることなく、世界の中のひとつの演劇として、リアリズム劇に対抗させるつもりであったかもしれない。

ところで、本シンポジウムの伊海孝充氏による発表「野上豊一郎の『戯曲的』分析」によると、シテ中心主義やワキ見物人代表は、必ずしも野上の独創ではなかったらしい。大正十二年（一九二三）二月に《能は一人本位の演戯である》を『思想』に発表する以前、すでに佐成謙太郎によって同様な指摘がなされており、また、野上が論述を変化させていく過程で、佐成の影響を受けた可能性があるという。詳しくは本書伊海氏の論考に依りたいが、ここでは、佐成の演劇観が述べられている《謡曲―特に夢幻的楽劇として見たるその形態組織について》（岩波講座『日本文学』一九三三年）の一節を引いて野上との共通点を確認しておきたい。

まづ第一に、能楽を劇と見るべきや否やについて疑義がある。何故ならば、凡そ劇なるものは、対立の関係にある二人以上の登場者が、劇的現在の立場にあつて、科白所作によつて、葛藤を展開して行くべきものであるのに、能楽では、シテ一人主義の歌舞を主體としてゐて、その對手たるワキはシテと對等の関係に立つてゐない。根本的にいつて、ワキとシテとが時代を異にしてゐるから、葛藤を惹起すべき時が成立しない。

野上は「戯曲」と言い、佐成は「劇」と言う違いはあるが、二人の認識はたいへんよく似ている。直接的影響関係はともかくとして、野上と佐成の発言から、この種の演劇観・戯曲観が当時の演劇関係者の間で、あるいはより広い範囲の文化人の間で共有されていた概念だったことがうかがわれる。国文学者である佐成も野上と同様な戯曲観に照らして立論している事実は、近代的論述の立脚点としてヨーロッパ戯曲論の導入を必要としたこと、

それによって説得性を持ち得たことが推測される。過去の文化的遺産としてではなく、あくまで当代にとつての文化的・芸術的価値を見いだすべく、「私たちは、今極めてまじめに、能をもう一度新しい目で見直し、新しい頭で考え直さねばならぬ」(『能―研究と発見』序言)と述べる「新しさ」とは、ほぼ「近代」に置き換えることができるのではなからうか。最初に述べたように、命題を立てたうえで、台本と舞台を突き合わせつつ、個々の作品に分析を加えていくのが、野上のスタイルであった。野上の論述上の大きな特色としてあげられるのは、個々の作品を「戯曲」として考察するこのスタイルにある。そして、先に紹介したものを含めた「戯曲論」に広く共通するスタイルもまた、ヨーロッパの劇作品を例示・説明しつつ「戯曲とは何か」を解明していくものである。野上の能理論は、あるいは、彼なりの「能の戯曲論」だったのかもしれない。いずれにしても、野上理論の意義は、同時代における演劇界の動向全体を視野に入れた時、より明確になると思われる。

《能の主役一人主義》は、「ただ断つて置かねばならぬのは、能が戯曲的でないことは必ずしも能の芸術的価値を貶しめることにはならないということである。能は寧ろその非戯曲的な所にこそ却つてその特有の価値を持つて居るのである」との言葉で結ばれる。〈能は戯曲ではない〉というのは、野上理論の終着点や結論ではなく、実際は論述の出発点だったとみなすべきだろう。また、「ワキは見物人の代表者に過ぎない」とか「木偶の如く柱の蔭に坐つてる」などややネガティブに響く文言にしても、ワキを無用の長物として軽んじているわけでは決してなく、シテと同等には対立しないことの強調とみるのが妥当だろう。そもそも、「ワキは見物人の代表」なる言説は一種の比喩的表現なのであって、観客と同じ立場であるとか、ましてや、劇の登場人物ではないと言っているわけではない。

第二節 ワキ見物人代表の継承と展開

一、「問う役」としてのワキ — 本田安次

ワキ見物人代表は、若干の誤解を伴いつつ、同時代以降の演劇人に刺激を与えた。以下では、批判も含めて、野上の説を起点に自説を展開した数人を取り上げ、併せて、ワキの役割に注目しつつ夢幻能を考察した論も紹介したい。

民俗芸能史学者の本田安次（一九〇六～二〇〇〇）は、豊富なフィールドワークを基盤として、ワキの役割を能の発生にさかのぼって論じた。昭和十三年（一九三八）以降『謡曲界』に執筆した論考を改訂修正した『ワキの発生』（『能及狂言考』所収。一九四三年、能楽書林）によると、本田の論点は次の三項目にまとめられる。

- ① 神懸りした人物に問う役が、能のワキの発生である。
- ② 同じ能であっても、一人称語りの舞台化作品と、三人称語りの舞台化作品とを区別すべきである。
- ③ セリフ劇と能は、そもそもの出発点が異なるため比較の対象にはなり得ない。

能を「語りもの」の舞台化と考える本田は、民俗芸能の「翁」と能の〈翁〉の構造を比較考察したうえで、神事の庭における神霊や靈魂の託宣を引き出す役がワキの発生だとして、巫女の神懸りを例に、次のように述べる。

この神懸りした巫女に向かつて、ものを問ふ役、これがワキであつたと思ふ。而してワキは、折角降臨した神霊に對しては、先づ自己を主張しようなどとはしない。たゞひたすらに、神霊より、語りを引き出さうとすることをのみつとめる。

戯曲の登場人物は、主役、相手役、端役等の區別はあつても、ともかくも夫々が個性を備へて、同じ舞臺、

同じ世界に言動するのであるが、一半の能にあつては、シテだけが言はば舞臺のもので、ワキはかゝる意味に於てシテとは別世界のもの、或は舞臺をとりまいて、語れよ舞へよと囃したてゝゝある聴衆の、選ばれた一人にすぎなかつた。(傍線部後述)

ワキを「語りを引き出さうとすることをのみつとめる」、「聴衆の、選ばれた一人にすぎない」と言う本田は、野上が指摘したシテ・ワキのありかたを基本的に認めている。しかし、それを舞台上の現象にとどめるのではなく、よつてきたる所を能以前の神事構造に求めたのである。この引用からもうかがえるが、本田が野上の説を強く念頭に置いていたことは、民俗芸能の「翁」に能の〈翁〉の古形をみる次の文言からも知られる。

信濃三河遠江の能の翁は、はじめから面をつけ、楽屋から見物を分けて神事の庭にあらはれ出る。…と、そこに居合せた彌宜の一人が…如何なる翁かとたづねる。…ここに翁は、問はれるまゝに長々と自らの謂れを語る。この翁がシテであり、彌宜がワキなのである。野上豊一郎博士が、ワキ座につくねんと座り、時々ものを問ふだけの役に過ぎないワキは見物人の代表と考へられると言はれたのは、鋭い観察ではあつたが、もう一步進んでその根本に觸れる必要があつた。(《能及狂言の様式》。本田前掲書所収)

本田独自の主張は①にほぼ尽くされており、②③は、野上が近代リアリズム劇の基準に能を当てはめること、および、現在物等を能劇の發展形とみなすことに対する批判である。傍線部のように、劇の定義について本田の見解は野上と大きくは変わらない。ただし、本田は現在物を「三人稱の語りを本とした」作品と考え、「この三人稱語りに於けるワキは、一人稱語りに於けるそれとは、全然性質を異にするものである。後者が發達して前者になつたのでは勿論ない」と、野上の「ワキの成長」説を否定し、さらに次のように科白劇との本質的違いに言

及する。

この三人稱語りの寫實的な能は、餘程科白劇に近づいてゐると言へよう。然し乍ら、これが純科白劇と異なる所は、どこまでもこれが語りものであると、登場人物は、その語りを運ばんがために出現してゐるに過ぎず、決して銘々の性格よりする自由の言動が、劇の構成に導かれてゐるものではなかつた點にある。

夢幻能であれ現在物であれ、能には成立以来の「語りもの」の痕跡が強く残されているというのが、本田の立場である。後代の論者が、見物人代表の初出たる《能の主演一人主義》のみを取り上げる傾向があるのに対して、野上と同時代を生きた本田は、ワキの成長説も含めた野上の論全体に正面から向き合っている。実際、両者の認識には共通面が少なくないのであつて、二人の分岐点は、野上が演劇論的に捉え、本田は發生論的に捉えるところにあつたといえよう。

二、夢幻能構造を支えるワキ —— 木下順二と田代慶一郎

演劇としての能の特色は、なんといっても「夢幻能」にあり、その成立や劇構造をテーマとする論述は後を絶たない。ここでは、ワキ見物人代表説を批判的しつつ夢幻能の劇性を述べた木下順二と、木下の論を踏まえて夢幻能論を展開した田代慶一郎を取り上げる。

近代日本を代表する劇作家で評論家の木下順二（一九一四～二〇〇六）は、能に関する言説も多く、演劇としての夢幻能に強い関心を寄せていた。木下が夢幻能を高く評価した理由は、「自然主義的・写実主義的なリアリティ」

に拮抗する「異相のリアリテイ」・「異質のリアリテイ」を、夢幻能が具現化していることにある。⁵⁾ 別の言い方をすると、日常的・現実的リアリテイからすればあり得ないような不思議な出来事をリアルに感じさせる劇構造を夢幻能が持つており、それこそが「演劇特有のリアリテイ」であるということになる。そのリアリテイを支えているのが、ほかならぬワキだというのが木下の主張である。《複式夢幻能をめぐる》⁶⁾（『日本文化のかくれ形』所収。岩波書店、一九八四年）の中で彼は見物人代表説を否定し、〈井筒〉を例にして、次のように言う。

紀有常の娘が、二百年前のことを現在形で語りながら、二百年という時間を一瞬に凝縮したような不思議な形でしかし本当に自分の情念を語っているわけでしょう。それは見所のわれわれにとっては、直接にリアルなことじゃない。…つまり、いま舞台で行われていること、それは見所にいるわれわれにはいかにも非現実的のだけれども、しかしその非現実を、非常に純粹に凝縮された一つの情念というものを大変リアルだと思つて見ているワキを、我々はまた見ているわけですね。そこで初めて我々にとってこのシテの演ることがリアルに映つてくるわけです。…このワキというものがいなくなつたらリアルに見えてはこないと思うのです。…だからワキというのはわれわれ観客の直接の代表者ではなくて、舞台の上にいる一人の見物人である。同時にわれわれと同じにシテを見物しているという点では共通しているが、しかしわれわれの単なる代表ではない。そこで、舞台の上の荒唐無稽と言えるものを本当にリアルだと思つて見ているワキの实在性が非常に確かだと我々に思われる時に、ワキがリアルだと感じていることは我々にもリアルに感じられると思うのですね。

傍線箇所にもるように、木下は、ワキを舞台と観客の媒介者として捉えていた。「ワキが見ている世界」をさらに観客が見ている入れ子式の二重構造を想定すればよいだろう。日常的非現実を、もうひとつ別の「現実」に

変えてしまう役割をワキが果たすのである。さらに木下は「本当のワキというのは実在性を保証する非常に重要な役なのです。能というものの実在性を保証する」と、繰り返しワキが夢幻能の実在性を支えることを強調する。野上の説を多少誤解している面があるが、「見物人の代表」という幅広い表現から受け取る内実が人それぞれで異なることを示す例であろう。それはそれとして、ワキの存在を夢幻能構造と密接に結びつけて演劇学的に解釈したところに木下説のポイントがある。おそらくは観能時の実感に由来するのだろう。

彼が夢幻能後場をワキの夢とは考えていないことも付け加えておきたい。すなわち、後場を僧が見た夢とするのが「普通の解釈」だとしながらも、「そうではなくて、この旅僧が後場で見たものがリアリティというものではないかというのがぼくの考えなのです」、「いつもは動かし難く見えていた前場の現実的リアリティがすべて自然主義的写真主義の、ただそういうものに見えてしまう。そういうリアリティを、複式夢幻能の後場というものは創り出しています」と定位する。

近代リアリズム劇と真剣に向き合った木下は、それとは位相の異なる「演劇的リアリティ」を夢幻能に見いだして高く評価した。時代は異なるが、夢幻能を近・現代劇全体系のなかにいかに評価し位置づけるかという問題を、ワキに注目して論じた意味で、木下は野上の継承者であるといえよう。

木下説を援用しつつワキの役割を夢幻能構造と関連づけたのが比較文学研究の田代慶一郎（一九三〇～二〇一四）である。著作『夢幻能』（朝日選書五〇〇。朝日新聞社、一九九四年）は、世阿弥の夢幻能を論じた一冊であるが、ここではワキに関する説を中心に述べることにする。

田代は、多くのワキが名乗る「諸国一見の僧」に着目する。諸国一見の僧という設定は「夢幻能の構造を支える劇的装置の一つとして、世阿弥が新たに考案した優れた芸術的な工夫」であり、『諸国一見の僧』に始まり『諸国一見の僧』に終わる夢幻能の「ストーリー」を要約すれば、諸国一見の僧が旅の途中で不思議な体験をする物語

であるまとめる。その上で、野上の見物人代表説に言及し、「野上はワキを『見物人の代表者』としたことによって、いわばワキを舞台から見所に引きずり下ろした訳だが、こうすることで夢幻能の世界が途端に崩壊してしまうことに気づいていなかった」と批判し、木下説を紹介した後に次のように述べる。

夢幻能ではまずワキが現れる。ついでシテが現れるが、彼はワキの前に現れたのであって観客の前に現れた訳ではない。∴シテは謡をうたい、仕草をするけれども、それはすべてワキに向かつてなされるものである。シテとワキとの間に交渉が始まってからも、シテはもっぱらワキに向かつて語りかけ、訴えかけることに変わりない。ワキのほうでも、いま眼前に起こっている出来事を、もちろん現実の体験として、何の疑念も差し挟むことなく見ているので、シテ・ワキ二人の間には極めて濃密な交流関係が成立し進行しているが、それは余人の与り知らぬまったく二人だけの排他的な関係である。∴見所にあるわれわれ観客は∴本来なら第三者的立場にあるはずである。だが、ワキに媒体機能が賦与されているという夢幻能の約束事によって、観客たるわれわれもワキと同様に、彼の見るところを見、彼の聞くところを聞き、彼の体験に参加することができるのだ。

ここで田代は、シテの相手役としてのワキを重視し、「極めて濃密な交流関係」、「余人の与り知らぬまったく二人だけの排他的な関係」が舞台上に展開すると強調する。野上はワキを「登場人物ではない」と言ったわけではないが、その口吻はワキの役割を軽視しているかに感じられてもおかしくない。それに対して、れっきとした劇の登場人物としてワキの役割を捉えようとしたのが田代である。彼の夢幻能解釈を単純化していえば、ワキはシテの霊力が支配する時空に誘われて『夢幻体験』をする」ということであり、両者の間に交わされる会話を丁寧に分析しながら劇的展開をたどっていくところ、その途上で幽霊や化身や、「語り手」としての後シテ、典

扱との関係などについて縦横に考察を加えていくところが、本書全体の特色となっている。

もう一カ所、〈忠度〉を考察する過程で、田代が野上説を批判しているところがある。

「能は主役一人の演戲を見せることを建て前にしたものである」という、この基本主張から「ワキは見物人の代表者」という見解も生まれ、四人の人物が登場する『景清』も「すべて演戲の主要なる部分^{かけきよ}はシテ一人に依つて演ぜられるが故に『景清』も結局役者一人主義の原則の下に属すべきもの」という牽強^{けんきょう}付会^{ふかい}も出てくる。能には「対立」がないから「結局能は戯曲ではない」という「断定」までがそこからは導き出されている。野上の主張が能の本質の一面を突いているのは事実だが、この原則ですべてを押し切ろうとするところから出てくる無理も多い。

続けて「さしずめ『忠度』はこの原則では割り切ることのできない曲である」と述べるように、かつて俊成の身内であり、読み人知らずとされた自分の歌に作者名を記載してほしいとシテに依頼されるワキは、いわゆる諸国一見の僧の範疇を越えている。既に見たように野上の真意はワキの「舞台上」の動きの少なさにあった。そうであっても、すべての能に原則を当てはめようとする野上理論に「無理も多い」のは事実で、現在の研究では、原則論をたてるよりも、個々の作品ごとの分析が主流になっている。

田代はおそらく〈能は戯曲ではない〉という言説にも反対なのだろう。田代の著書『謡曲を読む』（朝日選書三三三、朝日新聞社、一九八七年）は、謡曲を「一個の言語芸術作品として」、「西洋の古典劇同様、文学作品として読まれる可能性」を探って執筆された。この中で田代は『能楽全書』第三巻巻頭「謡曲の構成」の野上の言説「謡曲を正しく読むには能の脚本として読むべきである。言ひ換へれば、能が舞台の上で演出される場合を実感しながら、その台帳として読むべきである」を引いて、「この暗黙の諒解は、裏を返せば、そのまま謡曲の文学性を

否定する議論につながって行く」と注意を促し、「謡曲を、舞台芸能としての能からも、音曲としての謡からも切り離して、独立した文学作品として読む」ことを提案する（『文学としての謡曲』）。

シテとワキの個人的交流を重視し、二人の会話を詳細にたどっていく『夢幻能』の叙述方法は、能の台本を戯曲として読んでいく姿勢のあらわれだろう。比較文学研究者として、フランス文学・演劇に詳しくた田代も、野上と同様「西欧的な視点」を持って能を探索した一人である。ギリシア劇やシェイクスピア劇の如く、能の台本を劇文学（戯曲）として積極的に読み込んでいったのだ。

付け加えると、『夢幻能』の別の箇所でも田代は、「夢幻能のメカニズムの中でワキの果たす機能はまさに『語り部』のそれなのだ」と、シテの物語を聞き、それを人々に伝え、語り継いでいく役割としてワキが設定されているとも言っている。次に紹介する「語り手」としてのワキに通じる見解である。

三、「語り手」としてのワキー徳江元正・土屋恵一郎

以下では、直接野上理論に言及しているわけではないが、ワキの位置から夢幻能成立の道筋を探る研究の代表として徳江元正の『複式夢幻能の成立』（『室町藝能史論攷』三三弥井書店刊、一九八四年）所収の見解と、土屋恵一郎の『能—現代の芸術のために』（新曜社、一九八九年）の一節「夢　メタ・ドラマ論」を紹介したい。ともに、「語り手」としてのワキに注目した論である。

中世芸能・中世文学研究者の徳江元正（一九三二～）は説話学の立場から夢幻能の成立を説いた。能の外側に成立を探る視点は、本田安次とも共通性がある。「複式夢幻能」というかたちは、個人の思いつきや演劇論の中から浮上してきたものではない」との立場から、徳江は「諸国一見の僧」に着目する。

我々が見馴れ聞き馴れてしまっているワキ僧の中の「諸国一見の僧」という登場人物は、…決して舞台の上で創りあげられた類型なのではない。例えば『平家物語』の世界に登場する齊藤五・齊藤六の兄弟、長尾新五・新六の兄弟、あるいは真字本『曾我物語』以下の鬼王・団三郎（道三郎・丹三郎）のごとき、説話の語り手たちとも称すべき、まことに現実的な存在だったのである。そのような廻国聖輩の仕事は無視しては、複式夢幻能の成立は論じられないであろう。

このように述べた上で、夢幻能以前に主として口承レベルで語り伝えられていたとおぼしき「夢幻説話」を紹介して夢幻能との類縁性を検証しつつ、その「語り手」にワキ僧の原型を想定したのが《複式夢幻能の成立》の骨子である。

「夢幻説話」としてあげる事例は、加賀の篠原で遊行上人が齊藤別当実盛の亡霊に出会ったという巷説（『満濟准后日記』応永二十一年五月二十一日の条）、書写以前の〈曾我の物語〉を彷彿させるといふ「曾我兄弟ノ亡霊ノ幻化ノ事」（『地藏菩薩靈驗記』所収）、「結城入道墮地獄譚」（『太平記』巻二十）、『大和物語』百四十七段の「生田川説話」などである。これらに共通する構想は、遊行上人、善光寺参詣の聖、下総に向かう律僧、ある旅人などが、旅の途中で亡者に出会い、死後の苦しみを目の当たりにするというもので、後に弔いをなしたり、体験を語るなどの後日譚が付加されていることもある。徳江は、「生田川伝説」の『ある旅人』とは、私は能のワキ僧の「原型」であると思う」とし、「廻国聖や念仏聖の語りはまとまったかたちで遺されてはいないが、必ずや、夢幻能の形成に影響を与え刺戟し続けてきたに違いない」と結んでいる。成立論ではあるが、夢幻能の構造やワキの役割を説き明かす一面を有するといえよう。

法学者で能や演劇に関する著述も多い土屋恵一郎（一九四六～）は、夢幻能の構造を「物語について語る装置」

と位置づけた。そして、夢幻能の発生を勸進聖たちによる勸進興行に求めた松岡心平の説（夢幻能の発生―勸進能のトボス―一九八八年初出。『宴の身体』（岩波書店、一九九一年）所収）を踏まえて、「語る」ことの複合的意味を述べる。

地獄の情景を前にして、恐怖と哀惜の思いにかられて供養をすることで、自分と先祖の罪業を浄化する、という発想は、「夢」語りが、そこに登場するシテにとっても僧自身にとっても、演じて語ること自体が救済であり、罪の浄化であったこととつながっている。∴それは実は観客自身の浄化であり、それを見ている観客自身が僧の夢語りの世界で自分の煩惱を赤裸々に見ていることになる。

以下、「夢」を契機とすることによって、「語られてきた物語の主人公がみずから語り手となって登場する複雑なドラマの様式が可能となったのである」と、メタ・ドラマとしての能に説き及んでいく。

野上の「シテ中心主義」と「ワキ見物人代表」は、シテ・ワキ・観客の関係を検証して、能の劇構造を解明しようと企てた。そのような見方に立てば、表面上は野上理論とさほど関係がなさそうな土屋の解釈は、僧の語りと、主人公の語りと、観客とを結びつけた論として、野上との共通性が浮かび上がってくる。

四、再び、能とはいかなる劇か

ワキ見物人代表の継承と展開をあらあら辿って見えてきたことをまとめておこう。

まず第一に、これが専ら夢幻能のワキに関する説として享受されてきたことである。能の最大の特徴とされる夢幻能の解明にあたって、多くの論者がワキに注目してきたわけだが、その出発点に野上が位置することがわか

る。一方、夢幻能と現在物を繋ぐ論である「ワキの成長」の方は、ほとんど受け継がれることはなかった。

第二に、ここで取り上げた論者の多くが、いわゆる能プロパーの研究者からやや外れる場所に位置することである。これは偶然ではなく、能研究における「演劇論的研究」の立ち後れを意味するものにほかならない。劇や戯曲に関する共通認識がある程度存在した野上時代とは異なり、現代は「劇」そのものの概念が大きく広がり揺れ動いている。既存の基本軸をたてて能を解釈する方法は、もはや有効ではあるまい。ましてや〈能は劇か否か〉という立論は不毛である。さらに、西欧演劇にとどまらず広く世界の演劇の中に能を開いていく必要がある。その意味でも、「能をもう一度新しい目で見直し、新しい頭で考え直さねばならぬ」という野上の提言は、現代に生き続けている。

本稿を終わるにあたって、ワキ方宝生流の殿田謙吉（一九五九）のインタビュをまとめた記事を抄録しておきたい。二〇〇六年五月十五日に能楽学会東京例会の主催により「ワキ方から見た能・夢幻能のワキ」と題する講座が開催された。ワキに焦点を当て、演劇論的・演技論的側面から考察しようという企画で、前半はわたしが夢幻能のワキに関する先行研究を紹介・検討し、後半はインタビュ形式で殿田氏からお話を伺った。その概要をまとめて、能楽学会の機関誌『能と狂言5』（二〇〇七年五月）に発表したものである。

殿田氏によれば、ワキ・ワキ座は「タイムトンネル」の如きものである。ワキ（座）の位置をかんがえてみると、前方に中世の時空（本舞台・橋掛り）が広がり、後方には現代（観客席）が控えている。従ってワキは、完全に舞台上の人物になりきってしまったてはいけない。体の前面はシテや舞台と向き合いつつ、背中も観客と繋がっていることを、空気として感じている必要があるという。

…ワキ座に無言ですわっている印象が強いかもしれないが、実は夢幻能のワキは思いのほかやる人が多い。

シテ登場までは、観客が物語の中に自然にはいつていけるよう最善の努力をする。個々の曲趣、たとえば情景・季節・明暗などを登場から着ゼリフの間で表現する。シテ登場後はシテの出方をキャッチし、シテの言葉を観客がわかるように心掛けてセリフを言う。ワキで最も大切なのは、アンテナを張りめぐらし、曲の進行を考えながら対応していくことである。シテの出方や状況に応じて、その場で瞬時に変えられるのがワキの力量である。

木下順二の言説に最も共感を覚えるという殿田氏の話は、まさに夢幻能の構造をワキが身体化していることを思わせる。また、引用の後半部分は、シテと観客の橋渡しをするワキの役割を体現した演技論とみなせよう。過去の時間と現在の時間、幻影と現実という二つの空間・時空の結節点にワキが位置することは、夢幻能の劇構造をいかに捉えるかの問題に直結しているのだ。

注

- (1) 『Die Technik des Dramas』。日本訳では『ドラマの技巧』・『戯曲法』とも。翻訳に、一九三八年・菅原太郎訳『フライターク戯曲論』（春陽堂）、一九四九年・島村民蔵訳『戯曲の技巧』上下（岩波文庫）がある。翻訳が出版されたのは、野上の論の発表後である。この著作を直接知っていたという意味ではない。
- (2) フェルディナン・ブリュンチエール（一八四九〜一九〇六）。フランスの批評家。劇的行為の基礎として葛藤の法則の意味を明らかにし、現代劇理論に大きな貢献を果たした。著作に『劇の法則』など。
- (3) ウィリアム・アーチャー（一八五六〜一九二四）。イギリスの演劇評論家・劇作家。著作に『劇作法―技

巧の手引き』など。

(4) 明治初年にヨーロッパの drama の訳語として「戯曲」の文字が当てられ、明治末年以降演劇の台本内容を活字にした劇作品を広く戯曲と呼び習わすようになった。野上はどちらかという文字に書かれた劇作品を主体にしているようであるが、野上の言う「戯曲」と佐成の言う「劇」は、ほぼ同じ意味に解してよからう。

(5) 「現代演劇に与えた能の影響―創始者の立場から」。法政大学第四回国際シンポジウム記録『世界の中の能』所収（一九八二年、法政大学出版局）。

(6) 一九八一年六月、国際基督教大学アジア文化研究所が開催した連続講演会「日本文化のアーキタイプを考える」において「複式夢幻能をめぐって」と題して行った講演を取めたもの。『ドラマとの対話』（一九八六年、講談社）、『劇的』とは』（岩波新書四〇二、一九九五年）でも夢幻能に言及する。

〔付記〕野上豊一郎の論考の引用は、『野上豊一郎批評集成 能とは何か』（上入門篇・下専門篇）二〇〇九年、書肆心水の本文に拠った。

【論文】

野上豊一郎の能面研究

宮本 圭造

一

平成二十五年、野上豊一郎・弥生子夫妻のご遺族から野上夫妻の遺品の追加寄贈を受けた。これまでに能楽研究所が寄贈を受けた野上夫妻の遺品は、野上豊一郎の書籍や直筆原稿、ノートの類が大部分を占めていたが、今回ご寄贈いただいたものの中には、野上弥生子が尾上始太郎から贈られた小鼓胴など、能道具類もいくつか含まれていた。その中でとりわけ筆者の目を引いたのが、小喝食・孫次郎の能面二面である。

能面研究に大きな功績を残した野上豊一郎は、能面の収集家としても著名であった。もともと、それらは野上自身が積極的に収集したというよりは、骨董屋が持ち込んだのを、折に触れて買い置いたというに過ぎないようである。野上所蔵の能面の中で、おそらくもともと知名度が高いのは、著書『能面論考』の「能面以前の能面」で野上が紹介している鎌倉某寺旧蔵の六面であろう。野上によれば、大正十二年の震災から間もない頃、外国人の手に渡るはずであったのを、野上が譲り受けたものという。六面の内訳は、尉面が三面、若い男面が二面、女面が一面。それは「今日普通に使用言葉での能面のカテゴリーには辛うじて入り得る程度の古風なもの」で、野上はこれを「能面完成以前の能面」と位置づけている。『能面論考』に掲載されている尉面の写真を見ると、そうした評価が頷ける、いかにも古風な造型であり、能面史の貴重な資料であることが確認できるが、残念ながら、これらの面の所在は現在不明であり、『能面論考』に掲載された尉面の写真だけが、その面影を伝える唯一の資

料となっている。一昨年寄贈されたものの中にも、これらの能面は含まれていなかった。

従って、野上の遺品として現在知られる能面は、先に紹介した小喝食と孫次郎の二三面のみということになる。この二面のうち、孫次郎は面袋に「河内作」と刺繍があつて、江戸初期の面打・井関河内の作とされているが、河内の焼印も署名もなく、作柄も河内の作とは到底思えない江戸中後期頃の平凡な作である。一方、小喝食の方は表情に品があり、毛書きも繊細であつて、巧みなツヤ出しを施した彩色にも落ち着いた味わいがあり、なかなかの上作といつてよい作品である。面裏に「小喝食」の朱漆書きとともに、「友水作」と墨書の貼紙がある。出目友水の作とは即断できないものの、江戸中期頃の作と見てよからう。その伝来については、残念ながら、何の書き付けも残されていないが、重要な手掛かりを与えてくれると思われるのが、『能面論考』に収められている野上の文章「能面山分の話」である。

「能面山分の話」は、とある骨董屋が持ち込んだ三十面ほどの能面を仲間内で山分けした折のエピソードを記したものである。能面購入の話は野上に持ちかけたのは、作家、芥川龍之介であつた。芥川は懇意の骨董屋から能面を見てくれるよう依頼を受けたが、自分ではよく分からないので、能に造詣の深い野上に声をかけたのである。数日後、芥川からの紹介を受けた骨董屋が面箆筒三つ、小箱二つ、中箱一つを携えてやってきた。面箆筒の方には小尉・三光尉・石王尉など二十三面、小箱には翁と猿飛出、中箱には猩々面四面、総計二十九面の能面が入つており、骨董屋の番頭によると、これらは「旧大名の出物」だという。「大名物としてはまづ中位」のもので、「作銘の確かな分」としては、出目は閑作の姥、洞水作の十寸髪、友閑作の曲見、友水作の小喝食、壽満作の猿飛出、児玉長右衛門作の怪士・山姥があつたと記されている。骨董屋はこれらの面を売り払いたいということだったので、野上の提案で同好の人たちを集まってもらい、それぞれどの面が欲しいか希望を募り、希望が重複した場合には籤引きをして、残つたものは骨董屋に返す段取りになつた。二十九面のうち、野上も目をつけていたのが二、二あつた。ただし、一人先取りするのはよくないだらうからと、同じく籤引きに参加したが、そのうち一面は人



小喝食面裏



小喝食面



孫次郎面裏



孫次郎面

に取られたものの、もう一面は幸い他に希望者もいなかったたので易々と手に入ったという。「能面山分の話」は、野上の手に入れた面が、友水の作であったと記している。面の種類については記載がないが、二十九面のうち、作者が明らかな面として友水作の小喝食が挙げているから、右に「友水の作」とあるのは、小喝食を指していると思しい。すなわち、現在野上文庫に伝わる「友水作」と貼紙のある小喝食は、この時、野上が入手したものである可能性が高いことになる。なお、「能面山分の話」によれば、二十九面のうち芥川が興味を示したのは、若い女面でも般若面でもなく、「彩色がひどく黄いろく、死相を呈してゐる」瘦女の面であったという。結局芥川は山分けの仲間に入らなかったが、後日、残った面を引き取りに來た骨董屋が、購入の仲介をした芥川に御礼をしたいというので、野上は残された面のうち、瘦女を差し上げたらどうかと提案した、と「能面山分の話」は記している。

「能面山分の話」が発表されたのは昭和六年。その中で、野上は右のエピソードを「もう二十年も昔のことである」として紹介している。従って、芥川から能面購入の話を持ちかけられたのは、およそ大正初年頃の事と推測されよう。野上が能面に関する論考を発表するのは、大正十年の「仮面と顔面―能楽についての一考察―」（『中央公論』三六一―四）が最初であるが、それよりもかなり以前から能面に大きな関心を抱いていたことを、右のエピソードは物語語っている。後年、野上豊一郎の妻、弥生子も次のように回想している（『野上弥生子全集』別巻二「思い出さままごま」。深澤希望氏御示教）。

能面だつて私のところには五つか六つありますが、それを世話したのも芥川さんなの。（中略）芥川氏は趣味家で、変なペルシャのガラスの小さいのを集めたりして、芝愛右下の村岡とかつていう大きな骨董屋と懇意にしていたのね。そこに能面が約三十面、旧大名の出物らしいのがあり、芥川氏を通じて野上にそれを見に来てくれないかということ、家に持ち込まれてきたの。その能面を座敷の床の間と違棚にいっぱい並べて、寸法とつたり、眺めたりして長い間預かっていました。それで、よさそうなものを家でも買ったし、同好の

人たちにも譲り、大半を処分して、あとは返した。それから病みつきで……。

芥川の仲介によつて骨董屋から能面を預かったのを契機として、野上は能面に対する関心を深めていく。大正十年以後、野上は能面に関する論考を矢継ぎ早に発表し、翌大正十一年の「能面創作の心理」（『能楽画報』一六一―三）では、早くも、能面の造型の特質が「喜悦にも悲哀にも、快活にも憂鬱にも、いづれにも変わり得る中間的の表現」にあるとする、後の中間表情説に繋がる説を発表する。その後、野上はさらに、能面の造型的考察、面打の作品研究、能面の演出効果の解明など、ありとあらゆる観点から縦横に能面を論じ、能面研究に新風を吹き込んでいった。野上以前の能楽研究者で、能面に関してこれほど精力的に発言した人物はほとんどいなかった。能面研究の分野でも、野上はパイオニアとして重要な役割を果たしているのである。

二

野上は昭和二年、「伎楽面・舞楽面及び能面」と題する論考を雑誌『思想』七十三号に発表する。後に『能研究と発見』にも転載されたこの論文は、伎楽面・舞楽面・能面それぞれの造型の特質を論じたもので、野上が能面を日本の仮面史の中にどう位置づけていたかが、そこからよく窺える。すなわち、伎楽面が感情の発動の最も大きい瞬間を捉えて、これを写實的に表現したものであるのに対し、能面は舞楽面において既に見られた表現の図案化・象徴化をさらに押し進め、「特定の瞬間に於ける感情表現」ではなく、「いづれの瞬間にも適用の出来る」「中間的表現」を表わしたものであって、それによつて能の演技の中で無限の表現力を発揮することが出来る、と評価するのである。

さらに、こうした能面の特長は、世界の仮面史においても類を見ないものであると、野上は主張する。すなわち、

『能面論考』所収「能面の世界性」では、能面の使用法がギリシア古典劇ときわめて似通っているものの、その仮面の工作においては、ギリシア古典劇の仮面と能面との間に大きな隔たりがある、と述べる。ギリシア古典劇の仮面は階段状の大型劇場いっばいに声を響かせるために、仮面の口腔部を拡声器の如く異様に大きくし、また、遠くからでも表情が見分けられるように、「ただ一つの表情」を誇張して表現したものであるのに対し、能面は中間表情を用いることで、「幾つもの表情」を現わすことが可能となり、それによって能面が世界に卓越した仮面たりえている、と論じているのである。要するに、「能面の工作には、ギリシア面よりもローマ面よりも、また、われわれの伎楽面よりも舞楽面よりも、遙かに卓越した叡智が包含されてゐる」というのが、上記の二論文に通じる一貫した主張なのであった。上記の論の中核となつてゐる能面中間表情説については、その後批判も出されるが、能面を古今東西の仮面と比較して、最もすぐれた芸術彫刻であると明確に位置づけた点に、とりわけ大きな意義を見出すことが出来よう。能面の芸術的達成と仮面史上の存在意義を、これほど鮮やかに説いた論は、この先にも後にもないからである。

このように主張した野上であればこそ、能面に関する最初の本格的な研究が、日本人ではなく、ドイツ人の美術史家、フリードリッヒ・ペルツィンスキーによつてなされたということも、大いに勇気づけられる出来事であつたに違いない。すなわちこのことは、能面の芸術性が世界的にも高い評価が与えられうるものである、という事実を物語つてゐるからである。中村保雄によれば、本書の存在が契機となつて、野上は能面研究に発奮するようになったという(吉田次郎訳『日本の仮面』訳者あとがき)。しかしながら、ペルツィンスキーが二分冊から成る大著『日本の仮面』(Japanische Masken)を刊行したのは、一九二五年すなわち大正十四年のことである。一方、野上はすでに大正初年頃から能面に関心を持ち始め、大正十一年にはすでに中間表情論の元となる論考を発表している。従つて、ペルツィンスキーの著書が、野上の能面研究の直接のきっかけとなつたわけではないことにならう。欧米における能楽研究の動向に関心を持ち、ドイツ語にも通じていた野上が、ペルツィンスキーの著書の存在を早

くから認識していた可能性はかなり高いといえるが、仮にペルツィンスキーの著書に出会わなかったとしても、野上の能面に対する関心に大きな変化はなかったのではないかと思われる。

野上の能面研究が、古面の本格的な調査という形で、大きく進展を見るのは、昭和に入ってからのことである。まずそれは、観世家の本面の調査から始まった。十四世観世左近の絶大な協力のもとに実現したことで、観世家の本面に学術的な調査が入ったのは、これが初めてのことという。野上弥生子も後年、「ほんとうの素人で、いままでも全然関係のなかった者が、(観世家の)能面をいじくり回して調べたっていうのは、恐らく初めてじゃないですか」(思い出ささま)。「括弧内は筆者注」と回想している。野上文庫に所蔵される観世元章編『諸家面目録』の写しには、「昭和九年三月、観世左近氏ヨリ借受ケ書写ス。能面国宝指定調査ノ一資料トシテナリ」と奥書があり、野上が観世家に入りして能面の調査を行ったおおよその時期と、及びその目的が「国宝指定調査」のためであったことが明らかになる。

野上はこれ以後、宝生家の本面、金剛家の本面などの調査も行い、その成果は昭和十一年から十二年にかけて岩波書店から刊行されたコロタイプ版の能面図録集『能面』として結実することになる。この『能面』は、予約頒布という形で十ヶ月間にわたって出版され、海外への普及を意図して、英語版の解説も作られた。観世家の本面のほか、宝生家の本面、三井家蔵の旧金剛家本面が全体のおよそ九割を占めており、その他、諦楽舎・細川家蔵の旧金春家本面、また、当時一流を成していた梅若家の本面など、収録の能面は全部で九十面に及んだ。これ以前にも、『能楽万代鑑』や『舞影一斑』『能楽古面集』『能面大鑑』などが、観世家・金剛家・大西亮太郎家などの能楽諸家所蔵面を写真で紹介したことはあったが、編集方針が明確でないため、面の配列がまちまちであったり、能楽諸家所蔵面とともに財閥や旧華族の所蔵面を多数収めて玉石混交だったり、それぞれに大きな問題があった。それに対し、『能面』はその基本方針として、能面の中の能面ともいうべき代表的逸品を厳選し、当時の学術的水準に見合った詳細な解説を付して紹介した点においてまず画期的であり、能面研究史にとってきわ

三

昭和十三年から十四年にかけて、野上は海外交換教授として欧米諸国へ派遣された。その機会を利用して、野上は欧米の博物館が所蔵する能面の調査をも行っている。この間の成果をまとめたのが、雑誌『観世』の昭和十六年六月号から翌昭和十七年一月号にかけて五回にわたって連載された「西洋の能面」である。後に『能面論考』にも収められたこの論文は、ロンドンのビクトリア・アルバート・ミュージアム、オスカール・ラファエル氏、ベルリンのノイエス・ムゼウム（新博物館）、ムゼウム・フュア・フォアウントフリューゲシヒテ・ウンター・オストアジアティッシェ・クンストザンムルンク（先史古代・東アジア美術博物館）、ミュンヘンのフェルカーケンデ・ムゼウム（民族学博物館）、アムステルダムライクス・ミュージアム（国立博物館）、ライデンのエスノグラフィカル・ミュージアム（民族学博物館）、ニューヨークのメトロポリタン・ミュージアム、ボストンのミュージアム・オブ・ファインアーツ等に、実に数多くの能面・狂言面が所蔵されていることを報告したものである。その中で野上は、オランダに所蔵されている面については、比較的粒の揃ったものとして、それなりの評価をしているものの、その他の多くは凡作として、きわめて低い評価を与えている。ベルリンの先史古代・東アジア美術館に所蔵される二百数十面の能面にいたっては、「その全部が悉くつまらない作品」であり、「その粗悪さ加減は、もしその内の一番よいのを記念にくれるといはれても、私はもちろん固辞して受けなかつたであらう」とまで、酷評しているほどである。そこに添えられた、「こんなものを能面研究の資料にされてはたまらないと思つた」という野上の感想は、ベルリン東アジア美術館が所蔵する能面を主要な資料として用いたペルツィンスキーの著書『日本の仮面』の存在を意識してのことではなかつたかと思われるが、これら在外所蔵面に対する野上の低い評価は、海外所蔵の能面調査を行った誰もが共感しうるものであらう。そのコレクションの中に、稀に逸品を見出すことはあつても、コレクション全体の水準は総じてあまり高くないからである。ましてや、これに先立って観世家や金剛家

のすぐれた本面の数々を調査した野上にとつて、在外所蔵面は随分貧弱なものに映ったことであろう。

つまるところ、野上にとつて最も重要な面は、観世家をはじめとする各大夫家に伝わって来た本面であった。野上は言う、「正直に白状すると、私は観世・宝生・金剛諸家の重代の本面を手にとつて見せてもらふまでは能面はわからなかつたやうな気がする」（「忘れられぬ傑作能面」と）。それに対して、大名面や地方の寺社に伝わる能面に対する野上の評価はおしなべて低い。すなわち、「旧大名物に至つては、多少の例外はあつても、品質が押しなべてガタ落ちで、多くは江戸時代に入つてのウツシであり、ウツシのウツシなどもあつて、鎌倉・室町期の古作を見た目にはなさげなくような物ばかりである」（「同」と述べ、また地方の寺社所蔵面についても、「稀に山間の古い神社などに当時の凡作の保存されてゐるものを見る」と、凡作としての評価を与え、これらは僅かに「能面製作史研究の資料としては貴重なもの」と位置づけるにとどまつている。「中間表情」説を提唱し、そこに能面の芸術性の真骨頂があると主張した野上にとつて、「今日地方の古い神社や寺院に保存されてある鎌倉時代または吉野時代の作品」は、「まだ中間表情なるものが十分に明確に考へ出されないで、単純な写真主義で作られてゐた頃の仮面」（「能面の世界性」として、存在価値の低いものにならざるを得なかつたのである。もつとも、野上は昭和十六年から十七年にかけて、近世大名面と地方寺社所蔵面のすぐれた作品群と出会うことになる。すなわち、昭和十六年十月、奈良吉野で調査した天川弁財天社・勝手神社所蔵の能面、及び、昭和十七年八月、米沢で調査した上杉家伝来の百四面の能面がそれである。前者は観世十郎元雅寄進の尉面を伝えることで有名なものであり、野上はその調査成果を「吉野の能面」と題して、雑誌『観世』昭和十七年二月・三月号に発表している。また、上杉家伝来の能面については、特に論考がまとめられることはなかつたが、そのうち、「一トウ」と刻銘のある神体面については、「忘れられぬ傑作能面」の中でも取り上げるなど、高く評価していたことが知られる。その折の詳細な調査ノートが残されており、近年、西野春雄「上杉家の能面―野上ノートの紹介を中心に―」（『能楽研究』二十五号）がその概要を紹介している。これらの面を調査した経験は、大名面や地方寺社面に対する野上の認識

を改める契機になったと思われるが、野上がこれ以後、大名面や地方寺社面の調査に積極的に取り組んだ形跡は見られない。その点は、野上の能面研究が積み残した大きな課題であるといえよう。実際、野上以後の能面研究は、野上がさほど注意を払うことのなかった地方の寺社面の発掘に、もっぱら関心が注がれるようになる。戦後の能面研究を牽引した中村保雄・後藤淑の二人はともに、全国の寺社面を調査する中で、能面成立以前の古面を次々に紹介し、それらの古面から、能面の様式が成立する過程を明らかにした。また、大名面についても、田邊三郎助が近世大名面の網羅的調査を通じて、その中に含まれる室町〜江戸初期の作例に新たな光を当て、中世から近世にいたる能面の変遷史を描き出している。いずれも、野上の能面研究がとりこぼしていた作品に着目することで、新境地を切り開いてきた研究であるといえよう。

なお、昭和十七年の野上は、狂言面の調査も集中的に行っている。それは、先に言及した上杉家伝来面の調査ノートから明らかになることで、同年十一月十八日に大阪の茂山弥五郎家、翌十九日に茂山忠三郎家と茂山千五郎家を訪れた際の調査メモが、右のノートに書き留められている。昭和十九年刊の『能楽全書』第五巻に所収の「狂言の仮面」執筆に向けた資料集めらしく、同年に刊行した『能面論考』の中にも、「狂言面―その表現意図と用途」と題する論考を載せるなど、この時期、精力的に狂言面の研究に取り組んでいた様子が窺える。

能面にしても、狂言面にしても、その研究は具体的な作例に則して行われるべきである。そして、野上は観世家・宝生家・金剛家の本面をはじめ、国外の所蔵面、狂言面も含めて、ほぼ網羅的に調査した最初の人物であった。その意味において、野上を能面研究のパイオニアと位置づけることは間違いでないだろう。野上の能面研究が、その後の研究に与えた影響もすこぶる大きい。その具体例として、梅若家に所蔵される山姥面の例を挙げておきたい。梅若家の山姥面は、他家の山姥面とは大きく異なる魁偉な表情を持つ面として知られているが、この面を山姥面と命名したのは、実は野上その人であった。野上文庫には「能面集」とタイトルが付された七冊のアルバムがあり、翁・女・男・尉などの種別に、諸家の能面の写真が収載されているが、そのうち「能面集」第六冊に、

梅若家の山姥面の写真が収められている。そこには「山姥（モト真蛇ト呼ビタリシヲ余ノ忠告ニヨリテ改称）」と野上の筆による書き込みがあり、山姥の名称が野上の忠告に基づきものであることが知られるのである。この面が、「白頭」の小書付きの「山姥」で用いられることを重視しての命名らしい。観世元章の『諸家面目録』には、梅若家所持の面として「真蛇 赤鶴作」とともに「山姥 夜叉作」があつて、この二つがある時期に混同し、もともと山姥であつたのが、後に真蛇と誤つて称されるようになった可能性も十分に考えられるが、この面は山姥としても真蛇としても変わり型に属するものである。現在の図録類でも、この面は山姥面として紹介されるのが常であるが、これを山姥面と称するようになったのは比較的最近のこととで、野上の見解によるものであることを念頭に置いておく必要があるだろう。

最後に野上文庫の中から、能面に関する資料をいくつか紹介しておく。先に紹介した小喝食面・孫次郎面、上杉家の能面ノートの他に、野上文庫には能・狂言面の写真、天保七年（一八三六）付の『御能面目録』、喜多古能の版本『仮面譜』、野上が能面研究のために書き写し



菩薩行道面



狂言面ふくれ

た『諸家面目録』『大野出自家伝書』なども伝わっている（本書所収の深澤希望「野上文庫蔵目録」参照）。このうち、能・狂言面の写真は、その大部分が『能面』や『能楽全書』のために撮影されたものであるが、中には、ロンドンの Raphael 氏蔵の菩薩行道面と狂言面「ふくれ」の写真のように、これまで画像が紹介されていなかったものも含まれる。これは野上の「西洋の能面」に言及されているもので、とりわけ菩薩の行道面は、慶派の流れを汲む仏師の手になると思しき、なかなかの優品といえよう。

また、天保七年付の『御能面目録』は、帯封に「稲葉家御能面目録」とあるように、大名の稲葉家が所蔵した能面の目録である。稲葉家には淀藩の稲葉家、館山藩の稲葉家、白杵藩の稲葉家があるが、『御能面目録』の稲葉家は、野上夫妻の故郷、白杵の稲葉家であることが、昭和十四年十月の売立目録『旧大名御蔵品入札』から明らかになる（同目録の存在は門脇幸恵氏の御教示によって知った。この目録のタイトルでは「旧大名」として名前は伏されているが、表紙に稲葉家の家紋があらわされており、目録中にも初代藩主稲葉貞通所用の武具が収められていることから、白杵稲葉家の御蔵品の入札目録であるのは間違いない。その目録の四十九番に「能面 二十四面 黒塗箆筒入」、及び五十番に「狂言面 十一面 白木箆筒入」が挙っており、その写真から確認できる面の種類と、先の『御能面目録』の面の名称とが、ほぼ完全に一致するのである。『旧大名御蔵品入札』には、目録の四十八番にも「能面 二十四面 黒主箆筒入」として、さらに二十四面の能面が挙がっているが、これについての記載は『御能面目録』にはない。おそらく江戸か国元に別置されていた分なのである。ともあれ、野上が稲葉家の能面目録を所有していたことは、野上夫婦が白杵の出身であった点からも大いに興味深く、野上家にこの目録が入った経緯を知りたいところであるが、その手がかりとなるものは探し出せなかった。あるいは、冒頭で紹介した芥川から託された「旧大名の出物」の能面が白杵稲葉家の旧蔵面であり、小喝食面と同時にこの目録が野上家のもとに入ったのではないかとも考えたが、「旧大名の出物」の二十九面のリストと、売立目録の写真とを照合するに、面の種類が全く一致せず、小喝食面と稲葉家の『御能面目録』とは、全く別のルートで野上家の

所有に帰したと考えざるをえないようである。何より白杵稲葉家の能面が売り立てられたのは、昭和十四年のことであり、そもそも年代が合わない。昭和十四年といえば、岩波書店から『能面』を刊行した後、野上の能面研究がいよいよ大きな成果を上げつつあった時期であった。そんな折、野上の故郷である白杵の地ゆかりの能面が売りに出されたことを、野上は知っていたのであろうか、それとも知らなかったのであろうか。しかし、仮に野上がこの売立の情報を聞きつけたとしても、彼が積極的に札を入れることはしなかったであろう。目録の写真で見ると、白杵稲葉家の能面の多くは、「品質が押しなべてガタ落ち」という野上の大名面に対する評価を覆すほどのものではないからである。なお、次頁に、その『御能面目録』全文の翻刻を掲げておく。

注

- (1) この博物館の名称は、野上自身も「此の博物館の名前も或ひはまちがつてゐはしないかと思ふ」と述べているように、野上の記憶違いであるらしい。ベルリン・アジア美術博物館の学芸員アレクサンダー・ホフマン氏によると、東アジア美術館は一九四五年までクンストゲヴェルベ博物館（工芸博物館）の一階にあったが、それに隣接してフェルカークンデ博物館（民族学博物館）があり、それを先史古代博物館と混同したのではないか、ということである。

天保七年六月付『御能面目録』

御能面目録

黒塗御単司

- 一、曲女
- 一、瘦男
- 一、頼政
- 一、小へしミ
- 一、笑尉
- 一、若男
- 一、ゑち
- 一、翁
- 一、般若
- 一、増
- 一、小面
- 一、父尉

四 壺 壺 壺 壺 壺 壺 壺 壺 壺 壺 壺 壺

- 一、黒髭
- 一、釣眼
- 一、景清
- 一、大喝食
- 一、鼻こふ尉
- 一、大飛出
- 一、山姥
- 一、泥眼
- 一、深
- 一、瘦女
- 一、姥
- 一、大へしミ
- 一、狸々
- 一、小喝食
- 一、童子
- 一、邯鄲男
- 一、三光尉
- 一、三日月
- 一、三番瘦(采半)男
- 一、天神

壺 壺

一、なまなり

一、中将

一、外河

一、長霊へしみ

一、平太

一、尉

但箱二人御長持人

白木御単司狂言部

一、武悪

一、朝日奈

一、末社

一、伯父ノ尉

一、猿

一、嘘吹

一、頼政末社

一、座頭

一、末社

一、蛭子

一、おぢ

壺

壺

壺

壺

壺

壺

壺

壺

壺

壺

壺

壺

壺

壺

壺

壺

壺

一、白蔵主

一、狐怪

但箱二人御長持人

天保七年丙申年

六月日

壺 壺

野上文庫蔵書目録

深澤 希望

はじめに

本文庫は、野上豊一郎（一八八三—一九五〇）・弥生子（二八八五—一九八五）夫妻の旧蔵書をもとに一九八五年に設立された。豊一郎氏の功績を記念して設立された能楽研究所と野上家の縁は深く、一九八五年三月の弥生子氏逝去の後、御遺族から数回にわたる寄贈を受けて現在に至る。

能楽関係資料を中心に約六〇〇点から成る本文庫は、文書資料だけでなく能道具や写真資料、欧文献と多岐にわたる内容で、英文学者であり能楽研究者でもあった豊一郎氏の研究領域の広さを示すものと言える。

古資料には能楽研究所蔵本の離れである日爪忠兵衛宗政手沢本（一A一）や昌則筆『鷺流狂言秘伝書』（五一）や『御能面目録』（六B一）などがある。なお、現在、能楽研究所蔵となっている野上豊一郎旧蔵車屋謡本は豊一郎氏の没後、一九五三年四月に弥生子氏の御好意で、創立まもない能楽研究所に寄贈されたものであり、本文庫と密接な関係

にある資料である。また、豊一郎氏の能楽研究の過程を窺い知ることのできる原稿・ノートの類のほか、野上夫妻の能楽愛好の歴史を物語る資料も注目に値する。豊一郎氏は宝生新、弥生子氏は尾上始太郎に習い、下掛宝生流の謡を嗜んでいたことは周知の事実であるが、その実際を垣間見る資料として、夫妻手沢下掛宝生流謡本、宝生新筆小謡、豊一郎氏の謡稽古メモ、尾上始太郎より譲り受けた小鼓胴などがある。さらに、夏目漱石追善謡会の番組（六F3）をはじめ豊一郎・弥生子両氏出演の素謡会の番組、細川家を舞台での催しの番組など、野上夫妻を通して戦前の能界を捉える上で貴重な資料を有している。

本目録は二〇一三年十月に開催されたシンポジウム「生誕一三〇年 野上豊一郎の能楽研究を検証する」に際して作成した仮目録に、書誌を中心とした簡略な解題を加筆したものである。本書に収録するにあたり、西野春雄氏等が調査・作成されたカード目録を参照させていただいた。

凡例

▽本目録は蔵書を以下の十八項目に分類した。

「一、謡本〔A番謡／B部分謡〕」、「二、伝書・注釈書」、「三、研究書・解説書」、「四、付」、「五、狂言」、「六、史料〔A由緒／B能道具／C絵図・絵画／D関連資料／E明治以降の史料／F番組〕」、「七、写真・フィルム」、「八、原稿」、「九、ノート」、「十、書簡」、「十一、メモ」、「十二、その他」、「十三、活字本〔A和書／B洋書〕」、「十四、雑誌」、「十五、案内・目録・プログラム」、「十六、抜刷」、「十七、雑誌・新聞切抜」、「十八、レコード」

▽寸法はミリ単位で記し、他の単位の場合には注記した。

▽難読文字は■、虫損は□で示した。

▽本目録は能楽研究所諸文庫目録を参考に執筆した。また、『鴻山文庫本の研究』（以下『鴻』と略記）、『鴻山文庫蔵能楽資料解題（上・中・下）』（以下『鴻（上・中・下）』と略記）と関連する資料についてはその旨を記し、紙幅の都合上、雑誌の内容や曲目を省略したものもある。

▽「十七、雑誌・新聞切抜」で掲載誌（紙）・年月日不明を明らかにするため関栄司氏「野上豊一郎博士著作目録」（『能楽研究』一七、一九九三）、昭和女子大

「学近代文学研究室「野上白川」（『近代文学研究叢書』六七、一九九三）を参照した。

一、謡本

本節には謡本を収めた。A番謡・B部分謡に二分し、写本・版本に分け、上掛り・下掛りの順に並べた。

A番謡

○観世

1日爪忠兵衛宗政手沢謡本 十帖

【形態】写本。綴帖装小本。紙箱入。

【書誌】渋引茶色表紙（162×123）。表紙中央上部に打付書外題〈せいわうほ〉のみ朽葉色表紙、中央上部に白地書題簽「せいわうほ」。内題すべてなし。片面六行。一番綴。観世流。包紙であったラジオ番組表が刷られた紙（270×392）には、中央に「慶長（寛永）とあったのを訂正」筆写／謡本」とあり、「観世身愛」とペンで書き添え、裏には二人の人物画落書がある。以下、各冊の墨付、識語等の書き入れを、順に記す。

①通小町 墨付十丁。表紙見返し「従幼少為稽古本者也／寛永拾九年卯月日 日爪忠兵衛宗政（花押）」。末尾には、

朱筆（判読不可）を消し、その上に「弘治貳年二月十三日 観世太夫元忠在判／磯谷新左衛門殿 フヒツ壬申改 カナ」と上書きする。朱筆あり。観世黒雪についてのメモ（227×155）あり。

②狸々 墨付五丁。遊紙一丁。奥書「寛永拾年中秋下旬 日爪忠兵衛宗政（花押）」。朱筆あり。

③せいわうほ 墨付八丁。遊紙二丁。表紙見返し貼紙「筆／一豊臣秀頼公筆西王母謠本」。奥書「淵田□□（二字程擦り消し）小本ニテ章句写也／寛永拾中秋下旬 日爪忠兵衛宗政（花押）」。

④大佛供養 墨付十三丁。表紙見返し右上「壬申改」とあるのを抹消。奥書「□□（二字程擦り消し）本ヲ以写之／寛永廿癸未（拾二）を消し上書き）卯月下旬 日爪忠兵衛宗政（花押）／正保乙酉五月上旬再覽候也／ナヲ」。

⑤田村 墨付十七丁。表紙見返し「壬申改／不可有他見本也／寛永拾九壬午卯月日 日爪忠兵衛宗政（花押）」。奥書「慶長六神無月日 観世左近大夫身愛／永井右近様参カナ」。朱筆あり。

⑥難波 墨付十三丁。表紙見返し「壬申改」。奥書「為他見有間敷本□（者力）也／寛永拾八年霜月下旬／日爪忠兵

衛宗政（花押）／慶長九年八月三日 観世左近大夫身愛／永井右近大夫様まいる／ハン ナヲス カナ」。

⑦はちの木 墨付二十五丁。奥書「慶長六年九月二日 クワンセサコン大夫身愛判／永井右近様まいる／寛永拾二中春上旬／日爪忠兵衛宗政（花押）／壬申改」。朱筆あり。

⑧はうか僧 墨付十六丁。奥書「寛永拾九年八月日 日爪忠兵衛宗政（花押）／丙子弥生下旬於豫州再見者也／壬申改極月於旅泊再□（見力）者也」。

⑨松風 墨付二十丁。表紙見返し「壬申改」。奥書「不可有他見本也／寛永拾九年壬午七月日 日爪忠兵衛宗政（花押）／慶長十二／二月廿七日 観世左近大夫身愛／佐久間伊与守様」。奥書のある表紙裏上部中央やや右寄りに「ハン」左下隅に「カナ」とある。朱筆あり。

⑩紅葉狩 墨付十二丁。表紙見返し「寛永拾九年壬午六月日 日爪忠兵衛宗政（花押）」、また右下隅に小字で「ナヲ」とある。奥書「慶長六／十月八日 観世左近大夫身愛判／永井右近様参」。

【曲目】通小町・狸々・西王母・大仏供養・田村・難波・はちの木・はうか僧・松風・紅葉狩。

【備考】日本古典全書『謡曲集（上）』の野上豊一郎氏「解説」

で西王母についての言及あり。能楽研究所蔵の日爪忠兵衛宗政手沢謠本については、表章氏『蔵書目録附解題』一五を参照。本謠本と関係の深い下里本（鴻山文庫蔵）については、伊海孝充氏「下里次郎大夫家昌奥書本の周辺―近世桑名能楽史の一断面―」（『能と狂言』七、二〇〇九）参照。

○下掛宝生

2 下掛宝生流十二番綴謠本 一冊

【形態】写本。袋綴半紙本。

【書誌】鶯色地雲霞模様厚紙表紙（228×158）。左肩に雲英入り長形書題簽に曲目を列挙（一部剥落して読めず）。内題なし。目録（二丁表）。曲目見出しあり。墨付九十四丁。片面七行。間拍子あり。直シあり。奥書なし。小豆色角裂。朱筆書入れあり。

【曲目】浦嶋・大蛇・伏見・常陸帯・胡蝶・空蟬・藤・陀羅尼落葉・礎・鶯・輪蔵・求塚。

【備考】〈陀羅尼落葉〉の上部余白朱筆「天保／年間／改／明ス暮／二度ナガラ／スミテ／ウタウ／右英勝公／御改」の書き入れがある。「英勝」はワキ方宝生流六世新之丞英勝（安政三没）のことか。本謠本ならびにA3～5は、裏

表紙見返しに「故尾上始太郎氏旧蔵／野上」とあるB1と同筆らしく、これらは一括してワキ方宝生流の能役者である尾上始太郎（一八六一―一九二四）旧蔵資料と思われる。

3 下掛宝生流十三番綴謠本 一冊

【形態】写本。袋綴半紙本。

【書誌】薄鈍色厚紙表紙（236×163）。中央上半分に雲英入り横形書題簽、所収曲を二段で列記、左下隅に「九」とある。内題なし。目録なし。曲目見出しあり。片面七行。墨付一二九丁。奥書なし。間拍子あり。朱筆直シ・書入れあり。小豆色角裂。挟み込み紙（136×193）に「九月六日金、野島宅において午後五時始」とある「大蛇・松虫・六浦・正尊・望月」の朱筆の番組あり。

【曲目】国栖・舎利・野守・玉葛・浮舟・錦木・烏頭・項羽・熊坂・鐘馗・檀風・鉢木・狸々。

4 下掛宝生流十二番綴謠本 一冊

【形態】写本。袋綴半紙本。

【書誌】灰色山路文模様表紙（230×166）。題簽なし。内題なし。目録（二丁表）。曲目見出しあり。片面七行。墨付九十二丁。

奥書なし。鍔浅葱色角裂あり。間拍子あり。朱筆直シ・書入れあり。一部、粒付あり。

【曲目】松尾・綾鼓・護法・関原与市・満仲・草薙・錦戸・枕土童・忠信・豊干・須磨源氏・千引。

【備考】〈護法〉上部余白に「天保十二年／丑九月／改／秋津国と／なし給ふ」とある。

5 下掛宝生流十番綴謄本 一冊

【形態】写本。袋綴半紙本。

【書誌】灰色小花模様表紙(223×164)。中央上部に横形書題

「葵上／もみち狩／春日龍神／蟻とほし／舍利／のもり／卒都婆小町／かよひ小町／小鍛冶／船はし」、葵上・紅葉狩以外は曲名上部に朱の●印、葵上・紅葉狩・蟻通以外は曲名下部に朱の「」あり。内題なし。目録なし。曲目

見出しあり。片面七行。遊紙一丁、墨付八十七丁。奥書なし。小豆色角裂あり。間拍子あり。朱筆直シ・書入れあり。一部、

粒付あり。挟み込み紙(154×139)あり、〈誓願寺〉上げ歌(道行・待謡)抜書。

【曲目】葵上・紅葉狩・春日龍神・蟻通・舍利・野守・卒都婆小町・通小町・小鍛冶・舟橋。

6 下掛宝生流仮綴半紙本「通小町」一冊

【形態】写本。仮綴袋綴半紙本。

【書誌】表紙なし(245×164)。内題あり。片面六行。墨付十一丁。一丁右下に「のがみ 四四・三」と墨書。間拍子、朱筆直シ、鉛筆書入れあり。

○観世

7 光悦謄本特製本「ゆや」一帖

【形態】版本。大判半紙本。紺色布製帙入。

【書誌】綴帖装(240×181)。雲母模様刷白色料紙。後補、茶色唐紙長形書題「ゆや」。内題なし。片面七行。墨付十五丁。間拍子なし。

8 寛永六年卯月本「老松」一冊

【形態】版本。袋綴半紙本。紺色布製帙入。

【書誌】紺表紙(221×169)。一番綴普通紙本。左肩に長形刷題。表紙見返しに神原甚造の蔵書印(朱印・黒印)あり。内題なし。片面七行。墨付七丁。間拍子なし。

【内容】『鴻』五20のと同版。

9 慶安二年五月安田十兵衛刊「頼政」 一冊

【形態】 版本。袋綴半紙本。

【書誌】 灰色茶色格子字に白水桃色斑模様表紙（ 233×171 ）、後人改装。題簽なし。内題なし。片面七行。墨付十一丁。間拍子入。奥書は正保耶查本と同じで、刊年刊者名が「慶

安二曆五月吉旦／安田十兵衛開板（不明角印）。奥書の余白部分に「證房（花押）」と署名があり、「證房」の上に「亀吉」の丸印を捺す。

【内容】 『鴻』五92①と同版か。

10 貞享三年九月林和泉掾刊五番綴謄本 二十冊

【形態】 版本。袋綴小本。

【書誌】 布目入薄茶色表紙（ 157×112 ）。横形刷題簽（剥落している冊もある）。曲目見出しあり。片面七行。間拍子有無両様。

【内容】 外組Xの二十冊百番揃。通称「三百番本」。いずれの冊も奥付に林和泉掾の朱印なし。『鴻』五217の覆刻本か。

11 刊年不明西村屋與八ほか刊一番綴中本 四冊

【形態】 版本。袋綴中本。

【書誌】 紺表紙（檜垣・ 182×121 、他・ 180×122 ）。長形刷題簽

（下部に角枠「當流」新板）。檜垣は題簽剥落、西行桜は題簽なし。

奥付は『鴻』五345（貞享四年刊）に同じ。

【曲目】 檜垣。西行桜。錦木。野々宮。

【内容】 『鴻』五344～345参照。

12 刊年刊者不明一番綴中本「玉井」 一冊

【形態】 版本。袋綴中本。

【書誌】 紺表紙（ 180×122 ）。題簽なし。内題あり。奥付なし。

【備考】 前本と同様の体裁であるためここに置く。

13 元禄二年正月林和泉掾刊五番綴謄本 二十冊

【形態】 版本。袋綴小本。

【書誌】 布目入薄茶色表紙（ 157×112 ）。横形刷題簽。曲目見出しあり。片面七行。間拍子有無不定。

【内容】 外組Yの二十冊百番揃。通称「四百番本」。『鴻』五223参照。

14 元禄三年二月山本長兵衛刊五番綴謄本 一冊

【形態】 版本。袋綴中本。

【書誌】紺表紙(181×129)。横形書題簽。曲目を列挙し、それぞれ下に「改」とする。曲目見出しあり。片面六行。墨付五十三丁。間拍子入。朱筆直シあり。楷書クセ小書入。上部余白に朱筆で装束付や注釈を書入れる曲もある。

【曲目】定家・楊貴妃・賀茂・鶴亀・熊坂。

【内容】『鴻』五²³¹①参照。

15 刊年刊者不明『九祝舞』 一冊

【形態】版本。袋綴半紙本。

【書誌】七宝輪繋ぎ小花模様空押紺表紙(245×170)。左肩に長形刷題簽「九祝舞」。曲目見出しあり。片面七行。遊紙一丁、墨付二十一丁。間拍子・直シなし。奥付なし。

【曲目】初日・二日・三日・四日・法会舞・十二月の往来・父尉延命冠者・弓箭立合・船立合。

16 観世流新稽古本「竹生島」 一冊

【形態】版本。袋綴中本。

【書誌】格子柄表紙(208×149)。左肩の部分の地を白抜きにして題簽とし「竹生島 観世流新稽古本」と刷る。表紙見返しに配役・装束付等、一丁表に解題、一丁裏に謡い方を掲

載。七行。間拍子入。直シあり。昭和十九年三月十日発行。

○下掛

17 天和元年霜月森西六兵衛・吉田徳兵衛刊五番綴謄本 一冊

【形態】版本。袋綴半紙本。

【書誌】紺表紙(226×163)。横形刷題簽。曲目見出しあり。片面七行。墨付四十八丁。間拍子入。朱筆書入れあり。

【曲目】春日龍神・国栖・蟻通・三輪・立田。

【内容】『鴻』八12と同版。

18 貞享四年季商山本長兵衛刊五十番綴謄本 四冊

【形態】版本。袋綴横本。

【書誌】巻水に寿字模様空押紺表紙(116×177)。題簽なし。内題なし。各冊第一丁に目録。曲目見出しあり。薄黄色角裂あり。奥付は「月」冊のみで『鴻』八23に同じ。「嘉永六癸丑年／六月大吉日於東都／求之 肥藩／中尾正道(黒印)」とすべての冊の末尾に墨書。地の部分に「花(鳥・風・月) 四冊之内」と墨書。手組を朱書きする曲もある。

【内容】内組V・外組二の百番揃。内組は『鴻』八23・24と同様に、八31・32の後刷本。外組は、奥付が異なるが

八35・58と同版。

19 下掛宝生流五番綴謡本(内・外・別) 二組(七十二冊) 零本

【形態】 版本。袋綴半紙本。

【書誌】 丸紋模様空押茶色表紙(232×166)。横形刷題簽。六行。明治四十四年〜大正六年刊。

【内容】 下掛宝生流内組百番・外組八十番・別四番。ただし、内組の蟻通組(一冊)と加茂組(二冊)が欠本。外組の鶴亀組は三冊ある。豊一郎・弥生子おのおので一組ずつ所蔵。弥生子旧蔵本は木箱入りで、曲目の下に稽古日や観能メモの書き入れが見られる曲が多数ある。

20 大正六年宝生新刊一番綴謡本 三冊

【形態】 版本。袋綴半紙本。

【書誌】 丸紋空押駱駝色表紙(232×166)。中央に長形刷題簽。内題あり。大正六年九月二十五日発行。片面六行。間拍子あり。全冊、朱筆直シ入り。

【曲目】 歌占。野宮。隅田川。

【内容】 『鴻』一九一参照。

21 昭和決定(改訂) 版下掛宝生流一番綴謡本 一四二冊

【形態】 版本。袋綴半紙本。

【書誌】 灰色表紙(226×159)。中央に長形刷題簽、曲名の下に「昭和決定版/内(外)○○ノ○」と二行書。ただし、内八「千手」、内二十「安宅」、外一「草紙洗」、外九「雲雀山」は「昭和改訂版」とする。内題あり。片面六行。間拍子入り。昭和二十九年一月〜三十年十月発行。著作権者宝生哲、校閲者松本謙三・宝生彌一・森茂好、発行兼印刷者下掛宝生流謡本刊行会。

【内容】 下掛宝生流内組・九十一冊、外組・五十一冊。『鴻(上)』三〇四参照。

【曲目】 《内組》高砂、玉葛(二冊)、竹生島(二冊)、熊坂、野宮(二冊)、籠太鼓、老松(二冊)、湯谷(五冊)、紅葉狩(三冊)、隅田川(二冊)、野守(二冊)、屋島(二冊)、小原御幸、富士太鼓、嵐山(二冊)、敦盛(二冊)、千手(二冊)、籠(二冊)、山姥(二冊)、三輪(二冊)、井筒、天鼓(二冊)、鶉飼、頼政(二冊)、小塩(二冊)、百萬(二冊)、鉢木(二冊)、東北(二冊)、花筐(二冊)、蘆刈(二冊)、烏頭、阿漕(二冊)、葵上(四冊)、安宅(二冊)、藤戸(二冊)、黒塚(二冊)、花月(二冊)、土蜘蛛(二冊)、小鍛冶(二冊)、兼平

(二冊)、西行桜(二冊)、女郎花、國栖(二冊)、實盛(二冊)、
 邯鄲(二冊)、盛久(二冊)、養老(二冊)。《外組》草紙洗(二冊)、
 松虫(二冊)、鶴亀、雲林院(二冊)、大佛供養、西王母(二冊)、
 卷絹(二冊)、経政(二冊)、大江山、咸陽宮(二冊)、鐵
 輪(二冊)、班女、綾鼓(二冊)、巴(二冊)、半部、雲雀
 山(二冊)、放下僧(二冊)、弱法師(二冊)、羅生門、鷺(二
 冊)、遊行柳(二冊)、桜川(二冊)、枕慈童、葛城(二冊)、
 三山(二冊)、俊寛(二冊)、七騎落(二冊)、胡蝶(二冊)、
 石橋(二冊)。

22金春流一番綴謄本「関寺小町」一冊

【形態】 版本。袋綴半紙本。

【書誌】 若松霞模様型押紺表紙(228×160)。左肩に薄綠色刷
 題簽。内題あり。一丁表に「上演記念謄本」、二丁表に梗
 概、二丁裏に装束付。片面七行。間拍子入。直シあり。昭
 和三十年十月一日発行。

○特殊謄本

23大正御大典能記念謄本 一冊

【形態】 版本。袋綴半紙本。

【書誌】 石版刷。大和綴(紫糸)。白茶地金欄表紙(218×152)、
 上部中央に菊花紋、流水に桜・橘・桐を雲形に入れた模様。
 天地と背に金引く。題簽なし。一丁表に番組。

【曲目】 橋弁慶・羽衣・狸々。

【内容】 大正四年十二月七八日の大正天皇即位大典記念祝
 賀能の豪華な謄本。『鴻』一三C・2参照。

24大正七年十二月二十一日戦勝祝賀能六番綴袖珍本 一冊

【形態】 版本。袖珍本。紙箱入。

【書誌】 雲霞雲母刷模様薄茶色表紙(111×77)。題簽なし。
 本書の作成の経緯を記す「小引」(113×157)を添える。

【曲目】 翁・高砂・石橋・橋弁慶・羽衣・狸々乱。

【内容】 刊者不明。大正七年十二月二十一日、九段靖国神
 社能楽堂において催された休戦祝賀能の袖珍本。大正四年
 御大典記念祝賀能謄本の複製。『鴻(上)』一三C追加分④
 ・53を合冊したもの。

25昭和三十四年四月檜書店刊「東天紅・寿不尽」一冊

【形態】 版本。袋綴半紙本。

【書誌】 菊桐紋鳳凰図金刷墨色表紙(227×164)。枯色地白矢

車模様横形刷題簽「御成婚奉祝曲／東天紅／壽不盡」。觀世流。

【内容】『鴻(上)』三二A・45参照。

26 昭和四十年二月檜書店刊「面塚」一冊

【形態】 版本。袋綴半紙本。

【書誌】 右一つ藤巴模様薄紫色表紙(228×165)。薄茶色長形刷題簽。觀世流。

【内容】『鴻(上)』三二A・54参照。

27 昭和五十七年能楽研究所刊「雲林院世阿弥本による」一冊

【形態】 版本。袋綴半紙本。

【書誌】 生成り色表紙(210×150)。紫色地白抜き「雲林院世阿弥本による」と表紙左上に題簽風に刷る。四つ穴和綴の糸を紅紫色で刷る。内題あり。七行。間拍子入。直シあり。昭和五十七年十月二日発行。野上記念法政大学能楽研究所。

B 部分謡

○下掛宝生

1 筆者不明『乱曲語 全』一冊

【形態】 写本。袋綴半紙本。

【書誌】 灰色地薄茶横刷毛目厚紙表紙(232×162)。左肩に長形雲英入り書題簽「乱曲語 全」。一丁に目録。曲目見出しあり。墨付五十三丁。間拍子、直シあり。朱筆書込み(読み仮名や粒付)あり。奥書なし。裏表紙見返しに「故尾上始太郎氏旧蔵／野上」とある。「須磨源氏」(「上歌」)「クセ」を抜書した原稿用紙二枚挟込みあり。

【曲目】《乱曲》淡路・上宮太子・須磨源氏・一字題・近江八景・実方・耀衣・玉取・寫廻・身延・横山・加茂物狂・美人揃・飛鳥川・舞車・曙・女御留・起請文・蘓武・隱岐院・初瀬六代・東国下・西国下。《語》鞠・蓬萊山・翁草・貴舟。

2 宝生新筆「乱曲 実方」一枚

【形態】 写本。一枚物(48×30)。

【書誌】 雲英入り半紙(195248×270330)に書かれた「乱曲 実方」を中心に貼り、台紙とした半紙の右上余白に「寶生新筆

蘭曲実方(「野上」朱印)と墨書する。包紙に「丸岡／野上先生 宝生新氏真筆／お返し品の」とある。

【備考】野上豊一郎編『宝生新自伝』(能楽書林、昭和

二十四年)の口絵に掲載されており、国際文化振興会でレコード『実方』を吹き込んだ際の記念として編者に贈ったものであることが知られる。

3 仮綴半紙本「実方」一冊

【形態】写本。仮綴袋綴半紙本。

【書誌】237×164。共表紙中央に打付書外題「実方」。内題あり。墨付三丁。間拍子あり。朱筆直シ入り。

○観世

4 貞享四年五月山本長兵衛刊『久世舞要集』二冊

【形態】版本。袋綴半紙本。

【書誌】紺表紙(223×162)。中央に長形刷題簽「久世舞要集上」。

上冊、題簽剥落。内題「久世舞要集上(下)」。目録(二丁表～二丁表)。曲目見出しあり。墨付は順に七十・六十二丁。裏表紙「油屋休兵衛」と墨書。

【内容】『鴻』一〇43参照。

5 明和二年九月刊須原屋刊『戯業栄花小謡千年緑百番』一冊

【形態】版本。袋綴半紙本。

【書誌】浅葱色表紙(224×155)。題簽剥落。内題なし。曲目見出しあり。墨付二十七丁。本文末に「右以上懸之全本悉章句為改正令世行者也」明和二年乙酉九月 東都書林 須原屋茂兵衛発行」。頭書入り小謡本。

【内容】『鴻』一〇15と同内容であるので、仮に同書名を付した。鴻山文庫本に比べ、寸法も若干大きく、表紙の色も異なるが、同版と思われる。刷りは鴻山文庫本の方が良い。

6 勅題小謡「海上日出」一枚

【形態】版本。一枚物(129×181)。

【書誌】文学博士野上豊一郎謹作、二十五世観世元正、後見観世鏡之丞謹曲。

7 昭和四十二年新春御題小謡「魚」同十枚

【形態】版本。一枚物(119×199)。

【書誌】香西精謹作、二十五世観世元正謹曲。昭和四十二年新春、檜書店謹製。

○下掛

8 享和元年九月刊『下懸囃謡大成』一冊

【形態】 版本。袋綴横本。

【書誌】 灰汁色表紙（ 136×187 ）。題簽なし。表紙見返しに枠入りで「下懸／囃謡／大成」とある。一～二丁に序、その末尾に「享和辛酉秋日／千鐘房主人しるす」。目録（三～五丁）は「新改正下懸囃謡」とする。墨付二百一十一丁。

【内容】 『鴻』一三27・28参照。本書は奥付が四店連名であり、28と同版。

9文化三年六月須原屋茂兵衛刊『曲舞』 一冊

【形態】 版本。袋綴半紙本。

【書誌】 藤丸紋散し空押紺表紙（ 225×161 ）。中央に金箔散し長題刷題簽「曲舞」。目録（二丁）。曲目見出しあり。遊紙一丁、墨付五十八丁。間拍子、直シあり。喜多流。

【内容】 『鴻（上）』一三29（喜多流節付）、『鴻』八56参照。

10刊年不明谷口七左衛門刊『下懸囃謡』 一冊

【形態】 版本。袋綴横本。

【書誌】 千草鼠色布表紙（ 128×195 ）。中央に赤色子持梓長形刷題簽「下懸囃謡」八十番全。目録（一～二丁）は「下懸

囃謡大成目録」。曲目見出しあり。墨付百五十八丁。奥付

半丁破損。裏表紙見返しに最終丁裏が貼られ、書籍の広告に「下掛囃謡内八拾番 全一冊」他を列記、末に版元「京新町下長者町上ル丁 谷口七左衛門板」とある。朱筆手組書入れあり。

【内容】 『鴻』一三12参照。

11刊年不明河内屋太助刊『觀世童子小うたひ并二狂言記入』 一冊

【形態】 版本。袋綴半紙本。

【書誌】 扇と輪模様空押浅葱色表紙（ 223×160 ）。左肩に子持梓長形刷題簽「觀世童子小うたひ／并二狂言記入」。曲目見出しあり。墨付五十三丁。柑子色角裂あり（破損）。刊年はなく奥付は「大阪書林 心齋橋通唐物町 河内屋太助」とある。五丁表まで式三番の詞章、頭書に小道具の図と能くみの事。五丁裏に目次あり。頭書はこの丁から『狂言記』になり十七番を収める。小謡を四季に分類する。

【内容】 見返しに『算法早まなび』の広告があり「弘化四／大新板」と見えるので、その頃の版と推定される。『鴻』一〇91と題簽は同じだが、内容は別。

12刊年不明吉田屋文三郎刊『小謡童子訓』 一冊

【形態】 版本。袋綴中本。

【書誌】 浅葱色表紙(201×143)。左肩に子持梓長形刷題簽「小謡童子訓 全」。表紙中央やや右よりに朱で「へ善 武久善藏」とある。墨付二十四丁。表紙見返しに老松の前場の絵。内題は「小うたひ百三十一番」とあるが八十九曲。祝言之部・神祇之部・花見之部・船遊之部・雪之部・酒宴并雑・酒宴取看・問対部・語之部の九つに分類する。奥付「右小謡者観世左近大夫以章句写之令改正板行者也／東都書肆 馬喰町四丁目 吉田屋文三郎板」。

【内容】 『鴻』一〇268に同名の小謡集(但し「当流」の角書あり)があるが、内容は別。

13 刊年不明 『下懸謡論儀』 一冊

【形態】 版本。袋綴半紙本。

【書誌】 鳳凰と桐唐草繫模様空押茶色表紙(232×162)。左肩に梓長形刷題簽「下懸謡論儀 全」。一丁表に面箱・中啓・鈴・四拍子の絵、一丁裏に目録。曲目見出しあり。墨付二十六丁。奥付なし。朱筆間拍子あり。裏表紙見返しに「齋藤忠興藏本」、朱筆で「萬延二初春」のほかゴマ点のような記号四種を書き、ヤ・ヤア・ヤヲ・ヤハと振る。

【内容】 『鴻』一三43と同版か。

14 昭和十九年刊 『下掛宝生流小謡集』 一冊

【形態】 版本。袋綴半紙本。

【書誌】 薄茶色表紙(232×158)。中央に子持梓長形刷題簽「下掛寶生流小謡集」。内題なし。墨付五十三丁。奥付なし。序(一丁)に「下掛宝生流宗家第九世金五郎英周嘗て自／ら筆を執りて小謡集二巻を書写し節博／士を施す前巻収むるところ高砂より狸々に至／る五十七番 後巻収むる所 語八番並びに小謡老／松より花筐に至る十七番外に追加番外等／を収む総へて九十二番此内前巻及語の二三は／初学入門の稽古に資するを意図したるものゝ如し書写の年代は後巻目録の末尾に辛丑／十二月の文字あるを以て明治三十四年と推定せらる／即ち金五郎還暦の筆なるへし此書久敷第／十世朝太郎忠英(新)の匣中に蔵せられありしを／生前不肖の懇請により副刷に附する事の／承認を得第十一世哲の同意を得たり由来脇／方小謡集の刊行は絶えてなかりしか茲に初めて之／を見るに至る而も能筆を以て聞こえたる先々代／宗家の肉筆を直ちに彫鑄したるものなれハ些か／以て珍とするに足らんか／昭和十九年十月日 宝生弥

一」とある。目録(二丁)、また三十三丁に目録をおき、語・

許シ後小謡ノ部・追加・番外を挙げる。曲目見出しあり。

【曲目】高砂・難波・養老・右近・志賀・弓八幡・岩船・竹生嶋・加茂・金札・西王母・咸陽宮・鶴亀・邯鄲・田村・

箴・俊成忠度・生田敦盛・敦盛・経政・湯谷・千手・東北・

六浦・半部・羽衣・藤・祇王・杜若・胡蝶・草紙洗・雲雀

山・班女・三井寺・桜川・采女・玉葛・葛城・三輪・盛久・

藤永・春栄・鳥追・松虫・巻絹・融・紅葉狩・春日龍神・

雷電・正尊・大仏供養・鞍馬天狗・羅生門・鷲・烏帽子折・

鶴・狸々・鞠・蓬莱山・翁艸・貴船・七騎落・盛久・雲林

院・道明寺。老松・芭蕉・弱法師・鉢木・求塚・葵上・西

行桜・張良・木賊・松山鏡・井筒・高野物狂・山姥・安宅・

実盛・歌占・花筐。通盛・誓願寺・三山・浮船・舍利・海

人。皇帝・俊成忠度・芦刈。石橋。

二、伝書・注釈書

1 刊年不明『当流謡秘伝抄』一冊

【形態】 版本。袋綴中本。

【書誌】 青磁鼠色布目表紙(225×157)。左肩に子持杵長形題

簽「當流謡秘傳抄」。「當流謡秘傳抄序」(二丁)。内題「謡

秘傳集」墨付三十二丁。

【内容】 末尾「元禄十丁丑年五月吉日」の年記の後に「浪華書林／心齋橋筋南久宝寺町／高橋平助藏版」と加刻する点がある。『鴻(中)』三七〇と異なる。

2 刊年不明『花伝書』四冊

【形態】 版本。袋綴美濃本。紺色布製帙入。

【書誌】 巻水に寿模様空押紺表紙(268×193)。左肩に長形刷

題簽「花傳書 二」、第一冊は題簽剥落、三冊は上部、四

冊は下部が剥落。内題なし。年記なし。奥書は「京都三條

通升屋町／御書物所／出雲寺和泉掾」。各冊一丁右上に

「伊澤家書」の朱印角印あり。

【内容】 古活字版の八帖本を覆刻した整版本。巻一・二・三・

四・五・六・七・八の二巻分を合冊。『鴻(中)』三七〇参照。

横山柚人「樵日記」(『能楽世界』451・453号、昭和12年7・8月)

紹介の『花伝書』と同版か。

3 古活字版『謡曲甲集』一冊

【形態】 版本。袋綴大本。紺色布製帙入。

【書誌】 灰色表紙(276×192)。表紙打付外題「寛永十二年

活字版／謡曲詳解」を抹消した上に、半紙題簽二枚を貼る。「謡曲甲集二十冊古活版／(帝国図書館蔵本)／謡鈔ノ前ノ本ナリ／謡鈔ハ林道春ノ著ト云説アリ」(174×56)、「古活版 零本 慶長活字本／二十冊物／謡曲甲集」(213×

67)、「慶長活字本」は赤ペン書き。野中完一蔵書の貼紙あり。表紙は後に改装したものらしい。内題なし。奥付なし。墨付八十二丁。1丁才に「野中氏図書」の蔵書朱印、末尾に同野中氏蔵書朱印と不明丸黒印あり。

【内容】謡注甲集本(古活字双辺十行本)。「鴻(中)」三四4参照。

【曲目】道明寺・西行桜・遊行柳・梅枝・富士太鼓・桜川・百万・柏崎・角田川・三井寺。

4 刊年刊者不明整版中本『謡鈔』 十冊

【形態】 版本。袋綴中本。

【書誌】薄縹色表紙(197×138)。十番綴。左上に子持棹長形刷題簽(153×40)「謡鈔」の書名を上部に大きく刷り、線を引き下下に所収曲名を三段(上4・中4・下2の順)に小字で列記。内題なし。裏表紙見返しに「安政五戊午九月於江戸表調之／全部拾冊之内／増田與三郎」と墨書あり。

二・三・十は「於東都調之」とする、他はすべて同じ文言。【内容】『鴻(中)』三四7参照。

5 刊年刊者不明中本『謡抄』百萬 一冊

【形態】 版本。袋綴中本。

【書誌】紺表紙(210×146)。一番綴。墨付十九丁。題簽なし。内題なし。裏表紙見返しに「東波(印)」あり。奥付なし。【内容】『鴻(中)』三四8参照。

6 貞享四年河南四郎右衛門刊『奈良土産^{謡評判}』 三冊

【形態】 版本。袋綴半紙本。

【書誌】紺表紙(225×158)。左肩に子持棹長形刷題簽「奈良土産^{謡評判} 上(中・下)」。内題「奈良笥上(中・下)」。墨付は順に四十二丁・五十五丁・二十六丁。表紙見返しに上冊は「上中下三冊物嶋仙ノキ正カテ」、中・下冊は「上中下三冊物」とある。下冊の刊記は「貞享四年丁卯年／九月吉日」の後に「河南四郎右衛門板」を加刻する。

【内容】『鴻(中)』三四18と同版。貞享四年上野屋本(三四16)の後刷本。

7 『奈良土産返答』 四冊

【形態】 版本。袋綴半紙本。

【書誌】 紺表紙(223×157)。左肩に子持梓長形刷題簽「返奈良土産元(号・利・息)」。内題「奈良土産返答上(中・下上・下之下)」。墨付は順に、六十五丁半・二十五丁半・三十一丁・二十八丁半。表紙見返しに、元の冊は「元号利貞改四冊／島仙／正ヨテ」、利の冊は「元号利貞冊物／島仙」とある。

版面は漢字仮名交じりで片面十行。版心は下部に丁付、上部に冊順(上・中・下ノ一・下ノ二)を刷る。

【内容】 三四七と同版。

三、研究書・解説書

1 刊年刊者不明『唱曲弁疑』 一冊

【形態】 版本。袋綴中本。

【書誌】 焦げ茶色表紙(180×125)。刷題簽剥落、かろうじて「詠口引」と読める。「唱曲辨疑序」(二丁)、附言・目録(各一丁)、

本文七十二丁。奥付に「明和五年戊子年三月 撰城書房 阿波座衿町 奈良屋善助」。表紙見返し破損。

【内容】 謡についての解説書。『鴻(中)』四〇15・16の後

刷本か。四〇15・16の奥付前半二行にある広告部分が本書

にはなく、裏表紙見返しの広告も異なる。求版者不明。

2 正徳五年刊『能之図式』 三冊

【形態】 版本。袋綴中本。

【書誌】 紗綾形模様紺表紙(222×157)。左肩に子持梓長形刷題簽「絵入(○の中に)能之図式 一二(〓五六)」。三四冊は楷書体で、他は行書体。内題「舞楽秘曲大成卷一(〓六)」。全冊とも一丁才右上に不明の蔵書朱印あり。墨付は順に、三十一・三十二・二十六丁。

【内容】 『鴻(中)』四〇2参照。本書の方がやや小型。

四、付

○シテ方

1 『喜多流仕舞附抄』 六冊

【形態】 版本。袋綴半紙本。

【書誌】 薄茶色表紙(240×165)。左肩に青色刷題簽「喜多流仕舞附抄 巻(〓六)」。石版複製本。墨付は順に

七十・六十三・五十七・六十四・四十七・二十七丁。深緑色角裂あり。

【内容】 第五・六冊に「中條丹波守宗能(花押)」の署名の

写しのある型付。『鴻(下)』四一102参照。

2 元文五年刊『能弁惑大全』 五冊

【形態】 版本。袋綴美濃本。

【書誌】 小豆色表紙(258×182)。左肩に布題簽「能辨惑 貳(五)」、第一冊は白紙題簽で無題、「能辨惑大全序」(二丁)、「惣目録」(五丁)、「第一巻」目録(二丁)。各冊目録あり。墨付は順に、六十一・三十八・三十九・四十一(遊紙一)・二十八(遊紙一)丁。

【内容】 『鴻(下)』四八4参照。本書の方がやや小型。

○太鼓方

3 『金春流太鼓舞頭附』 一冊

【形態】 写本。袋綴横本。

【書誌】 枯色綱目模様表紙(118×165)。題簽剥落。内題「金春流太鼓舞頭附」。墨付二十九丁、遊紙一丁。目録(二丁)。朱筆あり。奥書なし。末尾に名が記されていた形跡があるが、むしり取られているため「蔵」しか読めない。楽についてので挟み込み紙(158×273)あり。

【項目】 序之舞・神舞・早舞・真之舞・神楽・楽・ツレノ舞・

羽ノ舞・舞働・翔・祈・出羽・二ノ打出・海士打出・早笛・大癩・下り羽。「五段舞諸事能頭組ツレノ舞三段舞・羽之舞・舞働・大会舍利働・舟弁慶舞働・熊坂働・阿漕是界働・山姥下り羽・蘭序・真ノ蘭序・舞ノ位・打出シ事・打込頭組・楽ノ掛り・舞働・打出シ諸事・楽五段舞・舟弁慶舞働・神楽能・盤涉楽五段・舍利打出・五段序ノ舞・早舞五段・幣直り・脇能打様・舍利山姥翔・打込打様・百萬狂言會釈・寢覚・七五三出羽・五五三・太コニ体拵并調拵臺ノ名ノ傳・舞手附・謡手附・ツレ神楽ノ事・十二律ノ事・アイウエヲ之事・一調・哥。

4 『宝生謡観世太鼓頭付』 一冊

【形態】 写本。袋綴横本。

【書誌】 薄茶色表紙(134×193)。題簽剥落。内題「宝生謡観世太鼓頭付」。目録なし。墨付、百四十八丁(遊紙一丁)。目録なし。奥書なし。裏表紙見返し左下に小字で「八吉日」とある。詞章の横に、朱筆で手組を書く。

【曲目】 高砂・鶉飼・難波・船弁慶・老松・羽衣・白楽天・実盛・融・養老・葵上・遊行柳・同奥・竹生鳴・朝長・姨捨・阿漕・志賀・鶴・紅葉狩・同奥・蟻通・藤戸・玉の井・杜

【形態】 版本。袋綴美濃本。紺色布製帙入。

【書誌】 紺表紙(272×198)。外題なし。内題「狂言記巻第一(一)」。目録(二丁)。墨付は順に、三十九・三十五・三十六丁。奥付なし。縦²⁵⁴の料紙を大きめの紙に裏打ちした改装本。「狂言記」萬治初(寛文)とあつたのを訂正) 版大本」と書かれた紙在中。

【内容】 零本のため刊年不明であるが、寛文二年版の再摺を改装したものと思われる。『鴻(下)』四九八と同版。巻一は、四・八・四十一丁、巻二は八・二十丁が落丁。なお、巻二の二十丁に巻一の八丁を綴じ間違えている。

3 寛文五年版後印秋田屋求板『狂言記』二冊

【形態】 版本。袋綴半紙本。

【書誌】 浅葱色表紙(220×155)。左肩に長形刷題簽「狂言記一(一)」、破損しているが角書に「絵入」とあつたようす。内題「狂言盡上(下)」。墨付は順に、三十一・三十丁。

【内容】 『鴻(下)』四九二と同版。

4 元禄十二年版『狂言記』五冊

【形態】 版本。袋綴横本。

【書誌】 紺表紙(110×161)。左肩に子持棹長形刷題簽「絵入狂言記一(一)」。内題「狂言記巻第一(一)」。各冊第一丁に目録。墨付は順に三十一・二十九・三十一・二十九・四十丁。

【内容】 『鴻(下)』四九二と同版。

5 嘉永元年版『狂言記』六冊

【形態】 版本。袋綴横本。

【書誌】 萱草色巻水に草花模様空押表紙(122×178)。左肩に子持棹長形刷題簽「狂言記一(一)」。内題「狂言記巻第一(一)」。『續狂言記巻第一(一)』。「狂言記拾遺巻第一(一)」。墨付は順に、九十一・六十九・百・七十七・百九・七十三丁。奥付は「右狂言記拙者家之／雖為秘密任御所望／写之令板行者也詞／遺或者假名遣悪敷／事可有之併狂言綺／語也／元禄十二歳／巳霜月吉日／狂言記 五十番 全部五冊／続狂言記 同全部五冊／同拾遺 全部五冊／同外編近刻^{外五十番}全部五冊／嘉永元年^{申七月}／

江戸堀北二丁目 鷺頭辰三郎／心齋橋北久太良町 柳原喜兵衛／今安土町 川口宗兵衛／今北久太良町 橋本徳兵衛」。

【内容】 正編・続編・拾遺編をそれぞれ巻一・二・三と巻四・

五の二冊に合綴し全六冊にしたもの。『鴻(下)』四九三「江島刊嘉永版『狂言記正統拾遺』のもとになった嘉永版。

六、史料

A 由緒

1 『歌舞家伝記』 二冊

【形態】写本。袋綴美濃本。

【書誌】灰色表紙(277×191)。子持梓長形書題簽「歌舞家

傳記 上(下)」。内題「猿樂傳 上(下)」。墨付は順に、

二十三・二十四丁(遊紙一丁)。上冊目録(五丁)。奥書なし。

【内容】『日本庶民文化史料集成 第三卷 能』所収の『猿樂伝記』と同じ。

2 『勸進能の始り』 一冊

【形態】写本。袋綴仮綴中本。

【書誌】共表紙(181×122)。中央打付書「勸進能の始り／文

化十二乙亥年迄／凡三百五十二年二成」。内題「勸進能初り」。墨付三丁。

【内容】寛正五年糺河原勸進について番組等を記す。

B 能道具

1 『御能面目録』 一冊

【形態】写本。袋綴美濃本。

【書誌】共表紙(256×191)。中央打付書外題「御能面目録」。

内題なし。墨付七丁。遊紙一丁。奥書「天保七丙申年／六

月日」。帯封「天保七年六月調／稲葉家御能面目録」。「黒

塗御筆司」として能面五十一面、「白木御筆司狂言部」として十三面を列記。

2 野上豊一郎写『諸家面目録』 一冊

【形態】写本。袋綴半紙本。

【書誌】浅葱色布目模様表紙(209×177)。中央に長形題簽「諸

家面目録」。内題なし。観世元章「諸家面目録」を透写に

したものの。奥書に「右 諸家面目録 壺巻／観世左近元章

自筆本／明和八年日附在中／昭和九年三月観世左近氏ヨリ

借受ケ書写ス／能面国宝指定調査ノ一資料トシテナリ／野

上豊一郎(朱印「豊」)とある。挟込紙に、京都金剛家の

面リスト(二枚)白紙(二枚)、六世観世鍔之丞「分家伝来面」折紙がある。

3 野上豊一郎写『大野出目家伝書』 一冊

【形態】写本。二〇〇字詰原稿用紙一二二枚を和綴。

【書誌】柿色表紙(256×184)。中央に書題簽「大野出目家傳書」。

内題「大野出目家傳書／(明和七庚寅年)」。奥書に「後ノ年数計算ノ基準トナルモノニテ、此ノ書ノ完成ハ其ノ年ナシシコトヲ知ル。ノ之ヲ大野出目家ニ就イテイヘバ、明和七ノ年ハ友水歿後五年、即チ長雲庸吉ノ家督ノヲ相續シテ五年目ニ當ル。ソノ以後ノ年ノ代ノ記載ハスベテ後人ノ逐次記入シタルノモノナルベシ。ノソレヨリ百六十四年目ノ昭和十八年二月一日夜寫シ畢ルノ野上豊一郎」とある。刻印や花押は半紙に墨で写したものを添付。河内・三光坊・イセキの花押・署名の拓本(四枚)と『諸家面目録』の「喜多十大夫所持面」の抜書が挟み込まれている。

4 刊年不明喜多古能著『仮面譜』 一冊

【形態】版本。袋綴半紙本。紺色布製帙入。

【書誌】薄灰色布目表紙(228×158)。左上に子持杵長形刷題簽「仮面譜 全」。内題「仮面譜 喜多古能著」。表紙見返しに「豊」の朱印。墨付十六丁、序(二丁)、跋(一丁半)。奥付なし。地に「仮面譜」と墨書。

5 面裏・花押拓本 四枚

【形態】一枚物。

【内容】鏡津神社翁(98×108)・三番叟(99×108)、天川社翁の面裏(197×72)、赤鶴小飛出花押(55×52)。

6 カラス小鼓胴・革

【寸法】長248。径100。革径202。橙色紐一組。黄土色紐一。

胴内金泥銘「幸小左衛門ノ宗能(花押)」。革内側に朱筆で「初音」、もう一方には「千家メヤトノ丸黒印(陽刻)ノ丸黒印(陽刻)ノワ」と墨書あり。「秋晴―尾上始太郎先生ノ思ひ出」(『野上弥生子全集』第Ⅱ期第二九卷)・「思い出さまさま」(『野上弥生子全集』別巻二)に、尾上始太郎氏旧蔵のこの胴を譲り受けたことが記されている。

7 菊流水蒔絵小鼓胴・革

【寸法】長250。径101。革径202。橙色紐一組。

8 桐模様蒔絵小鼓胴・革

【寸法】長249。径100。革径202。朱色紐一組。革内側に五字

程の墨書と丸黒印「吉」（陽刻）あり。

9 小喝食 一面

【寸法】縦208。横133。裏面朱漆銘「小喝食」。「友水作」と貼紙（29×16）。黒紐一。唐草模様花浅葱色地鳳凰模様面袋入り、中央に「小喝食」と墨書した白地布を縫い付ける。

10 河内作孫次郎 一面

【寸法】縦216。横136。藍色地草花模様面袋入り、中央に「河内作／孫次郎」と白糸で刺繍。黄朽葉色地花模様面袋入り。

11 深緑色面紐 二本

12 鳳凰図中啓

【寸法】長347。扇面長210。先をこより状にした半紙（146×33）を骨に括り付ける。朱筆で「第六号 上中形（鳳凰）」とある。13、14の中啓も一括木箱（441×314×71）入り。上蓋表に「能用小道具第五號／白骨金地露無色中形／同 第九號／白骨白地泥引唐獅子二竹墨繪中形／同 第十號／黒

骨金地霞二萩霞二櫻色入中形／同 第十一號／白骨金地立波日ノ出中形」と墨書。上蓋裏左側に「明治十六年四月／小田切頼齋造」と墨書、左上部に「頼齋翁所造ノ羽團扇ノ箱ナリシモノ柄入ラサルニ依リ他ノ箱ニ移シ之ヲ／中形ノ箱トナセリ 大正十五年八月十一日記ス」と朱筆あり。

13 唐獅子図中啓

【寸法】長335。扇面長205。要破損、紐で括る。先をこより状にした半紙（149×34）を骨に括り付ける。朱筆で「第九号 中中形（唐獅子／墨繪）」とある。

14 霞萩桜図中啓

【寸法】長340。扇面長196。片親骨・要破損、紐で括る。先をこより状にした半紙（157×35）を骨に括り付ける。朱筆で「第十号 下中形（黒骨／霞萩桜）」とある。

C 絵図・絵画

1 天保八年筆「狂言画」 一卷

【形態】写本。卷子本。

【書誌】紙高275。青色表紙打付書「狂言畫」。表紙見返しに

部分的に曲目を列記。奥書に「天保八酉 春寫 芙蓉樓

藏」とある。彩色あり。曲目を列記した挟み込み紙(260×

180)あり。

【曲目】鶯・伯藏主・末廣・清水鬼・業平餅・入間川・祐善・膏葉練・二人大名・雷・墨塗・鼻取角力・止動方角・書止しの不明曲・鞆猿・信貴山小謡。

2 能絵図 二軸

【形態】写本。巻紙。木箱入。

【書誌】紙高《一》390・《二》393。部分的に彩色あり。曲により装束に関する注記あり。奥書なし。

【曲目】《一》芦刈(前・切)・花筐(前・切)・龍田(前・切)・道成寺(切)・檜垣(前・切)・善界(前・切)・小督(前)・春日龍神(前・切)・白髭(前)・熊坂(前・切)・玉葛(前・切)。《二》三輪(前・切)・桜川(前・切)・鵜飼(前・切)・邯鄲・百万「水衣ニテも坪織ニテも」・賀茂(前・切)・箆(前)「尉ニテも水衣杖熨斗目」・切・羽衣(前)・小督(切)・白楽天(前・切)・巴(前・切)「ハツヒニテモ」・鉢木(切)「ハツヒ黒カシラクハカタ太刀」・梅枝(前・切)・羽衣(切)・柏崎(前・切)。

3 古面図 二冊

【形態】写本。袋綴仮綴半紙本。

【書誌】共表紙(236×164)。外題・内題なし。本紙は雲英入り半紙。墨付は順に二十九・二十二丁。田楽面、舞楽面、伎楽面、計八十八面の白描画。彩色、寸法、所蔵を注記するものもある。

4 文化十三年観世大夫清暘勸進能興行場所全図 一枚

【形態】版本。一枚物。

【書誌】299×856。二色刷。「文化十三丙子年秋閏八月上旬奉蒙／御免観世大夫秦清暘於江戸幸橋御門外／晴天十五日勸進能興行場所全図」と冒頭にある。左下に「真観」の丸型朱印あり。

5 『寶生大夫勸進能卷』 二巻

【形態】版本。卷子本。木箱入(305×147×85)。

【書誌】紙高265。題簽「寶生大夫勸進能卷 乾(坤)」。木箱蓋に「嘉永／元年」寶生大夫勸進能繪卷」と墨書あり。

齋藤月岑筆『弘化勸進能繪卷』の模写本。

6 歌川芳形筆「頼朝公館之図・鎌倉殿御能興行之図」一枚

【形態】 版本。一枚物。

【書誌】 373×147。「頼朝公館之図」(右)、「鎌倉殿御能興行之図」(左)。右紙の左下には「二震齋芳形画／越村屋平助板」、左紙左下には「芳形毫／越村屋平助板」とある。

7 『有聲樓画稿 能狂言人物画譜』 一冊

【形態】 版本。折本。

【書誌】 275×205。表紙に「西山完瑛先生遺編／有聲樓画稿／能狂言人物画譜」。奥付なし。表紙は西山芳園の「末広」。

【曲目】 完瑛「翁」・完瑛「野守」・完瑛「道成寺」・芳園「松風」・完瑛「狸々」・芳園「悪太郎」・芳園「三輪」・芳園「松風」・芳園「釣狐」・完瑛「朝猿」・完瑛「鉢木」・芳園「船弁慶」。

8 淡島椿岳『歌舞伎十八番の図』 十九葉

【形態】 版本。一枚物。

【書誌】 曲目】 刊年不明。暫・勸進帳・外郎売・矢の根・七つ面(297×181)。押戻・茶の湯の景清・蛇柳・解脱・不破・

鎌髭・嫩・鳴神・象引・牢破りの景清・毛抜・助六・不動・椿岳跋(298×184)。

9 野上豊一郎筆「月見座頭」色紙 一枚

【形態】 色紙。

【書誌】 271×241。右下に「白川生写(朱印)」、裏右下に「月見座頭」左上に「之ハ古川氏へ」とある。

10 野上豊一郎筆「葛城」色紙 一枚

【形態】 色紙。

【書誌】 272×240。左下に「昭和巳丑十月法政大学創設七十年佳節／為宮田君寫之／野上白川(陰刻・陽刻)」、裏右上に「能「葛城」」とある。

11 安倍能成筆「不迎春風莫附秋雨」 一軸

【形態】 掛軸。

【書誌】 本紙127.3×33.9cm。外寸204×46cm。「餘平生之志呈野上兄 昭和丙戌秋 能成 朱角印(陰刻) 朱角印(陽刻)」。

D 関連資料

1 『七小町』 一冊

【形態】写本。袋綴小本。

【書誌】茶色表紙(166×122)。左肩に長形八角形題簽「七小町」。墨付十二丁。一丁才に内題「七小町」、目録「草紙洗小町・

雨乞小町・通小町・関寺小町・卒都婆小町・鸚鵡小町・清水小町」。裏表紙裏に四角朱印「志葉満／都本町／浦久前」。
【内容】和歌を詠み込みつつ、小町物語をそれぞれ簡略にまとめたもの。

2 野上豊一郎写『神楽歌』 一冊

【形態】写本。仮綴野紙。

【書誌】249×168。表紙左に打込書外題「神楽歌 詳解」。内題「神楽歌 全」。不明の朱印角印あり。墨付五十九丁、遊紙八丁。挟み込み紙二枚。

3 万治元年武村市兵衛刊『醒睡笑』 一冊

【形態】版本。袋綴中本。

【書誌】薄茶色表紙(187×136)。題簽なし。内題「醒睡笑卷之七(八)」。墨付四十八丁。奥付に「右之本依誤多有之今改／令開板者也／万治元丁酉年正月吉日／二条通松屋町武

村市兵衛板」とある。

4 万延元年大阪書林三書房藏版『刪補和漢年契』 一冊

【形態】版本。袋綴半紙本。

【書誌】浅緑色表紙(255×178)。子持梓長形刷題簽「□補和漢年契」。表紙見返しに「萬延元年庚申新鑄／刪補和漢年契 全／大阪書林 三書房藏版」と刷る。遊紙二丁。序(一丁)、本文五十四丁。奥付に「発行書林 須原屋茂兵衛／須原屋伊八／山城屋佐兵衛／和泉屋金右衛門／岡田屋嘉七／出雲寺文治郎／紙屋惣右衛門／榎並屋小兵衛／近江屋平助／伊丹屋善兵衛」(住所は略す)。末丁裏に不明蔵書印あり。朱筆、赤ペン書込み多数あり。

5 寛政十年北村四郎兵衛ほか刊『逸號年表』 一冊

【形態】版本。袋綴半紙本。

【書誌】紗綾形模様茶色表紙(267×188)。子持梓長形刷題簽「逸號年表 完」。内題「逸號年表 左京 藤原貞幹 纂」。叙(一二丁半)、引用書目(二丁)、本文十二丁。奥付「寛政十年戊午初春発行／京城書肆／北村四郎兵衛／鶴鶴惣四郎／北村庄助」。

6 安永九年中野宗左衛門他刊『春日若宮御祭禮図』一冊

【形態】 版本。袋綴半紙本。

【書誌】 浅葱色表紙(258×181)。朱色子持梓長形刷題簽「春日若宮御祭禮図」(上)。「春日若宮御祭禮」(松下行列)「中」を左から上。

日若宮御祭禮図(上)。「春日若宮御祭禮」(松下行列)「中」を左から上。

下・中の順に貼り、次に「三百二十七番」と小型白色刷題簽。内題「春日大宮若宮御祭礼目錄圖あり」「○松之下渡り目錄」(十一月二十七日巻)。「○春日若宮御祭禮略記」。墨付

七十三丁。序(一丁)、跋(一丁)、遊紙(二丁)。奥付に「安永九年庚子五月吉日／京都書肆 寺町通五條上ル所 中野宗左衛門／南都書肆 東向中之町 中西藤七郎／西笹鋒町 岡本清右衛門」(岡本の部分は貼紙)。もと三冊だったものを各冊の間に遊紙を一丁挟み合綴。

永九年庚子五月吉日／京都書肆 寺町通五條上ル所 中野宗左衛門／南都書肆 東向中之町 中西藤七郎／西笹鋒町 岡本清右衛門」(岡本の部分は貼紙)。もと三冊だったものを各冊の間に遊紙を一丁挟み合綴。

E 明治以降の史料

1 下掛宝生流謡曲目録 三種

①「明治三十三年改正宝生英周」一枚物(241×332)同一枚。木版刷。紙質は異なる。内百番・外八拾番・四季名寄。②

「松山魚木盛然堂印行」一枚物(228×166)。内百番・外八拾番。野上豊一郎の書き入れあり。③「わんや江島謡曲書肆

発行」一枚物(315×231)同十枚。活版印刷。内百番・外八拾番。うち一枚は、緑色○印「入門後承諾濟稽古之分」赤色●印「初伝免状奥之部(乱曲、語ハ略ス)」の印が付され、「野上」の朱印三文判あり。

2 謡本正誤(下掛宝生流謡本) 一枚

【形態】 一枚物(273×390)。両面刷。刊記なし。

3 下掛宝生会関連資料 二点

①内容及規約(一冊)袋綴仮綴(202×139)。三枚。ガリ版刷り。創立発起人に野上豊一郎の名が見える。②下掛宝生会謡本

払込通知票・払込票(六枚)。

4 『遊楽習道風見』タイプ印刷 四枚

【形態】 タイプ印刷。仮綴。

【書誌】 286×202。袋綴三枚、一枚物一枚。青字。

5 『世阿弥著作異本一覽(「世阿弥全集」資料)』一冊

【形態】 謄写版刷。ホチキス止め。

【書誌】 255×183。「昭和三十三年二月二十七日／東楽研究所

発行」一枚物(315×231)同十枚。活版印刷。内百番・外八拾番。うち一枚は、緑色○印「入門後承諾濟稽古之分」赤色●印「初伝免状奥之部(乱曲、語ハ略ス)」の印が付され、「野上」の朱印三文判あり。

／顧問会にて発表」と書入れあり。

F 番組

- 1 黒川能能組 一枚
 (明治43年4月1・2日、於靖國神社能樂堂)
- 2 内藤鳴雪翁古稀祝賀会 番組一枚・招待状二枚
 (大正6年4月14日、於靖國神社能樂堂)
- 3 漱石先生追善誦会 三枚
 (大正6年6月16日、於西神田俱樂部)
 ※野上豊一郎〈湯谷〉ツレ、〈山姥〉シテ
- 4 第十三回和泉流狂言後援会番組 一枚
 (大正6年12月18日、於九段能樂堂)
- 5 宝生俱樂部演能会番組 一枚
 (大正7年2月3日、於靖國神社境内能樂堂)
- 6 囃子方演能会番組 一枚
 (大正7年11月10日、於靖國神社境内能樂堂)
- 7 喜多会番組 (大正7年2月17日) 一枚
- 8 宝生会月並能組 番組一枚・解説一枚
 (大正7年2月24日)
- 9 細川家舞台開能番組 一枚
- 10 細川家舞台開能番組 一枚
 (大正7年4月18日)
- 11 江別夏目両家結婚披露宴余興番組 一部
 (大正7年4月20日)
- 12 美音会第七十六回演能番組 一枚
 (大正8年11月21日、於巢地精養軒) ※長唄と落語。
- 13 金春会第十六回演能 一枚
 (大正9年5月14日、於靖國神社能樂堂)
- 14 金剛右京舞台披御披露能 番組一枚・挨拶状一枚
 (大正11年11月18・19日、於赤坂区表町三丁目八番地)
- 15 下掛宝生会東條照映氏追善誦会案内・番組 一枚
 (大正11年12月7日、於能樂会舞台)
- 16 櫻間金太郎後援会主催能組 一枚
 (大正15年7月10日、於細川家舞台)
- 17 金春会第三十三回演能
 (昭和3年10月7日、於細川家舞台)
- 18 能樂囃子科協議会主催囃子組 一部
 (昭和5年4月19日、於九段能樂堂)
- 19 下掛宝生流第三回半歌仙素誦会案内往復葉書 一枚

- (昭和7年8月4日、於能樂会)
- 20 下掛宝生流第四回半歌仙素謡会案内往復葉書 一枚
(昭和8年8月24日、於日本橋俱樂部)
- 21 金春会第百拾七回例会演能番組葉書招待券 一枚
(昭和19年12月3日、於細川家能樂堂)
- 22 金春会第百拾七回例会演能番組付会員券 一枚
(昭和19年12月3日、於細川家能樂堂)
- 23 宝生新追善能附下掛宝生会発会式番組 一部
(昭和22年5月30日、於三越劇場)
- ※能の前に安倍能成・野上豊一郎の「講演」あり。
- 24 霞会別会番組 葉書一枚
(昭和25年11月23日、於福田屋)
- ※〈俊寛〉野上彌生子(シテ)
- 25 下懸宝生会能番組・解説 一枚
(昭和27年4月12日、於水道橋能樂堂)
- ※野上彌生子「解説」執筆
- 26 下懸宝生会能番組 一枚
(昭和27年10月1日、於水道橋能樂堂)
- 27 下懸宝生会能番組・解説 一枚
(昭和28年3月7日、於水道橋能樂堂)
- ※野上彌生子「解説」執筆
- 28 霞会番組 一枚
(昭和28年6月21日、於水道橋能樂堂)
- 29 松本謙三師28年度芸術祭奨励賞記念謡会番組 一枚
(1月30日、於福田家) ※〈草紙洗〉野上彌生子(シテ)
- 30 下懸宝生会能番組・解説 一枚
(昭和29年3月7日、於水道橋能樂堂)
- ※野上彌生子「解説」執筆
- 31 下掛宝生会能番組・解説 一枚
(昭和29年9月19日、於水道橋能樂堂)
- 32 下掛宝生会能組・解説 一枚
(昭和30年4月16日、於水道橋能樂堂)
- ※野上彌生子「解説」執筆
- 33 櫻間弓川関寺小町鑑賞会番組 一枚
(昭和30年10月1日、於水道橋能樂堂)
- 34 故宝生新十三回忌追善能組 番組 二枚・解説 一冊
(昭和31年5月27日、於水道橋能樂堂)
- ※野上彌生子「解説」執筆
- 《年不明分》
- 35 有志主催野上豊一郎博士帰朝歓迎謡会番組 一枚

(1月10日、於山の茶屋)

※〈鉢木〉野上豊一郎(シテ)

36 祝戦捷之新春霞会発会番組 一枚

(1月31日、於山の茶屋〔山王山内〕)

※〈弱法師〉野上豊一郎(ワキ)。昭和13年か。

37 祝戦捷之春霞会初会番組 一枚

(1月30日、於山の茶屋〔山王山内〕)

※〈藤戸〉野上豊一郎(ワキ)

38 霞会謡の会初会番組 一枚

(2月13日、於山の茶屋〔山王山内〕)

※〈鉢木〉野上豊一郎(ワキ)

39 故野上豊一郎君追善能番組・解説 各一枚

(2月17日、於水道橋能楽堂)

※野上彌生子「解説」執筆、安倍能成補。

40 霞会十番素謡会番組 一枚

(9月20日、於山の茶屋〔山王山内〕)

※〈葵上〉野上豊一郎(ワキ)

41 宝生会演奏番組月並能組・素謡

(月並能…3月8日、於靖国神社能楽堂。素謡…3月5・

19日、於丸ノ内報知新聞社講堂)

42 乱能番組 一枚

(4月18日火曜、於細川家御舞台)

43 故野島泰次郎氏・故河東碧梧桐氏追善素謡会 一枚

(12月6日、於山の茶屋〔赤坂、山王山内〕)

※〈小原御幸〉野上豊一郎(シテ)

七、写真・フィルム

《写真》

1 東大寺所蔵「伎楽面」 五枚

2 奈良博物館陳列「舞楽面」 五枚

3 法隆寺蔵「御物 木彫還城楽面」 一枚

4 広島県世羅郡甲山町丹生神社宝物「獅子頭」 三枚

5 福井県武生町大寶寺蔵「木造存應和尚坐像」 一枚

6 金沢市西町尾山神社能面 五枚

7 善光寺蔵能面 六枚

8 上杉家伝来「小面」伝籠右衛門(永井恒澄極) 一枚

9 上杉家伝来「鼻瘤悪尉」 一枚

10 細川家蔵「中将」(作者不明) 一枚

11 細川家蔵「邯鄲男」(作者不明) 一枚

12 細川家蔵「般若」(般若坊作) 三枚

13 梅若景昭氏蔵「半蛇(盤蛇)」二枚

14 茂山忠三郎氏蔵「武悪」二枚

15 O・ラファエル氏蔵行道面・狂言面「ヲレウ」二枚

16 「曲見」(河内作) 三枚

「武州於江戸寛永十六年二月吉日井関河内大掾源家重」

17 野上豊一郎編『能面』(岩波書店) 用の写真

①袋入(六十一枚) ②箱入(九十一枚) ③バラ(五枚)

18 能面 十四枚

河内作「三光尉・小面・大飛出・大癡見・般若」、是閑作「増」、

赤鶴作「小癡見・小飛出」、作不知「平太・山姥・狸々・

大神」、「般若」(298×245)。「孫次郎」(220×152)。「小面」

(164×121)。

19 海外の仮面 三十二枚

南洋の仮面(三枚) New guinea (Field Museum 二枚) 、

mask of a comic ancient (BRITISH MUSEUM 二枚) 、

Baliのダンス(四枚) Jawaの仮面(二十一枚)。

20 川口謡会(昭和21年春) 二枚

21 舞姿人形 一枚

22 アルバム 十二冊

①西洋彫刻(1) ②西洋彫刻(2) ③エジプトの美術④

未使用アルバム⑤能面集(一〜七) 七冊⑥狂言面集

《フィルム》

23 卒塔婆小町フィルム 二本(昭和38年4月13日)

八、原稿

本節には原稿を収めた。「」で括った題は原稿にある題

または書き出しの文章で、括らなかつたものは仮に付した

題である。

1 『能百句』 九枚

四〇〇字詰原稿用紙。『能百句』(能楽書林、昭和22年)

の原稿。岩波書店の袋入り、表に「父さまの原稿/能百

句原稿」と赤鉛筆書きあり。

2 『能句』 七枚

二〇〇字詰原稿用紙二枚、二六〇字詰原稿用紙五枚。

3 『能句』 五枚

二〇〇字詰原稿用紙(岩波書店)。

4 『エジプトの驚異』凸版挿絵 四枚

『エジプトの驚異』(要書房、昭和23年11月)の挿絵。

5 『序』 八枚

四〇〇字詰原稿用紙。『観阿弥清次』(要書房、昭和24年

5月)の「序」原稿。

6 「カタリ」 六十一枚

四四〇字詰原稿用紙(観世流正本)。「カタリ考」『市河博士還暦祝賀論文集』第四輯(研究社、昭和24年12月)の原稿。

7 「山伏行状記」 七十四枚

四〇〇字詰原稿用紙。能楽研究所編『太郎冠者・山伏行状記』(檜書店、平成14年)所収。

8 「能の演出」 一〇一枚

三部に分けて仮綴。①四〇〇字詰原稿用紙(日本学術振興会第十七小委員会) 二十七枚、②①と同三十四枚、③四〇〇字詰原稿用紙(岩波書店) 四〇枚。『能の話』(岩波書店、昭和15年)の原稿。

9 未完原稿 二九〇枚

①「第三章 能楽の背景 一、思想及社会」六八枚②「四、謡曲の宗教意識」二十七枚③「五、世相と人倫」五十七枚④「第四章 能楽の発生及び展開」計五十二枚(四〇〇字詰原稿用紙(日本学術振興会第十七小委員会) 二十三枚、四〇〇字詰原稿用紙二十九枚⑤「第五章 能楽と後進芸術との関係」四〇〇字詰原稿用紙五十九枚。

10 「文学としての謡曲」 六〇枚

四〇〇字詰原稿用紙(日本学術振興会第十七小委員会)

11 「謡曲」 二十二枚

四〇〇字詰原稿用紙二〇枚、二〇〇字詰原稿用紙二枚

12 「が謂はゆる加茂の神秘」 二十八枚

四〇〇字詰原稿用紙(市河博士還暦祝賀論文集)

13 「謡曲の標題」 五〇枚

四四〇字詰原稿用紙(観世流正本)

14 梅若万三郎の〈三輪〉誓納について 三枚

二〇〇字詰原稿用紙(松屋製)

15 「俊寛」解説 四枚

四〇〇字詰原稿用紙(日本学術振興会第十七小委員会)

16 「遊行柳」 五枚

二〇〇字詰原稿用紙(財団法人・大蔵財務協会)。封筒入り、表書き「十二月催能解説在中」。

17 「鳥追舟」 四枚(二〇〇字詰原稿用紙) 曲目解説。

18 「棒縛」 一枚(二〇〇字詰原稿用紙) 曲目解説。

19 「狂言の分類」 五枚(二六〇字詰原稿用紙)

20 能についての概説 三枚

四〇〇字詰原稿用紙(岩波書店) 一枚、断簡二枚

- 21 「世界の假面」 十三枚 (四〇〇字詰原稿用紙)
- 22 「能面の美は…」 二枚 (四〇〇字詰原稿用紙)
- 23 「楽士行進・双楹塚玄室天井模様」 各一枚
二〇〇字詰原稿用紙 (松屋製)
- 24 『風姿花伝』について 二枚 (二〇〇字詰原稿用紙)
- 25 「今年今月…」 一枚 (二〇〇字詰原稿用紙断片)
- 26 聖女カテリナについて 六枚 (二〇〇字詰原稿用紙)
- 27 「そして又、母親…」 九枚半 (四〇〇字詰原稿用紙)
- 28 フランク・ヴェーデキント関連 八枚
①手紙メモ 罫紙 (245×378) 二枚。② Frank Wedekind 『Frühlings Erwachen』 REQUEST FOR PERMISSION TO PUBLISH 一枚 (同白紙一枚) ③ 翻訳発行企画届『春の目ぐめ』 (学陽書房) 一枚 (同白紙一枚)
- 29 「WILLIAM COWPER」 三枚
B 4 版藁半紙。ピン止め。タイプ印刷。
- 30 「PASSAGES FROM COWPER」 三枚
B 4 版藁半紙。ピン止め。タイプ印刷。
- 31 Henry Vaughan 関連 三枚
B 4 版藁半紙。ピン止め。タイプ印刷。「THE RETREAT」 「PEACH」 「Cuntry Places」
- 32 「HENRY VAUGHAN」 八枚
B 4 版藁半紙。ピン止め。タイプ印刷。
- 33 「BASHO」 十五枚
藁半紙 (361×263)。ホチキス止め。タイプ印刷。
- 34 「Introduction to TOMOE」 九枚
薄紙 (299×228)。クリップ止め。青字タイプ印刷。
- 35 「Introduction to TOSEN」 十五枚
藁半紙 (308×216)。ホチキス止め。タイプ印刷。
- 36 「Introduction to SHICHI-KI OCHI」 十四枚
藁半紙 (308×216)。ホチキス止め。タイプ印刷。
- 37 「Introduction to HACHI-NO-KI」 二十三枚
藁半紙 (308×216)。ホチキス止め。タイプ印刷。
- 38 「Introduction to TADANORI」 八枚
薄紙 (299×228)。クリップ止め。青字タイプ印刷。
- 九、ノート
1 米沢上杉家能面装束他ノート 一冊 (210×150)
外題「昭和十七年／吉川家車屋本／狂言面／車屋本 (吉川本)／米沢上杉家能面装束」。西野春雄氏「上杉家の能面―野上ノートの紹介を中心に―」 (『能楽研究』

二五、二〇〇一)がある。

2 「百番詠句」一冊(201×155)

内容は句繕、観能スケッチなど。

3 「Egypt」一冊(211×151)

外題「Egypt / Pyramid / Sphinxes / Mastabas / Tombs」。

4 学用ノート 一冊(257×183)

外題なし。観能スケッチや「次第考」(『文学』14巻第6号、昭和21年)のための登場小段調査メモ。

5 「Egyptian art」一冊(263×208)

6 「△クセ △一声 / 文学の形態と展開」一冊(263×208)

十、書簡

1 豊一郎宛大城多吉郎葉書 一葉

昭和7年6月10日消印、一銭五厘切手、(住所) 東京市外日暮里渡邊町。

2 豊一郎宛小林勇葉書 一葉

昭和11年3月2日消印、一銭五厘葉書、(住所) 荒川区日暮里渡部町。

3 野上茂吉郎・耀三宛豊一郎葉書 一葉

昭和12年10月27日消印、貳銭葉書、(住所) 荒川区日暮里荒川区日暮里渡部町。

4 豊一郎宛観世編集部葉書 一葉

昭和17年1月20日消印、貳銭葉書、(住所) 荒川区日暮里町。

5 高平始・久木崎時義訃報葉書 一葉

昭和17年10月13日付。

6 茂吉郎宛豊一郎書簡 法政大学便箋五葉

年月日不明、戦中の内容で「四月二日未明の空襲…」とある。

7 野上茂吉郎宛豊一郎葉書 一葉

昭和2?年月日不明消印、二銭葉書、(住所) 群馬県吾妻郡北軽井沢大学村。

8 茂吉郎宛豊一郎葉書 一葉

昭和21年5月15日消印、五銭葉書、(住所) 世田谷区成城。

9 豊一郎・弥生子宛坂部重義訃報 一葉

昭和21年10月18日消印、拾銭・五銭切手、(住所) 長野県軽井沢町北軽井沢大学村。

10 茂吉郎宛豊一郎葉書 一葉

年不明11月26日、五銭葉書、(住所) 世田谷区成城町。

11 野上正子宛豊一郎葉書 一葉

昭和27年12月16日、五錢葉書、(住所) 世田谷区成城町。

12 弥生子宛宝文会御案内 一葉

昭和29年12月1日消印、昭和29年12月5日開催の高浜虚子文化勲章授賞御祝案内、(住所) 世田谷区成城町。

13 弥生子宛安倍能成葉書 一葉

昭和38年7月18日消印、五円葉書、(住所) 群馬県北軽井沢。

14 弥生子宛川崎勝子書状 二通

① 1月24日付、川崎勝子著『おもかげ 九淵閑話』昭和36年12月刊行(十三A 146)の添状であるので昭和37年と
② 昭和37年4月2日消印。
思われる。

15 弥生子宛北野克刊行挨拶文 一葉

昭和40年4月天皇誕生の日付。『拾遺集北野本』(十三A 147)の添状。

《年不明分》

16 豊一郎宛友岡等葉書 一葉

7月21日、一錢五厘、(住所) 東京市外日暮里渡邊町。

17 豊一郎宛野上燿三葉書 一葉

8月2日、一錢五厘葉書、(住所) 群馬県吾妻郡北軽井

沢法政大学村。

18 豊一郎宛安倍能成平壤より葉書 一葉

2月26日消印、貳錢切手、(住所) 荒川区日暮里渡辺町。

19 豊一郎宛今泉英夫葉書 一葉

27日消印、拾銭・五錢切手、(住所) 世田谷区成城町。

20 鹿子木員信支那駐屯地軍司令部附挨拶状 一葉

1月12日付。

21 豊一郎宛野々村芥叟書状 一通

3月23日付。

22 畑耕一宛豊一郎書状 二枚

11月15日付、法政大学用箋、学生演劇会開催の案内。

23 豊一郎宛古川久書状 一葉

3月9日付。

24 豊一郎筆独文手紙 三枚

野上の出した手紙への返書に対しての返書下書き。翻訳
についての内容で、遅くとも七月初めまでには出版予定
の旨を記す。フランク・ヴェーデキント宛か。

十一、メモ

1 絵図メモ 五点

①能面画・能面リスト（罫紙二枚）②一角仙人面画（一枚。210×134）③人物画（二枚。一六〇字詰原稿用紙裏と罫空押便箋断簡）④女面画メモ（松屋製二〇〇字詰原稿用紙一枚）⑤挿絵〈唐船〉楽（一枚。66×105。刷物）

2各種リスト 十点

①「能楽修正案」（松屋製二〇〇字詰原稿用紙一枚）②曲目メモ（封筒の裏一枚）③曲目と流儀（松屋製二〇〇字詰原稿用紙三枚）④曲目・作者・舞事・働事について（427×332。一枚）⑤曲名メモ（原稿用紙断片一枚）⑥曲名メモ（法政大学便箋一枚）⑦原稿題目リスト（国際文化振興会原稿用紙表紙一枚）⑧野口米次郎著「[THE YOKYOKUKAI] 題目抜書（法政大学便箋一枚。『謡曲界』大正五年七月〜六年八月）⑨「車屋本目錄（元加藤嘉明本）」（中央公論社二〇〇字詰原稿用紙三枚）⑩能面リスト「十六年七月一日吉川元二貸」（東京文房堂製二〇〇字詰原稿用紙一枚）

3稽古メモ 十三点

①〈鉢木〉「語り」節付（松屋製二〇〇字詰原稿用紙一枚）②〈鉢木〉（道行）節付（二〇〇字詰原稿用紙一枚）③〈清経〉節付（岩波書店二〇〇字詰原稿用紙一枚）④〈隅田川〉

詞章抜書（短冊状八枚）⑤〈歌占〉キリ節付（国際文化振興会三〇〇字詰原稿用紙一枚）⑥〈実盛〉「語り」〔上ゲ歌〕（法政大学便箋一枚）⑦〈狸々〉節付（松屋製二〇〇字詰原稿用紙一枚）⑧「あまのおんぶねに」節付（罫紙一枚）⑨〈羽衣〉クセ（二〇〇字詰原稿用紙五枚）⑩「野宮（うたひ方）宝生新」（一七〇字詰原稿用紙仮綴十枚）⑪狂言小謡（松屋製二〇〇字詰原稿用紙二枚）⑫小鼓手組（国民新社一四四字詰原稿用紙一枚）⑬各役籍（松屋製二〇〇字詰原稿用紙一枚）

4その他のメモ 六点

①「△ワキ宝生皆伝の家…」（能楽書院二〇〇字詰原稿用紙四枚）②法名「寶承院鷗叟妙音日新大居士」（185×33）③「遊狂といふことば…」（岩波特製二〇〇字詰原稿用紙一枚）④「カタリりの省略した分」（四〇〇字詰原稿用紙一枚）⑤『逸号年表』について（法政大学便箋一枚）⑥「嘗つて、共通な人間の言葉が…」（横書罫紙一枚）

十二、その他

1納入書 一枚

大塚巧芸社から岩波書店宛。野上先生方御届。昭和9年

- 11月2日。観世様出張能面（カヒネ原板十八枚、カヒネ焼付各二枚宛三十六枚）
- 2九州帝国大学第二回臨時講義時間割通知書 二枚
昭和18年1月19日付。「文学概論」2月18～23日。
- 3野上講師「文学概論」臨時講義時間割 一枚
第二回11月4日～11日。
- 4法政大学文学部学科担任表 四枚
法政大学用箋。昭和19年10月。
- 5日本私学団体総連合関連資料 四点
①私立大学連合会臨時総会出席者名簿（昭和22年3月3日、於日本大学本部）二枚②加入票一枚③事務局組織一覧表（案）一枚④日本私学団体総連合会則四枚
- 6法政大学航空研究会、新入会員募集チラシ 一枚
- 7法政大学創立七拾年記念ベルトバックル 一点
- 8「元禄時代の部 能勢担当分」一冊
- 9「一茶の句 追加」二部
10「英訳 一茶の句」八枚
- 11絵葉書 二十五枚
神泉苑大念仏狂言（四枚）、日光輪王寺蔵古面（一枚）、第二回国宝舞楽面（其二）東京帝室博物館（六枚）
- BRITISH MUSEUM「MASKS FROM CEYLON」（1枚）・解説（1枚）
BRITISH MUSEUM「MASKS AND PUPPETS FROM JAVA」（四枚）・解説（1枚）
Field Museum「WOODEN MASK」（1枚）
「神泉苑大念仏狂言」（五枚）
- 12檜書店昭和四十二年カレンダー 一冊
- 13丸岡出版社の封筒 一枚
雑誌切抜を入れていた封筒。表に論題の書き入れあり。
- 14丸岡明名刺 一枚
- 15石膏「能面 翁」長谷川抱玄高作 一点
- 16能木彫り人形 七体
- 17木彫置物「福之神」（龍山作） 一点
- 18張り扇 二本
- 19扇の地紙 五枚
- 20扇子「大同無少長 法政大学／野上豊一郎」 一本
- 21野上弥生子読売文学賞記念硯 一点
- 22朝鮮古代箱 一点
弥生子筆メモ付「朝せん古代箱／父さまが岩波氏と／旅行した際に買ったもの」とある。
- 23懐中時計 一点

箱蓋裏「この時計は父さまが／法政から二十五年以上／つとめた人々が貰ふ規／則によつて貰つたもの／である。たしかお亡くなり／になる一二年まへと／思ふ」に弥生子氏の覺書あり。

24 夏目先生木彫りマスク 一点

木箱入。右頭頂部「夏目漱石君」、左頭頂部「慶応三年一月五日生／大正五年十二月九日亡」、左側面「新海竹太郎脱型」、裏「生誕百年記念／夏目漱石展／昭和四十一年一月／朝日新聞社」(金泥埋込)。

十三、活字本

A和書

- 1 『能画図式』河鍋曉齋筆。小林文七他。明治20年。
- 2 『謡曲通解』第一～八卷。大和田建樹編。博文館。明治25年。
- 3 『堺秘鑑』第一卷。寺田兵次郎編。明治28年。
- 4 『俗楽旋律考』上原六四郎著。金港堂。明治28年。
- 5 『神楽催馬楽通解』今井彦三郎著。古今文学会。明治33年。
- 6 『縮写 集古十種 第一卷 楽器之部附図説』吾妻健三郎著。東陽堂。明治35年。

- 7 『能楽百話』廣田花月編。椀屋江島書店。明治36年。
- 8 『能の栞』二～六の巻。大和田建樹著。博文館。明治36・37年。

9 『歌舞音楽略史』上・下。小中村清矩著。明治書院。明治36年。

- 10 『謡曲五十餘年』小關亨著。能楽館。明治38年。
- 11 『舞楽図 左』高島千春著。吉川弘文館。明治38年。
- 12 『舞楽図 右』北爪有郷著。吉川弘文館。明治38年。
- 13 『謡曲と狂言』友常太平著。椀屋江島書店。明治40年。
- 14 『四流対照 謡曲二百番』上・中・下巻。芳賀矢一著。金港堂書籍。明治41・42年。
- 15 『世阿弥十六部集』吉田東伍校註。能楽会。明治42年。
- 16 『謡曲手引集』中澤銚丸著。わんや江島伊兵衛。明治42年。
- 17 『狂言全集』国民文庫刊行会。明治43年。
- 18 『頭註華傳書』謡曲叢書第一編。丸岡桂校註。観世流改訂本刊行会。明治44年。
- 19 『観世流改訂謡本別巻』丸岡桂著。観世流改訂本刊行会。明治45年(四版)。
- 20 『新謡曲百番』佐佐木信綱著。博文館。明治45年。
- 21 『宴曲十七帖附謡曲未百番』吉田東伍・野村八良校訂。

- 国書刊行会。大正元年。
- 22 『謡曲二百番謡ひ鑑』前・後篇。井上頼国・近藤正一著。博文館。大正2・3年。
- 23 『音曲玉洩集』大和田建樹編。江島伊兵衛。大正2年。
- 24 『能の琴』一の巻。大和田建樹著。博文館。大正3年(三版)。
- 25 『観世流謡本出版年譜』丸岡桂編。大正3年。
- 26 『能楽古典禪竹集』吉田東伍校注・池内信嘉編。能楽会。大正4年。
- 27 『歌舞音曲考説』高野辰之著。六合館。大正4年。
- 28 『舞正語磨』上。石川巖編。珍書保存会。大正7年。
- 29 『舞正語磨』中・下。石川巖編。珍書保存会。大正7年。
- 30 『大正八年度うたひ日記』わんや謡曲書肆。大正8年。
- 31 『能面大観』上・中・下・序巻。齋藤芳之助著。能楽書院。大正9・10年。
- 32 『謡番組作成示針』山崎楽堂著。わんや書店。大正13年。
- 33 『幸流小鼓手附』天之巻(上下)・地之巻(上下)・人之巻。三須平司著。わんや書店。大正13年〔改訂四版〕。
- 34 『能楽盛衰記』上・下巻。池内信嘉著。能楽会。大正14・15年。
- 35 『謡曲寶典三部鈔』謡曲講座臨時増刊号。齋藤芳之助編。
- 謡曲講習会。大正15年。
- 36 『謡曲と元曲』七理重恵著。積文館。大正15年。
- 37 『観能之豫備知識』山崎楽堂著。わんや書店。大正15年。
- 38 『エジプトの芸術』アルス美術叢書21。一氏義良著。アルス。昭和2年。
- 39 『謡曲百番』日本古典全集。第一〜四。与謝野寛・正宗敦夫・与謝野晶子編。日本古典全集刊行会。昭和2・3年。
- 40 『新訂舞楽圖説』左・右大槻如電著。六合館。昭和2年。
- 41 『謡曲三百五十番集』日本名著全集。江戸文芸之部第二十九巻。日本名著全集刊行会。昭和3年。
- 42 『支那劇』崑曲と韓世昌』石田貞蔵編。中日文化協会。昭和3年。
- 43 『節付音譜並三味線譜入』お月さま・起上り小法師・蟲の聲・兎と亀・明の鐘』山田舜平著。昭和4年。
- 44 『埃及美術史』石山徹郎著。中央出版社。昭和4年。
- 45 『原始民族假面考』南江二郎著。地平社書房。昭和4年。
- 46 『幸流小鼓手附本』三須平司著。わんや書店。昭和5年〔改訂八版〕。
- 47 『謡曲と川柳』安藤玄怪坊・岡田三面子著。春陽堂。昭和5年。

- 48 『能楽古今記』野々村戒三著。春陽堂。昭和6年。
- 49 『近世戯曲史論』岩波講座日本文学第七回配本。守隨憲治著。岩波書店。昭和6年。
- 50 『観世宗家蔵版花伝第六花修』能楽資料第一編。能楽研究室編。能楽資料頒布会。昭和6年。
- 51 『花伝第六花修』能楽資料第一編附録。能楽研究室編。能楽資料頒布会。昭和6年。
- 52 『狂言集成』野々村戒三・安藤常次郎編。春陽堂。昭和6年。
- 53 『能謡語彙』観世流改訂本刊行会編・発行。昭和6年。
- 54 『日本の能楽』新時代学芸叢書第二輯。イエーツ著。長澤才助訳。雄文閣。昭和7年。
- 55 『金剛流謡曲全集』金剛右京著。檜書店。昭和7年。
- 56 『能楽古面集』恩賜京都博物館。京都原色版印刷社。昭和7年。
- 57 『金剛流謡曲全集』金剛右京著。檜書店。昭和7年。
- 58 『観世宗家蔵版五音 上下』能楽資料第二編前編。能楽研究室編。能楽資料頒布会。昭和7年。
- 59 『観世宗家蔵版五音ぬき書 上下／音曲之内二六の大事』能楽資料第二編後編。能楽研究室編。能楽資料頒布会。昭和7年。
- 60 『御世話筋秘曲』能楽史料第一編。坂元雪鳥編。わんや書店。昭和8年。
- 61 『隣忠見聞集』能楽史料第二編。坂元雪鳥編。わんや書店。昭和8年。
- 62 『近畿能楽記』野々村戒三著。大岡山書店。昭和8年。
- 63 『能楽史料』第一輯。小林静雄編。大岡山書店。昭和8年。
- 64 『能と歌舞伎』小宮豊隆著。岩波書店。昭和10年。
- 65 『室町能楽記』小林静雄著。檜書店。昭和10年。
- 66 『狂言舞謡集』野々村戒三編。謡曲界出版部。昭和10年。
- 67 『豊高日記』能楽史料第三編。坂元雪鳥編。わんや書店。昭和10年。
- 68 『謡曲芸術』日本趣味芸術叢書。野上豊一郎著者代表。成美堂書店。昭和11年。
- 69 『謡曲名作十六番輯釋』野々村戒三著。早稲田大学出版部。昭和11年。
- 70 『重修装束圖解服制通史』關根正直著。林平書店。昭和12年〔再版〕。
- 71 『隣忠秘抄』能楽史料第四編。坂元雪鳥編。わんや書店。昭和12年。

- 72 『能面解説』野上豊一郎著。岩波書店。昭和12年。二冊。
- 73 『能楽源流考』能勢朝次著。岩波書店。昭和13年。
- 74 『能苑日涉』野々村戒三著。檜書店。昭和13年。
- 75 『草衣集』野上豊一郎著。相模書房。昭和13年。
- 76 『花鏡』椎園第三輯(別刷)。川瀬一馬編。昭和13年。
- 77 『学生の為めの謡曲の鑑賞』小林静雄著。興文閣。昭和14年。
- 78 『能楽研究』能勢朝次著。謡曲界発行所。昭和15年。
- 79 『能と能面』金剛巖著。弘文堂書房。昭和15年。
- 80 『世阿弥元清』創元選書2。野上豊一郎著。創元社。昭和15年〔第三刷〕。
- 81 『世阿弥十六部集評釈』上。能勢朝次著。岩波書店。昭和15年。
- 82 『謡曲作者の研究』小林静雄著。丸岡出版社。昭和17年。
- 83 『能楽全書』第二・三卷。矢部良策編。創元社。昭和17年。
- 84 『中世の社寺と芸術』森末義彰著。畝傍書房。昭和17年。
- 85 『謡曲盆樹記』錢稻孫訳。北京近代科学図書館。昭和17年。
- 86 『能楽全書』第一・四卷。小林茂編。創元社。昭和18年(二・初版)。
- 87 『幸若舞曲集』序説・本文。笹野堅著。第一書房。昭和18年。
- 88 『世阿弥』小林静雄著。檜書店。昭和18年。
- 89 『壬生大念佛』田中緑紅著。壬生寺事務所。昭和18年。
- 90 『世阿弥自筆傳書集』川瀬一馬校。わんや書店。昭和18年。
- 91 『古本能狂言集』一。笹野堅。岩波書店。昭和18年。
- 92 『能面検討』入江美法著。春秋社松柏館。昭和18年。
- 93 『日本假面史』野間清六著。藝文書院。昭和18年。
- 94 『能楽史話』野々村戒三著。春秋社松柏館。昭和19年。
- 95 『幽玄論』能勢朝次著。河出書房。昭和19年。
- 96 『能楽全書』第六卷。矢部良策編。創元社。昭和19年。
- 97 『車屋本之研究』江島伊兵衛著。鴻山文庫。昭和19年。
- 98 『わんや蔵版花鏡』川瀬一馬編。わんや書店。昭和19年。
- 99 『わんや蔵版能本七番附目録書状』川瀬一馬編。わんや書店。昭和19年。
- 100 『能楽全書』第五卷。小林茂編。創元社。昭和19年。
- 101 『能楽新來抄』土岐善麿著。甲鳥書林。昭和19年。
- 102 『能面論考』野上豊一郎著。小山書店。昭和19年。
- 103 『世阿弥十六部集評釈 下』能勢朝次著。岩波書店。昭和19年。
- 104 『物語と語り物』飛鳥新書。柳田国男著。角川書店。昭和21年。

- 105 『太郎冠者行状』日本叢書61。野上豊一郎著。生活社。昭和21年。
- 106 『狂言藝談 野村万蔵聞書』日本叢書97。古川久著。生活社。昭和21年。
- 107 『謡曲鑑賞』野上豊一郎著。目黒書店。昭和21年。
- 108 『世阿弥元清』創元選書2。野上豊一郎著。創元社。昭和21年〔七版〕。
- 109 『芭蕉・世阿弥・秘傳・勘』小宮豊隆著。白日書院。昭和22年。
- 110 『エジプト史』岡島誠太郎著。平凡社。昭和22年〔再版〕。
- 111 『能楽の鑑賞』ブックレット第八編。野口米次郎著。富書店。昭和22年。
- 112 『シェバの女王』野上豊一郎著。東京出版。昭和22年。
- 113 『能百句』野上豊一郎著。能楽書林。昭和22年。
- 114 『大臣柱』野上豊一郎著。能楽書林。昭和22年。
- 115 『をどりの小道具』小寺融吉著。能楽書林。昭和23年。
- 116 『エジプトの驚異』野上豊一郎著。要書房。昭和23年。
- 117 『延年資料その他』本田安次著。能楽書林。昭和23年。
- 118 『櫻間藝談』櫻間金太郎著。わんや書店。昭和23年。
- 119 『能の演出研究』三宅襄著。能楽書林。昭和23年。
- 120 『狂言の研究』古川久著。福村書店。昭和23年。
- 121 『能 研究と発見』野上豊一郎著。岩波書店。昭和23年〔第七刷〕。
- 122 『校註謡曲狂言新選』古川久著。武蔵野書院。昭和23年。
- 123 『ガリヴァの旅』梶文庫3。野上豊一郎著。小山書店。昭和23年。
- 124 『花傳書研究』野上豊一郎著。小山書店。昭和23年。二冊。
- 125 『能楽雑叢』安倍能成著。齋藤書店。昭和23年。
- 126 『能楽の鑑賞』田中允著。紫乃故郷舎。昭和24年。
- 127 『謡曲集 上』日本古典全書。野上豊一郎解説・田中允校註。朝日新聞社。昭和24年。二冊。
- 128 『宝生新自伝』宝生新著・野上豊一郎編。能楽書林。昭和24年。二冊。
- 129 『観世流百番集』観世流改訂本刊行会著。能楽書林。昭和24年。
- 130 『観阿弥清次』野上豊一郎著。要書房。昭和24年。
- 131 『バーナード・シヨ』野上豊一郎著。東京堂。昭和24年。
- 132 『校註 花傳書』川瀬一馬著。わんや書店。昭和24年。
- 133 『観世流謡曲百番集』観世左近著。檜書店。昭和25年。
- 134 『能の再生』野上豊一郎著。岩波書店。昭和25年〔第二刷〕。

- 135 『中世歌謡集』 日本古典全書。浅野健二校註。朝日新聞社。昭和26年。
- 136 『矢野龍溪』 中根貞彦著。三豫人社。昭和29年。
- 137 『観世家伝来能面集』 片山九郎右衛門編。檜書店。昭和29年。
- 138 『能の展開』 南江治郎著。檜書店。昭和29年。
- 139 『世阿弥』 瀧川駿著。大学書房。昭和30年。
- 140 『狂言の道』 野村万蔵著。わんや書店。昭和30年。
- 141 『日本の能』 丸岡明著。ダヴィッド社。昭和32年。
- 142 『能楽全書』 第五卷。野上豊一郎編修・三宅襄改修。東京創元社。昭和33年。
- 143 『舞正語磨』 能楽史料第七編。表章校訂。わんや書店。昭和33年。
- 144 『能楽全書』 第一卷。野上豊一郎編修・三宅襄改修。東京創元社。昭和33年(再版)。
- 145 『観世華雪芸談』 沼艸雨著。檜書店。昭和35年。
- 146 『おもかげ 九淵閑話』 川崎勝子著。昭和36年。
- 147 『拾遺集北野本』 北野克編。端居書屋。昭和39年。
- 148 『重要美術品拾遺和歌集解説』 昭和39年。147の付録。
- 149 『能面』 白洲正子著。求龍堂。昭和39年。
- 150 『埃及詩集』 呉茂一訳。ももんが発行所。昭和40年。
- 151 『前期五十作 新興能装束』 若松華瑤著。能装束研究会。昭和41年。
- 152 『昭和四十二年うたい日記』 檜書店。昭和42年。二冊。
- 153 『小鼓とともに』 幸祥光著。わんや書店。昭和43年。
- 154 『謡曲集』 上・中・下。日本古典全書。野上豊一郎解説・田中允校註。朝日新聞社。昭和44年〔十・六・五版〕。
- 155 『明治能楽史序説』 古川久著。わんや書店。昭和44年。
- 156 『謡曲禪話』 大内青巒講述。鴻盟社。昭和45年〔訂正再版〕。
- 157 『世阿弥と能の心』 新開長英著。檜書店。昭和46年。
- 158 『謡曲集』 上。日本古典全書。野上豊一郎解説・田中允校註。朝日新聞社。昭和46年〔十二版〕。
- 159 『能と狂言の世界』 横道万里雄編。平凡社。昭和47年。
- 160 『下間少進集Ⅰ』 能楽資料集成1。法政大学能楽研究所編・西野春雄校訂。わんや書店。昭和48年。
- 161 『細川五部傳書』 能楽資料集成2。法政大学能楽研究所編・表章校訂。わんや書店。昭和48年。
- 162 『下間少進集Ⅱ』 能楽資料集成3。法政大学能楽研究所編・古川久校訂。わんや書店。昭和49年。
- 163 『世阿弥 禅竹』 日本思想大系24。表章・加藤周一校注。

- 岩波書店。昭和49年。
- 164 『法音抄Ⅱ』能楽資料集成5。法政大学能楽研究所編・西野春雄校訂。わんや書店。昭和50年。
- 165 『下間少進集Ⅲ』能楽資料集成6。法政大学能楽研究所編・片桐登校訂。わんや書店。昭和51年。
- 166 『鷺流狂言伝書宝暦女名川本萬聞書』能楽資料集成7。法政大学能楽研究所編・古川久・永井猛校訂。わんや書店。昭和52年。
- 167 『金春安照傳書』能楽資料集成9。法政大学能楽研究所編・表章・小田幸子校訂。わんや書店。昭和53年。
- 168 『能之訓蒙圖彙』能楽資料集成10。法政大学能楽研究所編・表章校訂。わんや書店。昭和55年。
- 169 『重修猿樂伝記』能楽資料集成11。法政大学能楽研究所編・片桐登校訂。わんや書店。昭和56年。
- 170 『観世流古型付集』能楽資料集成12。法政大学能楽研究所編・西野春雄校訂。わんや書店。昭和57年。
- 171 『古代エジプトへの旅』岩波グラフィックス19。鈴木八司著・仁田三夫写真。岩波書店。昭和58年。
- 172 『幸正能口伝書』能楽資料集成13。法政大学能楽研究所編・竹本幹夫校訂。わんや書店。昭和59年。
- 173 『金春安照型付集』能楽資料集成14。法政大学能楽研究所編・小田幸子校訂。わんや書店。昭和59年。
- 《出版年不明》
- 174 『国宝伎楽舞楽面大観』小川晴暘編。飛鳥園。
- 175 『謡物評釈(神楽歌評釈)』千秋季隆著。早稲田大学出版部。
- 176 『謡曲の文学的音楽的研究並番組作成法、小書』
- ※176～179は『謡曲講座』第一・二期を合冊したもの。
- 177 『謡曲の曲目、作者、古版本、假面、鼓筒、舞臺、装束其他』
- 178 『謡曲の拍子、曲位 其他』
- 179 『能楽史、狂言史、諸家系図其他』
- 180 『僕の新作能』堂本正樹著。
- B 洋書**
- 1 *EGYPT'S PLACE IN UNIVERSAL HISTORY* VOL. I.
CHRISTIANC. J. BUNSEN, D. PH. & D. C. L.
- LONGMAN, BROWN, GREEN AND LONGMANS. 1848
- 2 *THE ANCIENT EMPIRES OF THE EAST*
A. H. SAYCE. MACMILLAN AND CO. 1884
- 3 *BULLETIN DE l'Ecole Française*. Tome XI, no 5. 1-2
HANOI, IMPRIMERIE D'EXTREME-ORIENT. 1911

- † *ART IN EGYPT.* G.MASPERO.
 WILLIAM HEINEMANN. 1913
- ‡ *A GUIDE TO THE ANTIQUITIES OF UPPER EGYPT.*
 ARTHUR E.P.WEIGALL. METHUEN&CO.LTD.1913
- ☉ *PLAYS OF OLD JAPAN THE 'NŌ'.*
 MARIE C.STOPES. HEINEMANN. 1913
- † *A SHORT HISTORY OF THE EGYPTIAN PEOPLE*
 E.A.WALLIS BUDGE,M.A.,LITT.D.
 J.M.DENT&SONS LIMITED.1914
- ∞ 'NOH' OR ACCOMPLISHMENT
 ERNEST FENOLLOSA AND EZRA POUND.
 MACMILLAN AND CO.,LIMITED 1916
- ☉ *SURVEY OF THE ANCIENT WORLD*
 JAMES HENRY BREASTED,PH.D.,LL.D.
 GINN AND COMPANY.1919
- ☉ *LIFE IN ANCIENT EGYPT AND ASSYRIA*
 G.MASPERO.D.APPLETON AND COMPANY. 1919
- † *WENDINGEN MASKEVUNMER* 1920
- † *EGYPT AND ISRAEL.* W.M.FLINDERS PETRIE
 SOCIETY FOR PROMOTING CHRISTIAN KNOWLEDGE.
- 1923
- ☉ *MASKS AND DEMONS.*
 KENNETH MACGOWAN AND HERMAN ROSSE
 HARCOURT,BRACE&CO. 1923
- † *Japanische Dramen.* Wolfgang von Gettsdorff
 Eugen Diederichs Verlag in Jena. 1926
- † *MASKS MIMES & MIRACLES.* ALLARDYCE NICOLL M.A.
 GERGE G.HARRAP&COMPANY LIMITED. 1931
- † *THE FACE AND THE VOICE.* HAROLD S.DARBY,M.A.
 THE EPWORTH PRESS. 1931
- † *MASKS.* HERBERT REYNOLDS KNIFFIN.
 THE MANUAL ARTS PRESS. 1931
- ☉ *NOGAKU.JAPANESE NŌ PLAYS.*
 BEATRICE LANE SUZUKI
 JOHN MURRAY,ALBEMARLE STREET,W.1932
- ☉ *Die Welt der Maske.* Mit achtzig Tafeln
 R.PIPER&CO.VERLAG MUNCHEN. 1934
- ☉ *JAPANESE PLAYS NO-KYOGEN-KABUKI.*
 A.L.SADLER,M.A.
 ANGUS&ROBERTSON LIMITED. 1934

- 1 JAPANESE NOH PLAYS TOURIST LIBRARY:2.
TOYOICHIRO NOGAMI.
- BOARD OF TOURIST INDUSTRY JAPANESE
GOVERNMENT RAILWAYS. 1935 1冊
- 2 EL DESARROLLO DEL ARTE TEATRAL JAPONES
SHIGUETOSHI KAWATAKE 国楽文化振興会 1936
- 3 MASKS OF THE WORLD. JOSEPH GREGOR
B.T.BATSFORD LTD 1936-37.WINTER
- 4 AOI-NO-UYE DRAMMA DEL NOH
国楽文化振興会 1938
- 5 IL DRAMMA NOH. TOYOICHIRO NOGAMI.
ISTITUTO ITALIANO PER IL MEDIO ED ESTREMO
ORIENTE. 1940 (1冊)
- 6 CONTEMPORARY JAPAN A Review of Far Eastern
Affairs. VOL.X NO.11
FOREIGN AFFAIRS ASSOCIATION OF JAPAN. 1941
- 7 MONUMENTA NIPPONICA. 日本文化誌叢 上智大学
1942
- 8 LE BOUDDHISME DANS LES NO. G.RENONDEAU
HOSOKAWA PRINTING CO.,LTD.1950
- 9 JAPANESE NOH DRAMA. 日本学術振興会 1955
- 10 JAPANESE NOH DRAMA VOL.II. 日本学術振興会 1959
- 11 ZEAMI AND HIS THEORIES ON NOH
Toyoichiro Nogami,Litt.D.
Translated by Ryozo Matsumoto,M.A.,Ph.D.
繪書社 1973
- 12 THE CIVILIZATION OF THE ANCIENT EGYPTIANS
ABOTHWELL GOSSE. T.C.&C.JACK.LTD.
- 13 EGYPT FROM MENA TO FUAD GAYED'S PRACTICAL
GUIDE TO EGYPT. Riad Gayed O.N.,
- 14 MYTHS&LEGENDS OF ANCIENT EGYPT
LEWIS SPENCE. FREDERICK A.STOKES COMPANY
- 15 ORBIS PICTUS BAND13 MASKEN. (1冊)
RUDOLF UTZINGER. VERLAG ERNST WASMUTH
A.G.BERLIN
- 16 DIE MASKE. FRITZ-KLEE
Carl Scholtze(W.Jung Hans) in Leipzig

十四 雑誌

1 BULLETIN de la Societe Franco-Japonaise de Paris

- : Nos40-41 (日佛協会、大正7年)
- 2 『満蒙』第10年第7号 (中日文化協会、昭和4年7月)
 - 3 『金剛』第7号 (金剛若葉会、昭和7年7月)
 - 4 『金剛』第8号 (金剛若葉会、昭和7年8月)
 - 5 『DE DELIVER』No.10 MASKERS (昭和11年)
 - 6 BULLETIN OF EASTERN ART.No.18 三冊
(東洋美術国際研究会、昭和16年8月、野上豊一郎
『CHARACTERISTICS OF THE NOH MASK』掲載)
 - 7 『謡曲界』第56巻第6号
(謡曲界発行所、昭和18年6月、野上豊一郎「薪ノ能」掲載)
 - 8 『謡曲界』第58巻第2号 (謡曲界発行所、昭和19年2月)
 - 9 『芸能』第10巻第8号 (国学復興社、昭和19年9月)
 - 10 『文学』第12巻第10号
(岩波書店、昭和19年10月、「世阿弥能楽論研究」(二十八)
野上豊一郎座談会参加)
 - 11 『文学』第14巻第6号
(岩波書店、昭和21年7月、野上豊一郎「次第考」掲載)
 - 12 『三彩』2
(日本美術出版株式会社、昭和21年10月、野上豊一郎「能
面のよさと効果」掲載)
 - 13 『玄想』第1巻第1号 (養徳社、昭和22年3月)
 - 14 『MUSEUM』第1号 (国立博物館、昭和26年4月)
 - 15 『観世』第30巻第10号 (檜書店、昭和38年11月)
 - 16 『観世』第31巻2号 (檜書店、昭和39年2月)
 - 17 『観世』第31巻3号 (檜書店、昭和39年3月)
 - 18 『観世』第31巻5号 (檜書店、昭和39年5月)
 - 19 『universitas』第2巻第1号
(法政大学、昭和48年3月、特集・能と現代の創作劇)
 - 20 『寧楽』続刊1号 二冊
(国書刊行会、昭和48年11月、野上豊一郎「東大寺の楽舞」
掲載)
 - 21 『能楽研究』第1号 (能楽研究所、昭和49年10月)
 - 22 『能楽研究』第2号 (能楽研究所、昭和51年2月)
 - 23 『図書』第397号
(岩波書店、昭和57年9月、横道萬里雄「野上豊一郎の
三部位」掲載)
- 十五、案内・目録・プログラム**
- 1 『古代仮面装束及楽器等特別展覧会目録』
(奈良帝室博物館、明治45年4月3日)

- 2 『能楽圖書陳列品目録』
 (東京音楽学校、大正3年11月22日)
- 3 『雅楽及聲明圖書展覽会目録』
 (東京音楽学校、大正5年11月12日)
- 4 『第十一回美術展覽会陳列品目録』
 (大正6年10月16日～11月20日、文部省)
- 5 『古楽面特別展覽会目録』
 (帝室博物館、昭和9年10月16日)
- 6 『THEŌH DRAMA』プログラム 二冊
 (昭和11年11月30日、於華族会館能楽堂、国際文化振興会主催、梅若六郎〈葵上〉ほか)
- 7 『THEŌH DRAMA』詞章(同前)
- 8 能楽鑑賞の會(第九回鑑賞會)
 (昭和17年5月3日、於宝生會能楽堂、桜間金太郎〈道成寺〉)
- 9 『Ōh』プログラム
 (昭和12年8月6日、於華族会館能楽堂、国際文化振興会主催、宝生重英〈船弁慶〉)
- 10 邦彩会展御案内(昭和18年3月5日～14日、於帝劇画廊)
- 11 世阿弥・禅竹自筆本展関連資料 五点
- 12 『日本古楽面目録』(帝室博物館、昭和10年6月26日)
- 13 「書籍と印刷に現れた近代日本美術展」案内
 (主催日本出版協会、一九四七年読書週間行事)
- 14 『宗達光琳派展覽会図版目録』
 (昭和26年4月5日、朝日新聞社主催、於国立博物館)
- 15 『Ōh Play』プログラム
 (昭和26年11月29・30日、朝日新聞社主催)
- 16 『Ōh』プログラム
 (昭和29年8月6～8日、The JAPANESE CENTRE of I.T.I 主催)
- 17 桜間弓川〈関寺小町〉関係 二点
 ①「桜間弓川 関寺小町の能」プログラム(昭和30年10月1日) ②関寺小町鑑賞会世話人「能楽最高の秘曲「関寺小町」の上演にあたって御挨拶」
- 18 『川崎九淵引退披露演能記念』プログラム
 (昭和31年9月8日、於水道橋能楽堂。9月20日、於観世会館)
- 19 『能面展―附・舞楽面行道面―』図録 二冊

- (昭和54年9月29日～10月21日、神奈川県立近代美術館)
- 20 『霞会館』プログラム
(昭和56年9月23日、於宝生能楽堂、故松本謙三(一周忌)
故松本義(十三回忌) 追善)
- 21 『中世文学春季大会展示資料目録』
(法政大学能楽研究所、昭和59年5月7日)
- 22 『トロイカ』 試写会御案内
(年不明7月30日、三映社、於芝園館)
- 23 『思凡・間学』新橋演舞場編・発行(発行年不明)
- 24 わんや江島書肆チラス
(『下懸宝生流稽古本』、『芸道雑話』)
- 十六、抜刷**
本節には抜刷を収めた。野上豊一郎著、他著に分け、刊行年順に並べた。
- 《野上豊一郎著》
- 1 *MASKS OF JAPAN THE GIGAKU/BUGAKU AND NOH MASKS* 国際文化振興会 1934
2 「能面製作の極致―女面について」
(東洋美術研究会『東洋美術』第25号、昭和12年12月)
- 3 「能の仮面」(『能楽全書』第4巻抜刷)
- 4 「狂言の仮面」(『能楽全書』第5巻抜刷)
- 5 「能について」都民劇場教材(三)(昭和24年秋)
- 《他著》
- 6 「能面作家の研究」岩崎眞澄
(『史学』第3巻第4号、大正13年11月)
- 7 「能楽研究第二補遺」池内信嘉(昭和3年8月)
- 8 「美術に於ける歯牙の美的効果に就いて 特に能面『小面』に於ける考察」西田正秋(日本歯科学会雑誌第29巻第4号、昭和11年4月)
- 9 「わがシヤマニズム研究の回顧」岩井大慧
(『民族学研究』第14巻第1号、昭和24年9月)
- 10 *Il "no" di Tomoe* (田) MARCELLO MUCCIOLI
Estratto dagli Annali dell' Istituto Universitario
Orientale de Napoli Nuova Serie, Volume IV 1952
- 11 *Il "no" di Shinkwan* (俊寛) MARCELLO MUCCIOLI
Estratto dagli Annali dell' Istituto Universitario
Orientale de Napoli Nuova Serie, Volume V 1954
- 12 「フェノロサの手紙」古川久
(『比較文化』第2号別刷)

- 13 「再びフェノロサの手紙について―附、梅若實・六郎の手紙―」古川久(『比較文化』第2号別刷、昭和30年2月)
- 14 「狂言語彙(たしーひん)」古川久
(掲載誌、年月日不明)
- 15 「狂言詞集(はしらどりーひんわ…)」古川久
(『東京女子大学論集』第7巻第2号抜刷、昭和32年3月)
- 16 「狂言詞集(ふーほんぼん)」古川久
(『東京女子大学日本文学』第4巻第8号、昭和32年3月)
- 17 「欧米人の能楽研究(完)」古川久
(『比較文化研究所紀要』第5巻、昭和33年5月)
- 18 Reprinted from *THE TEXAS QUARTERLY*.
ROY E.TEEL. 1964
- 19 *IMAGE AND AMBIGUITY: THE IMPACT OF ZEN
BUDDHISM ON JAPANESE LITERATURE.*
JINICHI KONISHI Tokyo University of Education. 1973
- 20 『安宅』(修正済)野々村(修原一二)
- 十七、雑誌・新聞切抜**
本節は雑誌・新聞の切抜を収めた。大半が野上豊一郎の著で、一部他著も交じる。他著には*を付す。
- 13 「イタリアの山上都市」二部
- 12 「ソモシエラ」(柿洪)昭和18年3月1日)
- 11 「蠅とり親爺」(柿洪)昭和18年2月1日)
- 10 「パレンシア」(柿洪)昭和18年1月1日)
- 9 「世界芸術としての能 世阿弥元清の天才」
(『日本公論』、昭和17年12月号)
- 8 「能作者世阿弥元清」(『文学』昭和17年11月)
- 7 「ヴェネツィア點描」
(『日伊文化研究』VI、昭和17年5月)
- 6 「民族芸術としての能楽」
(『謡曲界』創刊第29年3月号、昭和17年3月2日)
- 5 「謡曲と狂言」
(『朝日国語文化講座4』国語芸術編、昭和16年8月25日)
- 4 「随筆『アンティゴネー』ソルボンヌ大学の学生劇」
(『文濠』法政大学文学部、昭和16年7月10日)
- 3 「能の女面」(『謡曲界』昭和16年3月1日)
- 2 「雑録 TSELIOT の "THE FAMILY REUNION"」
(掲載誌不明、昭和15年5月)
- 1 「能・狂言の笑」(『文学』昭和13年8月)
- 《雑誌》

- 〔『日伊文化研究』 XI、昭和18年3月〕
- 14 「ランスの微笑の天使」〔『柿渋』 昭和18年5月1日〕
- 15 「能の構想の合理性と非合理性」
〔『文芸』 昭和19年3月1日〕
- 16 「日水作面考」〔『八雲』 第3集、昭和19年7月〕
- 17 「次第考」〔『文学』 14巻第6号、昭和21年6月〕 二部
- 18 「能面のよさと効果」〔『三彩』 2号、昭和21年10月〕
- 19 「エリセエフ教授」〔『世界の動』 昭和21年12月〕
- 20 「色彩感覚の低下」〔『週間朝日』 昭和21年12月〕
- 21 「能と外人」〔『国際聯合』 昭和22年1月号〕
- 22 「クウイラクーチ教授」〔『八雲』 昭和22年3月〕
- 23 「名実論」〔『文芸春秋』 昭和22年3月〕
- 24 「能三十句」〔『芸林饅歩』 昭和22年6月1日〕
- 25 タイトル不明〔『紺青』 昭和22年7月1日〕
- 26 「狂言の風刺と諧謔」〔『文学』 昭和22年8月号〕
- 27 「離見の見」〔『文芸春秋』 昭和22年10月〕
- 28 「恋の音取」〔『明星』 昭和22年10月〕
- 29 「東京都新区名」
〔『放送文化』 二ノ三、昭和22年3月2日記〕
- 30 「一字言・花」〔『朝日評論』 昭和23年新年号〕
- 31 「世阿弥元清」〔『新風土』 第38号10月号〕
- 32 「日本中世の散文対話劇」〔『観世能の図』 〔『演劇』 一ノ一、年月不明〕〕
- 33 「舞台芸術」〔掲載誌、年月不明〕
- 34 * 賀昌群「漢唐間外国音楽的輸入」
〔『小説月報』 第20巻1号、年月不明〕
- 《新聞》
- 1 * 「筑波艦沈没火薬庫爆発して死傷者多数の見込」
〔報知新聞号外、大正6年1月14日〕
- 2 「能の論攷考証」〔東京朝日、昭和8年10月6日〕
- 3 「面と顔」〔九州帝国大学新聞、昭和12年10月12日〕
- 4 * 「MASKEN Eine Sammlung Willy Birgels」
〔DASREICH. 1940.11.24〕
- 5 「ローマのミネルヴァの寺（上・中・下）」
〔都新聞、昭和16年9月29～10月1日〕
- 6 「能楽の特色（上）」〔掲載紙不明、昭和17年1月20日〕
- 7 「能楽の特色（下）」〔掲載紙不明、昭和17年1月21日〕
- 8 「世阿弥元清―その人爲について―」
〔日本読書新聞、昭和17年10月19日〕
- 9 「書評・六平太芸談」〔朝日新聞、昭和17年8月26日〕

- 10 「ノエル・ペリ著「能の研究」
 (東京新聞、昭和19年7月9日)
- 11 「随想書物疎開」(掲載紙不明、昭和20年1月28日記)
- 12 「晴耕雨読」(上毛新聞、昭和20年7月23日) 二部
- 13 「古典と一般人―芸術祭に寄せて―」
 (読書新聞、昭和21年10月16日)
- 14 「能と家元制度」二部
 (毎日新聞、昭和21年5月27日)
- 15 「文化勲章の人々(一) 厳しい芸術の本道―花咲く如き
 万三郎翁の境域―」(掲載紙、年月日不明。 ※昭和21年
 授賞)
- 16 「無主風」(三田新聞、昭和22年5月10日)
- 17 「能の放れわざ(上) 鐘入」
 (東「」聞、昭和23年1月1日)
- 18 「能の放れわざ(中) 飛込」(掲載紙、年月日不明)
- 19 「能の放れわざ(下) 宙返り」(掲載紙、年月日不明)
- 20* 「野上豊一郎訳『マリ・バシキルツェフの日記』
 (二十一、十七歳)」(日本読書新聞、昭和23年7月7日)
- 21* 「パリにおける「能」公演」
 (朝日新聞、昭和24年4月28日)
- 22 「鱗形(うろこがた)」(掲載紙、年月日不明)
- 23 「野上豊一郎氏顔写真」(掲載紙、年月日不明)

十八、レコード

- 1 日本音楽集 vol.1 (国際文化振興会)
- 2 日本音楽集 vol.2 (国際文化振興会)
- 3 日本音楽集 vol.3 (国際文化振興会)
- 4 日本音楽集 vol.4 (国際文化振興会)

野上豊一郎著作目録

関 栄 司

はじめに

本目録は『能楽研究』十七号（一九九三年三月）に掲載された「野上豊一郎博士著作目録」に若干の削除と加筆をし、転載したものである。原目録は法政大学図書館・広報部・企画室に勤務された関栄司氏（故人）が一九八〇年から十年以上にわたって増補改訂し、完成させた力作である。今回、目録の転載をご許可いただいたご遺族に御礼申し上げます。（伊海）

凡例

- ▽ この目録には、野上豊一郎博士の著作を、「一、著（編）書」「二、雑誌掲載の論考・評論・随想等」「三、雑誌以外の出版物に掲載の論考・評論・随想等」「四、翻訳」「五、能楽関係の座談会」の五項に分けて列挙した。
- ▽ 同一の書名（または題名）の論考は、初出分（初版本や最初の掲載分）のみを掲出することを原則としたが、内容に改訂のあったものや、発行所の変更があったものについては、重複して掲出したものもある。ただし、著者没後の発行で、初出以外のものは省いた。
- ▽ 新聞掲載の文章、宣伝用パンフに寄せた紹介文・推薦文の類、著者校訂の英文テキスト、および著者の高等学校（旧制一高）入学以前に発表された文章は省いてある。座談会は、能楽関係のものに限って「野上豊一郎 能楽関係著作目録」（法政一九八〇年二月）掲載分を若干整理して転載した。
- ▽ 書名・題名、出版社名、掲載誌名などの文字は、発表された漢字・仮名遣いのままとしたが、印刷上の制約で旧字体の使用が困難な漢字は、新字体に代えた。
- ▽ 論文名は掲載誌の本文タイトルで採ったが、目次と異なっていたり、誤植と認められる文字を含んでいたりするものについては、適宜に取捨し、必要に応じて注記を添えてそのことに言及した。
- ▽ 一項にまとめることを原則とした継続座談会の出席者名が、その時々で違う名だったり、文字が異なったりしている場合があるが、それは、併記したり、誤りと認められる分を省いたりして、適宜に処理した。
- ▽ 発行年月日は「月」までを記載したが、月に複数冊が刊行

された雑誌については、「3月15日」などの形で日をも記した。合併号は「3・4合」などの形で示した。

▽ 著作の収録には編者の現物確認を基本としたが、僅少の未確認分がある。それについてはタイトル上部に※印を付した。

▽ 著書の『草衣集』所収の随筆には、掲載誌名未記入のまま著者が文末に執筆年月を記しているものがある。それについては上部に☆印を付し、執筆年月を()に囲んで加えた。タイトル上部に*印を付したのは、「鳩箭」「鳩箭子」のペンネームで発表されている分である。ペンネームについては末尾の「補記」を参照されたい。

▽ 単行本のうち、一点だけ初版の確認ができなかった。『自治寮生活』は「補記」の末尾に紹介した渡辺澄子氏の文によつて「明治40年3月」の発行としたが、編者の確認できたものは「明治43年3月」のものであった。

一、著(編)書(書名・出版社・発行年月の順)

※*自治寮生活

巢鴨の女「現代文藝叢書」第六編

本郷書院 明治40年3月
春陽堂 明治45年1月

近代文藝十二講「思想・文藝講話叢書」3

〈共著・生田長江、昇曙夢、森田草平〉新潮社 大正10年8月
花傳書〈世阿彌作・野上校訂〉「岩波文庫」

岩波書店 昭和2年11月
申樂談義〈世阿彌作・野上校訂〉「岩波文庫」

岩波書店 昭和3年5月
能 研究と発見 岩波書店 昭和5年2月

漱石のオセロ(夏目漱石先生評釋 OTHELLO) 鐵塔書院 昭和5年5月

蘭學事始〈杉田玄白著・野上校註〉「岩波文庫」 岩波書店 昭和5年7月

能作書・覺習條條・至花道書〈世阿彌作・野上校訂〉「岩波文庫」 岩波書店 昭和6年7月

近代文藝十二講(注)「思想・文藝講話叢書」の改訂版「新潮文庫」 新潮社 昭和8年9月

能の再生 岩波書店 昭和10年1月
ショー(G.B. SHAW)「研究社英米文學評傳叢書」72

研究社 昭和10年3月
謡曲選集(讀む能の本)「岩波文庫」 岩波書店 昭和10年5月

花傳書(改訂版)「岩波文庫」 岩波書店 昭和10年7月
解註謡曲全集(全六卷)〈野上編〉

中央公論社 昭和10年5月
世阿彌と其の藝術思想「日本精神叢書」21 昭和11年3月

- 文部省思想局 昭和11年3月
 ギリシア文學研究〈共著・呉茂一、新關良三、山田珠樹〉「新潮文庫」
 新潮社 昭和11年4月
- 能面（全十回）〈野上編〉
 岩波書店 昭和11年8月〜昭和12年7月
 （注）写真版白面、毎回「能面略解」を添付。最終回に「能面
 解説」を添付。「能面」は昭和13年4月に特製帙入セットで、
 また内容は同じであるが、「能面解説」の代わりに「NOH
 MASKS CLASSIFICATION AND EXPLANATION」を添付した
 海外版を昭和13年9月に発行。
- 翻譯論―翻譯の理論と實際― 岩波書店 昭和13年1月
 草衣集 相模書房 昭和13年6月
 世阿彌元清「創元選書」2 創元社 昭和13年12月
 能の話「岩波新書」（赤版）62 岩波書店 昭和15年4月
 世阿彌と其の藝術思想「日本精神叢書」18 文部省教學局 昭和15年7月
 西洋見學 日本評論社 昭和16年9月
 クレオパトラ エジプトの王たちと女王たち 丸岡出版社 昭和16年12月
 能樂全書（全六卷）〈野上編〉
 創元社 昭和17年7月〜昭和19年11月
- 朝鮮・臺灣・海南諸港〈共著・野上彌生子〉
 MASKS OF JAPAN THE GIGAKU, BUGAKU
 AND NOH MASKS 1934.9
- 能の幽玄と花 岩波書店 昭和18年1月
 能 二百四十番―主題と構成― 丸岡出版社 昭和18年10月
 能面論考 小山書店 昭和19年7月
 太郎冠者行状「日本叢書」61 生活社 昭和21年5月
 謡曲鑑賞 目黒書店 昭和21年6月
 シェバの女王 大臣柱 東京出版 昭和22年4月
 能百句 能樂書林 昭和22年8月
 花傳書研究 能樂書林 昭和22年8月
 エジプトの驚異 小山書店 昭和23年7月
 寶生新自傳〈野上編〉 要書房 昭和23年11月
 觀阿彌清次 能樂書林 昭和24年2月
 バーナード・ショー 要書房 昭和24年5月
 東京堂 昭和24年6月
- ※ MOMENTS WITH MODERN GREAT WRITERS 尚文堂 1913
 JAPANESE NOH PLAYS HOW TO SEE THEM
 (TOURIST LIBRARY: 2) BOARD OF TOURIST
 INDUSTRY/JAPANESE GOVERNMENT RAILWAYS
 1934.9

(注) 1937.1.1.7の帝室博物館での講演要旨。11頁。

KOKUSAI BUNKA SHINKOKAI 1937

NOH MASKS CLASSIFICATION AND EXPLANATION

IWANAMI PRESS 1938

THE NOH AND GREEK TRAGEDY

SENDAI INTERNATIONAL CULTURAL SOCIETY

1940.2

※ IL DRAMMA NOH/STTUTO ITALIANO PER

IL MEDIO ED ESTRE MO ORIENTE ROMA 1940

ZEAMI AND HIS THEORIES ON NOH

(TRANSLATEDBY RYOZO MATSUMOTO) 檜書店 1955

*自治寮生活 [中學世界] 9—5 明治39年4月

*一高自治寮生活 [中學世界] 9—6 明治39年5月

*一高自治寮生活(春の巻)

[中學世界] 9—7 明治39年6月

わが最初のキス [中學世界] 9—8 明治39年6月

スチーヴンソンを論ず(一・二)

[帝國文學] 12—6 明治39年6月

スチーヴンソンを論ず(三・四)

[帝國文學] 12—7 明治39年7月

*一高自治寮生活(夏の巻)

[中學世界] 9—10 明治39年8月

*明治文章變遷史

[中學世界] 9—15 明治39年11月

*自治寮生活後日譚

[中學世界] 10—1 明治40年1月

革命詩人 シエレー

[中學世界] 10—2 明治40年2月

(注) 目次の著者名「血川」は誤植

革命詩人 シエレー(後篇)

[中學世界] 10—5 明治40年4月

(注) 目次には「シエレイ」

[中學世界] 10—5 明治40年4月

詩人ポープ及び其の批評論 [中學世界]

文豪スエフト [中學世界]

*最近學生界の思想概観

*大學生の生活

自然派觀 [ほととぎす] 11—1 明治40年10月

小説短評(十月) [ほととぎす] 11—2 明治40年11月

寫生文の妙所 [中學世界] 11—10 明治41年8月

(注) 「妙所」が目次では「妙趣」

俳諧寺一茶	「中學世界」	11	11	明治41年9月	修善寺より(漱石氏病状記二)	「病状記二」	14	1	明治43年10月	(注)「病状記二」は坂元雪鳥
蘇國の郷土詩人	「中學世界」	11	13	明治41年10月		「ホトトギス」	14	1	明治43年10月	
バアンスの詩(評釋)	「中學世界」	11	14	明治41年11月	我等青年の行くべき道	「文章世界」	5	16	明治43年12月	
破襲	「ホトトギス」	12	4	明治42年1月	土産話	「新小説」	16	1	明治44年1月	
石菖屋の婆さん	「ホトトギス」	12	5	明治42年2月	黍の道	「ホトトギス」	14	5	明治44年1月	
床屋	「ホトトギス」	12	6	明治42年3月	或る夏の夜	「ホトトギス」	14	7	明治44年3月	
少ジヨン・ブル(英國學生氣質)	「中學世界」	12	6	明治42年3月	帝國劇場所感	「ホトトギス」	14	8	明治44年4月	
英國學生氣質(『少ヂヨンブル』中より)	「中學世界」	12	10	明治42年8月	文章は蜜柑の皮では無い	「文章世界」	6	8	明治44年6月	
鶉飼	「ホトトギス」	12	12	明治42年9月	着港前	「ホトトギス」	14	12	明治44年7月	
槍と釣針	「ホトトギス」	13	1	明治42年10月	干潮	「ホトトギス」	16	7	明治44年7月	
郊外	「新小説」	15	1	明治43年1月	一部分(去年の十月の日記より)	「新小説」	16	7	明治44年7月	
竹(Ⅱ京都)	「文章世界」	5	2	明治43年2月	青鉛筆—十月の文藝—	「ホトトギス」	15	1	明治44年10月	
ミナ	「新文藝」	2	2	明治43年3月	青鉛筆—小説の都會的スタイル—	「ホトトギス」	15	3	明治44年12月	
河	「帝國文學」	16	4	明治43年4月	囚はれざる能評	「能樂」	9	12	明治44年12月	
涼風	「ホトトギス」	13	7	明治43年4月	青鉛筆—新年の文藝—	その他—	15	5	明治45年2月	
椿	「ホトトギス」	13	9	明治43年5月	病院の窓	「ホトトギス」	15	6	明治45年3月	
崖下の家	「新文藝」	5	5	明治43年6月	青鉛筆—二月の小説—	その他—	15	6	明治45年3月	
薄暮	「新小説」	15	6	明治43年6月		「ホトトギス」	15	6	明治45年3月	
死んだ仙三郎氏	「ホトトギス」	13	11	明治43年6月	モン・ペエル	「帝國文學」	18	3	明治45年3月	
海の音	「新文藝」	7	7	明治43年8月						

浪漫主義者の群から	「小説」	17	3	明治45年3月	藝その物の人格化(櫻間左陣論)	「能楽」	12	3	大正3年3月
「春の目ざめ」を譯するに先だちて―謹直を粧ふ人々の為めに―	「モザイク」	2		明治45年6月	スケッチ	「能楽」	12	3	大正3年3月
與平君について	「ホトトギス」	15	10	明治45年7月	スケッチ	「能楽」	12	5	大正3年5月
青鉛筆	「ホトトギス」	15	11	大正1年8月	第二の戀	「小説」	19	5	大正3年5月
土曜劇場を見た所感	「ホトトギス」	15	11	大正1年8月	スケッチ	「能楽」	12	6	大正3年6月
ソニア・コワレフスキの家出					追分の高原(最も興味を惹ける旅の印象)				
	「ホトトギス」	16	2	大正1年11月		(注) アンケート 本文は「…惹きし…」			
DEBRIS	「秀才文壇」	13	2	大正2年2月	趣味と好尚 (注) アンケート	「新潮」	21	1	大正3年7月
見たき能と面白かりし能	「能楽」	11	4	大正2年4月					
(注) アンケート									
武者小路實篤論	「文章世界」	8	5	大正2年4月	スケッチ	「文章世界」	9	9	大正3年8月
旅 (注) アンケート	「文章世界」	8	9	大正2年7月	スケッチ	「能楽」	12	8	大正3年8月
是界! 是界!	「ホトトギス」	16	9	大正2年7月	新進作家と其作品(新人月旦―其四)	(注) アンケート	12	9	大正3年9月
底	「ホトトギス」	16	10	大正2年8月	挿畫	「新潮」	21	3	大正3年9月
※春の目ざめ(外國文學の研究)					挿畫	「新潮」	13	1	大正4年1月
	「秀才文壇」	13	?	大正2年10月	近代超人の第一人者―シュテンダール―	「能楽」	13	2	大正4年2月
「春の目ざめ」の英譯について									
	「モザイク」	2	10	大正2年10月		「文章世界」	10	2	大正4年2月
伊藤さんと私	「アララギ」	6	10	大正2年11月	書齋に對する希望 (注) アンケート	「新潮」	22	3	大正4年3月
「ウオーレン夫人の職業」に就て									
	「ホトトギス」	17	4	大正3年1月	ロテイと日本の女	「新潮」	22	6	大正4年6月

用語の正しい概念を定めてから

「新潮」 27―3 大正6年9月
 (寫實主義と理想主義との問題)

傳統主義を排す 「新潮」 27―5 大正6年11月

トルストイは笑はない人であった(トルストイの作品の印象)

(注) 目次は加藤朝鳥の「ハチ・ムラアト」を讀みて
 と著者名を入れ違ふ

「トルストイ研究」 2―11 大正6年11月

能樂の品位とは何であるか 「能樂」 16―1 大正7年1月

能の寫實主義―梅若萬三郎の「景清」に就て―

「能樂」 16―2 大正7年2月

自然と同化し得ざる惱み

「トルストイ研究」 3―4 大正7年4月

「漱石俳句集」について「ホトトギス」 21―7 大正7年4月

侏儒巨人―フランク・ヴェデキントに關する雑誌―

「文章世界」 13―6 大正7年6月

漱石先生の繪 「中央美術」 4―6 大正7年6月

「民衆のため」といふ意味(最近の問題となれる民衆藝術及び

其の論議に對する考察と批判) 「新潮」 28―6 大正7年6月

彼はアイロニストか(人の印象二十一・生田長江氏の印象)

「新潮」 29―4 大正7年10月

人間であることが第一(人としての生活と藝術家としての生活

との關係交渉に就ての考察) 「新潮」 29―5 大正7年11月

ボビノが王様になつた話 「赤い鳥」 1―5 大正7年11月

灰色の小人 「赤い鳥」 2―2 大正8年2月

自分を捨てることの必要―

翻譯の根本問題に關する一つの注意―

「新潮」 30―3 大正8年3月

能樂は如何に芝居化されて居るか

―歌舞伎座の山伏攝待を見て―

「能樂」 17―3 大正8年3月

能と芝居の問題 「能樂」 17―5 大正8年5月

能でなし芝居でなし

(芝居としての船辨慶／市村座に於ける梅幸吉右衛門)

「能樂」 17―6 大正8年6月

(注) 「の」は本文で題名に欠落

猫を殺した話 「赤い鳥」 3―3 大正8年9月

☆湖水めぐり (大正8年11月)

狐の智慧 「赤い鳥」 4―3 大正9年3月

馬の國 「赤い鳥」 4―5 大正9年5月

馬の國 「赤い鳥」 4―6 大正9年6月

残念な事が一つ(故岩野泡鳴氏に對する思ひ出)

「新潮」 32―6 大正9年6月

馬の國 「赤い鳥」 5―2 大正9年8月

- 隅田川の幽霊について 「能楽画報」 14-8 大正9年8月
 夏目先生の畫について―漱石遺墨展覽會の印象― 「中央公論」 35-12 大正9年11月
 性は無人格である―シオの性セキに関する意見― 「新小説」 26-1 大正10年1月
 (注) 「シオ」は「シヨオ」の誤植。目次には「性は無人格なり(シヨオの性慾觀)」とある
 假面と顔面―能樂についての一考察― 「中央公論」 36-4 大正10年4月
 能樂と狂言 「解放」 3-4 大正10年4月
 阿三郎の仇討 「赤い鳥」 6-4 大正10年4月
 消え失せた像 「金春」 1-5 大正10年5月
 スケッチ 「金春」 1-5 大正10年5月
 (注) 「桜間」左陣翁追憶號」で、表紙絵も臼川による
 翻譯可能の範圍に就て 「英語青年」 46-6 (613) 大正10年12月15日
 (注) 帝大英文学会での講演「翻譯の可能について」の
 大要
 翻譯可能の標準について 「英文學研究」 3 大正11年2月
 能面創作の心理 「能樂畫報」 16-3 大正11年3月
 森林太郎氏と明治文學 「新小説」 27-9 大正11年8月
 能は一人本位の演戲である 附 子方使用の心理について
 「角田川」の子方省略について(※「隅田川の幽霊」の改稿) 「金春」 20(3-2) 大正12年5月
 九月一日 「思想」 25 大正12年11月
 「翁」と喜劇精神 「思想」 33 大正13年7月
 エレクトラ 悲劇以前のオレステス傳説 「思想」 39 大正14年1月
 エレクトラ(完) 悲劇に於けるオレステス傳説 「思想」 42 大正14年4月
 物狂考 「思想」 48 大正14年10月
 能の戲曲的成分 「國語と國文學」 3-4 大正15年4月
 伎樂面・舞樂面及び能面 「思想」 73 昭和2年11月
 エウリピデスの女性主義 「思想」 75 昭和3年1月
 序破急の理論 「思想」 81 昭和3年7月
 Sonnetsの黒婦人(上) 「英語青年」 61-3 (790) 昭和4年5月1日
 Sonnetsの黒婦人(下) 「英語青年」 61-4 (791) 昭和4年5月15日
 表現の日本的なるもの―能の關位について― 「思想」 85 昭和4年6月
 能の遊狂精神 「社會學雜誌」 65 昭和4年9月
 世阿彌の花 「中央公論」 45-8 昭和5年8月

- 文學として見たる能 (一) 「信濃教育」 昭和6年3月
 文學として見たる能 (承前) 「信濃教育」 昭和6年4月 534
 (注) 昭和五年八月の三日間、屋代中学に於て埴科教育
 部会の為に講習されたものの筆記
- 合唱歌の非戯曲的性質―能とギリシア劇との比較―
 「思想」 114 昭和6年11月
 翻譯と能 「英文學研究」 12―1 昭和7年1月
 Bernard Shaw 書目 「英文學誌」 1 昭和7年1月
 映畫と能と日本的なるものと 「思想」 117 昭和7年2月
 能と敬老思想―能の前ジテの老翁について―
 「思想」 123 昭和7年8月
 北輕井澤挿話 「鐵塔」 1―1 昭和7年10月
 直面の問題 「謠曲界」 37―1 昭和8年1月
- THE QUINTESSENCE OF BERNARD SHAW
 (石田憲次著「バーナード・ショオ真髓」)
 「英文學研究」 13―1 昭和8年2月
 哲學者的・預言者的・諧謔者―バーナード・ショオの表現本質
 「改造」 15―4 昭和8年4月
 なぜ金春を?なぜ「巴」を? 「金春」 2―4 昭和8年4月
 幽靈の舞臺的表現―能の幽靈についての考察―
 「文學」 1―2 昭和8年5月
 かみがた五題 「經濟往來」 8―5 昭和8年5月
- ☆桂離宮
 ☆奈良二題
 法政大學と僕の問題 「中央公論」 49―2 昭和9年2月
 能の場面區分法―謠曲の戲曲的讀み方―
 「國語國文」 4―3 昭和9年3月
 「文學」 2―4 昭和9年4月
 謠曲車屋本考
 能樂改造論者 池内如翠翁 「謠曲界」 38―6 昭和9年6月
 能樂と演劇 「金春」 3―7 昭和9年7月
 (注) 朝日講堂に於ける「金春普及會」(昭和9年6月
 20日)の講演大意
 舞臺藝術の寫實主義と様式化―能の扮装様式のことから―
 「演劇學」 3―2 昭和9年7月
 B.SHAWの近業 ("TOO TRUE TO BE GOOD, VILLAGE WOOLING
 AND ON THE ROCKS.")
 「英文學研究」 14―3 昭和9年7月
 坪内博士のシェークスピア改訂『坪内逍遙譯』新修シェークス
 ピヤ全集」 「英文學研究」 14―3 昭和9年7月
 謠曲の原典批判―「車屋本考」續稿―
 「文學」 2―8 昭和9年8月
 能の自由精神と形式主義―主としてその扮装について―
 「日本精神文化」 1―7 昭和9年8月
 能と狂言の接合―間狂言の發達についての考察―

面の下	「日本精神文化」	1-8	昭和9年9月
假面劇としての能	(注) 学術講和会の講演の一節	「観世」	5-9 昭和9年9月
「幽花亭隨筆」を讀んで	「謡曲界」	40-1	昭和10年1月
STERNE ヲ BUTLER	「観世」	6-1	昭和10年1月
(岡倉由三郎著 "STERNE" ヲ 戸川秋骨著 "BUTLER")	「英文學研究」	15-1	昭和10年1月
ここかしこ	「英文學研究」	15-2	昭和10年5月
漱石先生のことども	「學苑」	2-6	昭和10年6月
(注) 現代文学教材研究会講和大意			
☆木曾斷片			(昭和10年6月)
英文學者夏目先生の片貌	「思想」	162	昭和10年11月
☆福岡斷片			(昭和10年11月)
狂言舞謡集を見て	「謡曲界」	42-2	昭和11年2月
(注) アンケート			
寺田さんと北輕井澤と淺間山	「思想」	166	昭和11年3月
☆北信早春譜			(昭和11年3月)
空中滑走をしてゐる能ー謡曲の流行と能の衰頽ー	「謡曲界」	42-4	昭和11年4月
世阿彌の花	「文學」	4-4	昭和11年4月
三月月ー觀世家本面の一(重要美術品)			
(注) 目次は「觀世流本面」			
	「観世」	7-4	昭和11年4月
小牛尉ー觀世家本面の二(美術重要品)			
(注) 目次は「觀世家本面(小牛尉)」	「観世」	7-5	昭和11年5月
英文學の感覺(土居光知著「英文學の感覺」)	「英文學研究」	16-2	昭和11年5月
☆麥			(昭和11年5月)
☆生活の朝			(昭和11年5月)
天神 赤鶴作ー觀世流本面の三(重要美術品)			
(注) 目次は「觀世宗家本面(天神)」	「観世」	7-7	昭和11年7月
能面創作の主題的動機(上)	「思想」	171	昭和11年7月
能面創作の主題的動機(下)	「思想」	171	昭和11年7月
橋姫 夜叉作ー觀世流本面の四(重要美術品)			昭和11年8月
(注) 目次は「觀世家本面(橋姫)」			
☆木曾のかけはし	「観世」	7-8	昭和11年8月
(昭和11年8月)			
新進作家三重吉	「赤い鳥」	12-3	昭和11年10月
學生謡曲コンクールを斯う見る「観世」			昭和11年11月
扶餘	「思想」	175	昭和11年12月
能の構成と近代的傾向	「文學」	5-2	昭和12年2月
金剛山膝栗毛ードラマティス・ペルソネー			

- 扶餘の遺蹟
 漱石と STERNE
 (注) 仙台、日本文学界(昭和11年5月31日)での講演大意
 こかしこ
 佛國寺
 三木清著「時代と道德」
 (注) アンケート(タイトルはない)
- 中央公論 52-2 昭和12年2月
 「思想」 177 昭和12年2月
 「英文學研究」 17-1 昭和12年2月
 「英文學研究」 17-1 昭和12年2月
 「學燈」 41-3 昭和12年3月
 「作品」 8-3 昭和12年3月
 「英文學研究」 17-1 昭和12年2月
 「學燈」 41-3 昭和12年3月
 「作品」 8-3 昭和12年3月
 能の幽玄
 蛸山先生の散歩
 日本文学の海外進出―翻譯合理化的の提案―
- 半島の旋律
 高砂
 標題の問題
 古代作家と近代作家―「書物合戦」製作の真相―
 「岩波月報」 3-25 昭和13年2月
 「文學」 6-3 昭和13年3月
 「中央公論」 53-4 昭和13年4月
- 幼友達
 能・狂言の笑
 「通小町」の姥の問題
 鷗外の翻譯的功績
 能とギリシア劇
 音と聲
 「世界文學」としての日本文學
- 「文學」 5-11 昭和12年11月
 「思想」 187 昭和12年12月
 「文藝春秋」 16-2 昭和13年2月
 「日本評論」 13-7 昭和13年6月
 「金春」 7-4 昭和13年7月
 「文學」 6-8 昭和13年8月
 「觀世」 9-8 昭和13年8月
 「圖書」 3-32 昭和13年9月
 「思想」 197 昭和13年10月
 「幸潮」 3 昭和13年11月
- 漱石の句―思ひ出― 「俳句研究」 4-4 昭和12年4月
 杉田玄白とその周圍の人たち 「文學研究」 19 昭和12年5月
 澁川六藏のこと 「文學」 5-6 昭和12年6月
 「帝國藝術院」能樂界の人選について (注) アンケート
 「謠曲界」 45-1 昭和12年7月
 「世代」 昭和12年8月
- ※漱石先生の背骨
 序文(『私の能舞臺』誌上出版記念會)
 「謠曲界」 45-2 昭和12年8月
 「私」 昭和12年8月
 「思想」 183 昭和12年8月
 「思想」 184 昭和12年9月
 「ホトトギス」 41-1 昭和12年10月
- 朝鮮の女―一つのクロッキ― 「思想」 183 昭和12年8月
 慶州斷片 「思想」 184 昭和12年9月
 祕苑(京城) 「ホトトギス」 41-1 昭和12年10月
- ☆雅樂
 (昭和12年10月)
 避難行(「動亂雜記」續稿)
 動亂雜記
 海外だより
 こかしこ
 (注) 東京中央放送局での放送講演(昭和13年9月20日)
 「圖書」 3-35 昭和13年12月
 「英文學研究」 19-1 昭和14年2月
 「金春」 8-2 昭和14年3月
 「中央公論」 55-1 昭和15年1月

プラトーン劇	〔中央公論〕	55	2	昭和15年2月	伊豫の松山	〔新風土〕	4	1	昭和16年1月
パリの鼓	〔圖書〕	5	49	昭和15年2月	期待される「話し直し」の形式 (注) アンケート				
伎楽面・セザンヌ・ルノアール	〔文學〕	8	5	昭和15年5月	女王クレオパトラ (二) (五)	〔謠曲界〕	52	1	昭和16年1月
人類最初の個人―エジプト王イクフナテンの宗教革命―	〔改造〕	22	12	昭和15年7月	女王クレオパトラ (六) (九)	〔中央公論〕	56	1	昭和16年1月
オベリスク考	〔思想〕	218		昭和15年7月	ローマ文化發祥の地―パナティーンの丘―	〔中央公論〕	56	2	昭和16年2月
オベリスク出埃及記―「オベリスク考」續稿	〔思想〕	219		昭和15年8月	(注) パナティーンはパラティーン	〔日本評論〕	16	2	昭和16年2月
T.S.ELIOT の "THE FAMILY REUNION"	〔英文學研究〕	20	2	昭和15年8月	吹雪のアルプス―ユングフラウ登山―	〔日本評論〕	16	3	昭和16年3月
聖ロヨラの寺	〔日本評論〕	15	8	昭和15年8月	能の女面	〔日本評論〕	16	3	昭和16年3月
闘牛	〔日本評論〕	15	9	昭和15年9月	「處女の木」とアブ・サルガの教會	〔謠曲界〕	52	3	昭和16年3月
ハルツの旅	〔日本評論〕	15	10	昭和15年10月		〔思想〕	226		昭和16年3月
能勢朝次著「世阿彌十六部集評譯」上	〔圖書〕	5	57	昭和15年10月	シェイクスピアの郷里	〔日本評論〕	16	4	昭和16年4月
プハロスとロドス―世界七不思議の二つ―	〔日本評論〕	15	11	昭和15年11月	ラメセス二世 附セティ一世	〔世代〕	17		昭和16年5月
キフホイザー	〔文學〕	8	11	昭和15年11月	七重文化の都市カイロ	〔日本評論〕	16	6	昭和16年6月
ヴェルダン	〔日本評論〕	15	12	昭和15年12月	西洋の能面 (一)	〔觀世〕	12	6	昭和16年6月
南歐の美觀―エトナ山、タオルミナ、カタニア―	〔日本評論〕	16	1	昭和16年1月	パルテノンの幻想	〔文學〕	9	7	昭和16年7月
					オランダ	〔文藝春秋〕	19	8	昭和16年8月
					西洋の能面 (二)	〔觀世〕	12	8	昭和16年8月

西洋の能面(三)	「觀世」	12	9	昭和16年9月	能の構想の合理性と非合理性	「文藝」	2	3	昭和20年3月
西洋の能面(四)	「觀世」	12	10	昭和16年10月	※十二使徒	「九州文學」	78		昭和20年10月
ワキの舞臺的存在理由	「謠曲界」	53	4	昭和16年10月	使徒瞥見	「文學研究」	35		昭和21年3月
西洋の能面(五)	「觀世」	13	1	昭和17年1月	次第考	「文學」	14	6	昭和21年6月
シエバの女王	「中央公論」	57	1	昭和17年1月	ゲッセマネの小童	「藝林開歩」	9		昭和21年12月
王ソロモンとシエバの女王「中央公論」		51	2	昭和17年2月	パウロと奴隸	「世界」	12		昭和21年12月
吉野の能面	「觀世」	13	2	昭和17年2月	名實論	「文藝春秋」	25	2	昭和22年3月
吉野の能面(續)	「觀世」	13	3	昭和17年3月	狂言の諷刺と諧謔	「文學」	15	8	昭和22年8月
民族藝術としての能樂	「謠曲界」	54	3	昭和17年3月	花(隨筆 一字言)	「朝日評論」	3	1	昭和23年1月
「花傳書」―解説と批判―	「文藝」	10	9	昭和17年9月	舞臺藝術(日本文化の世界的水準)				
能作者 世阿彌元清	「文學」	10	11	昭和17年11月	初心論	「人民戦線」	19	20	昭和23年3月
パレンシア(スペイン)	「澁柿」	345		昭和18年1月	泣聲を立てる石像	「觀世」	16	1	昭和24年9月
蠅とり親爺(スペイン)	「澁柿」	346		昭和18年2月	能面「喝食」について	「心」	2	9	昭和24年9月
ソモシエラ(スペイン)	「澁柿」	347		昭和18年3月		「心」	2	10	昭和24年10月
ランスの微笑の天使(フランス)	「澁柿」	349		昭和18年5月					
ヴェルサイユの小村(フランス)	「澁柿」	350		昭和18年6月					
薪ノ能―野外演能の音響効果と薪の火の照明効果、等―					三、著書、雑誌以外に発表したもの(新聞を除く)				
	「謠曲界」	56	6	昭和18年6月	大學教授時代(談)	「文豪夏目漱石」	春陽堂		大正10年4月
表紙(畫)	「謠曲界」	58	1	昭和19年1月	(注)「新小説」(大正6年1月)に発表したものの再録				
表紙(畫)	「謠曲界」	58	2	昭和19年2月	ワキ流存在價値の問題				
表紙(畫)	「謠曲界」	58	3	昭和19年3・4月合	『虞美人草』の頃	「謠曲講座」第一期第十三輯	謠曲講習會		大正15年6月
能の喜劇精神	「文學」	12	9	昭和19年9月	「漱石全集」月報 第二號	漱石全集刊行會			昭和3年4月

- ギリシア啓蒙運動
 「岩波講座 世界思潮」第五冊 岩波書店 昭和3年7月
 日本語の表現の變化
 「法政大學五十周年記念講演集」 法政大學 昭和3年9月
 大學講師時代の夏目先生
 (注)「新小説」(大正6年1月)に「大學教授時代」として発表したものの再録
 「漱石全集」月報第九號 漱石全集刊行會 昭和3年11月
 「漱石先生と謠
 漱石全集」月報第十五號 漱石全集刊行會 昭和4年5月
 南山松竹圖
 「漱石全集」月報第十八號 漱石全集刊行會 昭和4年8月
 シェイクスピアの戯曲
 「世界文學講座」第三卷 英吉利文學篇上 新潮社 昭和5年3月
 バアナアド・シヨウ
 「世界文學講座」第三卷 英吉利文學篇上 新潮社 昭和5年3月
 「聖ヂョウン」に就いて
 「近代劇全集」第三十九卷 英吉利篇 第一書房 昭和5年12月
 「アンドロクロスと獅子」及び「運命の人」に就いて
 「近代劇全集」第三十九卷 英吉利篇 第一書房 昭和5年12月
 希臘神話傳説
 「世界文學講座」第二卷 上代文學篇 新潮社 昭和6年4月
 希臘の詩
 「世界文學講座」第二卷 上代文學篇 新潮社 昭和6年4月
 希臘文學の英吉利文學に及ぼせる影響
 「世界文學講座」第二卷 上代文學篇 新潮社 昭和6年4月
 能の舞臺的特質
 「岩波講座 日本文學」第五回配本 岩波書店 昭和6年10月
 西洋文學
 「岩波講座 日本文學」第十一回配本 岩波書店 昭和7年4月
 翻譯論
 「岩波講座 世界文學」第一回配本 岩波書店 昭和7年11月
 日本に於ける西洋思想移植史
 「岩波講座 哲學」第十七回配本 岩波書店 昭和8年7月

西洋文學者の見た日本

「岩波講座 世界文學」第八回配本

岩波書店 昭和8年7月

能はいかに見るべきか―能に馴れない人のために―

「新文藝思想講座」第二巻 文藝春秋社 昭和8年11月

漱石のシェークスピア批判 『新修シェークスピア全集』別冊

「沙翁復興」第四回配本附録 中央公論社 昭和9年1月

ギリシア悲劇論

「岩波講座 世界文學」第十四回配本

岩波書店 昭和9年3月

夏目漱石の文章

「日本現代文章講座」第八巻 鑑賞篇

厚生閣 昭和9年5月

にか、をか

「讀書と散歩―文學隨想―」

帝國大學新聞社出版部 昭和9年6月

比較文學論

「岩波講座 世界文學」第十五回配本

岩波書店 昭和9年6月

ローレンス・スターンの『トリストラム・シャンディ』

「英語文學講座」第十三回配本

英語文學講座刊行會 昭和9年6月

英譯された謠曲

「英語文學講座」第十六回配本

英語文學講座刊行會 昭和9年9月

能の趣味と日本主義思想

「日本精神講座」第七巻 新潮社 昭和9年9月

「マクベス」の喜劇的救済

「沙翁復興」第十七回配本附録 中央公論社 昭和10年2月

面の下 「現代隨筆全集」第一巻 金星社 昭和10年3月

南山松竹圖 「現代隨筆全集」第一巻 金星社 昭和10年3月

漱石先生と謠 「現代隨筆全集」第一巻 金星社 昭和10年3月

逸話の謀計 「現代隨筆全集」第一巻 金星社 昭和10年3月

外來面と能面 「現代隨筆全集」第一巻 金星社 昭和10年3月

(注) 既発表のもの

漱石・「オセロー」・逍遙

「沙翁復興」第十九回配本附録 中央公論社 昭和10年4月

邯鄲男 「國語 特報」7 岩波書店 昭和11年5月

能と教育 「岩波講座 國語教育」第一回配本

岩波書店 昭和11年10月

謠曲總論 「日本趣味藝術叢書」の「謠曲藝術」篇

成美社 昭和11年12月

狂言と茶 「茶道全集」卷の十三 特殊研究篇

創元社 昭和12年4月

- 能樂と舞樂 「日本文化講座」第五輯
帝國教育會第七回世界教育會議日本事務局 昭和12年6月
- 序 (注) 松野奏風著「畫と文 私の能舞臺」の序文
「謠曲界」發行所 昭和12年6月
- 鈴木三重吉 「讀書の眼」帝國大學新聞社出版部
昭和12年11月
- 「隅田川」の能の子方の問題
「國語 特報」18 岩波書店 昭和13年2月
- 大學村の最初の十年 「北輕井澤大學村」 昭和13年8月
(注) 建設十周年の記念講演集。編集・発行は「法政大學内・山川眞吉」となっている
- 序 興文社 昭和15年12月
(注) 下島勲著「隨筆鐵齋 其他」所収の句集「薇」の序文
- 謠曲と狂言 「國語文化講座」第四卷 國語藝術篇
朝日新聞社 昭和16年8月
- 「尉面」考 「奈良叢記」 駸々堂書店 昭和17年1月
- 中世演劇 「演劇論」第二卷「日本演劇思潮」
河出書房 昭和17年9月
- 能樂研究の今昔 「能樂全書」第二卷月報
創元社 昭和17年7月
- 謠曲の構成 「能樂全書」第三卷 創元社 昭和17年11月
- 政宗の太鼓―江戸初期演能の一例―(注)「T・N生」名義
春の目ざめ フランク・ウエデキント 明治45年8月
- 「能樂全書」第三卷月報
能樂概論 「能樂全書」第一卷 創元社 昭和17年11月
- 能の假面 「能樂全書」第四卷 創元社 昭和18年3月
- 能の場面展開法 「能樂全書」第四卷 創元社 昭和18年11月
- 能と狂言 「能樂全書」第五卷 創元社 昭和19年5月
- 狂言の假面 「能樂全書」第五卷 創元社 昭和19年5月
- 明日の能 「能樂全書」第六卷月報 創元社 昭和19年11月
- 日水作面考「八雲」第三輯 評論・隨筆篇 小山書店 昭和19年7月
- 花傳書研究序説 「敍説」第一輯 小山書店 昭和22年12月
- 解説 (注)「日本古典全集」第七十八卷「謠曲集上」
朝日新聞社 昭和24年11月
- カタリ考 「市河博士還曆祝賀論文集」第四輯
研究社 昭和24年12月
- 四、翻訳(書名・原著者名・誌名・出版社、巻・号・発行年月の順)
人の命 ゴーリキー 「帝國文學」 12―5 明治39年5月
- 春の目ざめ フランク・ウエデキント 「モザイク」 3 明治45年7月
- 春の目ざめ フランク・ウエデキント 「モザイク」 4 明治45年8月

醜い求婚者 フランク・ウエデキント 「モザイク」 7 明治45年11月
お菊さんへマアダム・クリザンテエム」 ピエエル・ロテイ 新潮社 大正4年5月

邦譯 近代文學 〈小説と戯曲の翻譯集〉 「モザイク」 10 大正2年2月

答のニコライ トルストイ

「トルストイ研究」 2-8 大正6年8月

結婚論 バーナード・シヨオ 新潮社 大正6年12月

(注) タイトル・ページは「バーナード・シヨオ氏の結婚と戀愛に關する常識的意見」

青い神 ダンサニイ 「ホトトギス」 24-4 大正10年1月
春の目ざめ〈少年悲劇〉 フランク・ウエデキント

岩波書店 大正13年9月

高慢と偏見〈上巻〉 ジェーン・オースチン

『世界名作大觀』英國篇第八卷 大正15年8月

(注) 〈下巻〉は平田禿木の訳

マリ・バシユキルツエフの日記〈上〉 『世界名作大觀』各國篇第十五卷 大正15年12月

ガリヴァの旅 スウィフト

『世界名作大觀』各國編第十一卷 昭和2年6月

春の目ざめ ヴエデキント 『岩波文庫』 昭和2年8月

マリ・バシユキルツエフの日記〈下〉

『世界名作大觀』各國篇第十六卷 昭和3年2月

クランファド ギヤスケル

『世界名作大觀』英國篇第九卷 昭和3年12月

アラデインとパロミダス メエテルリンク

「詩歌」 3-4 大正2年4月

アラデインとパロミダス メエテルリンク

「詩歌」 3-5 大正2年5月

春の目ざめ〈少年悲劇〉 フランク・ウエデキント

東亞堂書房 大正3年6月

お菊さんへマダム・クリザンテム」ピエル・ロチ

『岩波文庫』 昭和4年5月

春の目ざめ ヴエデキント

『世界文學全集』第三十五卷 昭和4年11月

聖ヂョウンへ六場とエピソードの年代記劇」バーナード・シヨウ

『近代劇全集』第三十九卷 昭和5年12月

聖女ヂョウン バアナアド・シヨウ

『岩波文庫』 昭和7年8月

改譯 春の目ざめ ヴエデキント

『岩波文庫』 昭和9年8月

マクベス シェイクスピア

『岩波文庫』 昭和13年5月

ガリヴァの航海へ上」スウィフト

『岩波文庫』 昭和16年1月

ガリヴァの航海へ下」スウィフト

『岩波文庫』 昭和16年4月

ロビンソン・クルーソー(一) デフォウ

『岩波文庫』 昭和21年4月

ロビンソン・クルーソー(二) デフォウ

『岩波文庫』 昭和22年1月

マリ・バシユキルツエフの日記へ十二歳〜十七歳

『岩波文庫』 昭和22年1月

マリ・バシユキルツエフの日記へ十七歳〜二十一歳

『岩波文庫』 昭和22年1月

マリ・バシユキルツエフの日記へ二十一歳〜二十四歳

『岩波文庫』 昭和22年1月

春の目ざめへ少年悲劇」フランク・ウエデキント

學陽書房 昭和24年5月

ロビンソン・クルーソー(三) デフォウ

『岩波文庫』 昭和24年8月

ロビンソン・クルーソー(四) デフォウ

『岩波文庫』 昭和25年8月

五、能楽関係座談会

能楽放談會記事(第八回・第十一回・第十六回・第二十三回・第二十六回・第三十回)

「能楽」

10―8 大正1年8月

10―12 大正1年12月

11―4 大正2年4月

11―12 大正2年12月

12―3 大正3年3月

12―8 大正3年8月

(出席者)

芦野理學士・池内信嘉(如翠・誌主)・岡不崩・河東碧梧桐・

神津一紅・後藤鶏兒(工學士)・小早川精太郎・坂元雪鳥・

高濱虚子・竹田法學士・内藤鳴雪・野上白川・野村袋川・

中尾文次郎(清堂)・松根東洋城・松本恭三・森本義臣・山崎樂堂・

和田萬吉(曼子)・和田盛慈

(注) 出席者毎回不同、発言のない出席者もある。

世阿彌能樂論研究(一)～(十)・花傳書(風姿花傳)
〔文學〕

謡と能のかげぐち 磯部甲陽堂 大正7年4月

4-3 昭和11年3月

(注) 「能樂」連載の〈放談會筆記〉を部分的にまとめた

4-4 昭和11年4月

もの(坂元雪鳥・神田石秋編)

4-5 昭和11年5月

世阿彌十六部集輪講會

4-7 昭和11年7月

『謡曲講座』三〇九 大正15年8月 十二 昭和2年5月

4-9 昭和11年9月

(出席者)

4-11 昭和11年11月

岩倉松石・齋藤香村・坂元雪鳥・佐成謙太郎・野上白川・

5-3 昭和12年3月

野々村蘆舟・山崎樂堂・和田曼子

5-6 昭和12年6月

5-7 昭和12年7月

夏目漱石研究〈作家研究座談會(八)〉

5-11 昭和12年11月

〔新潮〕 32-4 昭和10年4月

(出席者)

(出席者) 安倍能成・小宮豊隆・金剛右京・笹野堅・新關良三・

徳田秋聲・野上豊一郎・和辻哲郎・内田百閒・湯地孝・片岡良一・

西尾實・野上豊一郎・能勢朝次・和辻哲郎

寶生新・中村武羅夫

世阿彌能樂論研究(十一)～(二十二) 花鏡

能界時局を語る座談會

〔文學〕

〔謡曲界〕 42-1 昭和11年1月

6-3 昭和13年3月

(出席者)

6-7 昭和13年7月

土岐善磨・野上豊一郎・山崎樂堂・石川欽一郎

6-12 昭和13年12月

7 | 3 昭和14年3月

7 | 5 昭和14年5月

7 | 6 昭和14年6月

8 | 11 昭和15年11月

9 | 2 昭和16年2月

9 | 6 昭和16年6月

9 | 9 昭和16年9月

10 | 5 昭和17年5月

(出席者)

安倍能成・小宮豊隆・新關良三・西尾實・

野上豊一郎・能勢朝次・藤森朋夫・和辻哲郎

世阿彌能樂論研究(二十二) 遊樂習道見風書

〔文學〕

10 | 11 昭和17年11月

11 | 3 昭和18年3月

(出席者)

安倍能成・笹野堅・新關良三・西尾實・

野上豊一郎・能勢朝次・藤森朋夫・和辻哲郎

世阿彌能樂論研究(二十四) 申樂談儀

〔文學〕

11 | 10 昭和18年10月

11 | 11 昭和18年11月

12 | 6 昭和19年6月

12 | 8 昭和19年8月

12 | 10 昭和19年10月

12 | 12 昭和19年12月

13 | 1 昭和20年1月

14 | 6 昭和21年6月

(出席者)

安倍能成・新關良三・西尾實・野上豊一郎・

能勢朝次・和辻哲郎・藤森朋夫

能樂鑑賞の座談會 〔謡曲界〕 53 | 5 昭和16年11月

(出席者)

安倍能成・有島生馬・瀧井孝作・野上豊一郎

野村万蔵・松野奏風・三宅襄・丸岡明・丸岡大二

新作「奥の細道」合評座談會 「能樂」 1 | 2 昭和19年7月

(出演者)

高濱虚子・荻原井泉水・伊東月草・長谷川かな女・野上豊一郎・

野上彌生子・江島伊兵衛・丸岡明・三宅襄・三宅藤九郎・

野村万造・櫻間金太郎

補記

ペンネームについて

著者は本名「野上豊一郎」以外に幾つかのペンネームを使用している。ここに収録したものは、発表誌ごとの違いを断わらなかつたが、列記すると「白川」「白川子」「T・N生」「久我美濃」「乃賀美」「野上豊」「鳩箭」「鳩箭子」などになる。

「白川」、「白川子」については改めて注記しないが、それ以外について、若干付記しておく。

「T・N生」は、この目録では一カ所だけであるが、著者が編集した創元社版「能楽全集」の第三巻の月報で「政宗の太鼓―江戸初期の演能の一例―」に使用している。

「久我美濃」は、布川角左衛門氏（著者と親しく、当時岩波書店におられた）に編者が直接お聞きしたところ、「野上先生はペンネームを幾つも使われており、昭和七年に発行された『岩波講座世界文學』の宣伝用パンフの文『天才の病癩』の筆者“久我美濃”は野上豊一郎である」と明言された。

「乃賀美」は、この目録に収録しなかつた分に使用されているペンネームであるが、参考までに記すと、『中學世界』第五卷第九号（明治35年7月）の懸賞論文に、賞外佳作として、「現今の試験」豊後國臼杵町平清水／野上方／乃賀美とある。

「野上豊」も、同誌の別号に、賞外の「詩」と「小説」で使用している。

「鳩箭」と「鳩箭子」については、確証はないが、著者のペンネームである可能性が極めて高い。そう考えられる理由を列記しておく。

第一に、その発音（ヘキューセン）が白川と同じであること。

第二に、その名に見える雑誌は『中學世界』であるが、同誌は著者が中学時代からたびたび投稿し、論文・英文・詩等に幾つも入賞しており（編者が確認したものでも八篇あり、五篇が入賞している）、その後もしばらく寄稿した雑誌であること。

第三に「鳩箭」は当時の旧制第一高等学校生の生活を紹介する文に使われており、「白川」と使い分けられているように考えられること。

第四に、その紹介文「一高自治寮生活」（鳩箭子名義）は必しも自叙伝ではなく、生活紹介文を主としたフィクションでありうるが、その中に次の一節があること。

…わがふる里は九州の東岸、都までは水陸三百里の片田舎：第五に、『中學世界』に初めて「自治寮生活」の秋の巻が掲載されたのは、第九卷第五号であるが、これは明治三十九年四月の発行であり、その文中の一高からの「入学許可」を左の形で紹介している。

貴下高等學校入學者選抜試験ニ依リ左ノ通り入學ヲ許可
セラレ候ニ付キ八月三十日限り入學金壹圓ヲ當該學校會
計課ニ納付セラルベシ 若シ同日限り入學金ヲ納付セザ

ルトキハ入學ノ許可ヲ取消スベシ

本通知以前既ニ他ノ文部省直轄諸學校ニ於テ入學ヲ許可セラレタル者ハ前項入學ノ許可ヲ無効トス

明治三十五年八月十一日

文部省専門學務局

これは、「文部省専門學務局」発行の公式な文面の転載と考えられるが、その発行日が「明治三十五年八月十一日」であり、著者が一高に入學したのが明治三十五年の九月であるのと符号していること。雑誌発行の四年前に自分あてに届いて手元にあった文書を、そのまま写したものに違いあるまい。

第六に、野上素一氏（御子息）にお尋ねしたところ、「それを否定する理由は見つかりませんね。そういう前後の事情から判断すると、そうである（鳩箭Ⅱ野上豊一郎）可能性はきわめて高いですね」と言われ、続けて「私が子供のころ住んでいた家には、父が鳩が好きだったので飼っていましたし、母（彌生子）も、鳩の出でくる作品を幾つか書いています」と答えられた。野上彌生子の初期の作品に「鳩公の話」「彈生と呼んだ鳩」などがあることが、素一氏の発言を裏づけている。

以上の見地から、「鳩箭」「鳩箭子」のペンネームで発表されたものは、著者の著作に相違ないものと考え、この目録にも収めたが、念のためその分は上部に＊印を付した。

なお、渡辺澄子著「野上彌生子研究」に次のような一文があ

るので、参考のため引用しておく。

「豊一郎の処女出版と思われるものに『自治寮生活』という小型本がある。扉に『此書を明治三十五年秋 余と共に第一高等学校西寮九番室に入寮したる同室者諸君に献ず』と書かれていて、寮の一年間の生活を軽快なタッチで描いている。なお序文によれば、明治三十九年春から『中学世界』に連載発表していたものを一本にまとめたものであるらしい。（中略）

『自治寮生活』は、明治四十年三月十日、本郷書店より刊行された。なお著者名は鳩箭子とあり、白川と音を同じくする別号が用いられている。」

執筆者名一覧（執筆順）

西野 春雄（ニシノ・ハルオ）

法政大学名誉教授

伊海 孝充（イカイ・タカミツ）

法政大学文学部准教授

小田 幸子（オダ・サチコ）

能狂言研究家・日本大学芸術学部非常勤講師

宮本 圭造（ミヤモト・ケイゾウ）

法政大学能楽研究所教授

深澤 希望（フカザワ・ノゾミ）

法政大学大学院博士後期課程

関 栄司（セキ・エイジ）

元法政大学職員

野上豊一郎の能楽研究
能楽研究叢書 4

2015年3月10日 印刷
2015年3月20日 発行

編集 伊海孝充

発行 共同利用・共同研究拠点「能楽の国際・学際的研究拠点」
野上記念法政大学能楽研究所
〒102-8160 東京都千代田区富士見 2-17-1
電話 03-3264-9815

印刷 照栄印刷株式会社
〒116-0001 東京都荒川区町屋 1-38-16
菱興町屋ビル
電話 03-3892-4111

